
ETHICS

カイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ETHICS

【Nコード】

N1659E

【作者名】

カイン

【あらすじ】

五十年ほど前、軍隊が苦戦した戦争をきっかけに、国際全連合が極秘に世界に向けて新たに立ち上げた司法的武装組織ETHICS。彼らにはどんな場所、状況下においても、武器の使用が許可されていて、武器の所持が認められる。活動範囲は依頼されれば世界全土どこへでも向かう。扱う事件は警察や軍隊が扱えない事件を主に行う。大きさは暴行事件から、横領のような金銭的事件、国際的テロ事件までを取り扱う。

第一節：ETHICS

今の地球の世界に酷似する世界。

オーストラリア大陸のように南に広がる大陸をエンデュオン大陸。
南北アメリカ大陸のように広がるヘイザグール大陸。

ユーラシア大陸のように北西にグランネード大陸。

その大陸一つ一つには山のように大きな巨大な三本のタワーが聳え建つ世界。

その三本はそれぞれ平和を象徴している。

そのうちの一つエンデュオン大陸にあるフリーダム・タワーから遠く離れたところに小さな街が広がっていた。

真昼間だというのに突如暴行事件が起きた。原因は酔っ払い同士のいざこざのようだ。その二人がエスカレーターについて、公共物の街灯やショップのウィンドウを壊したり、通行人に危害を加えたりしている。

市民たちは自分らに危害があるのではと、止めようにも止められずにいた。

そこにパトカーでもない一台の車がやってきた。車から数名の人が降りた。その人たちのコートの右肩には「E」と書かれてあった。その中の一人、銀色の髪をした少年が酔っ払っている二人にゆっくりと近付いていく。

「私は裁きの代行者、正義を貫く者。究極の権力なり。」

その言葉を聞くと、酔って暴れていた男達は自分の罪に気がついたのか、急に怯え出し、腰を抜かしてしまっていた。ついには酔いが抜け、顔が一気に青ざめた。次の瞬間に土下座をして過ちを認めようとした。

「殺生は余り好まない。」

土下座した二人の間の地面に剣を一突きした。

「土下座するぐらいだ。やったことぐらいはわかるよな。罪状を述

べよ。」

二人の汗はとまることなく流れている。周りの人はよく止めたとき、拍手してその銀色の髪の少年を称えていた。一人がボソボソと述べた。

「公の場所による喧嘩です。たいしたことでは……」

「それでは、あのガラスは？ 街灯は？」

二人は一切、問い詰めてくる白いコートを着た銀色の髪の男を見ようとはしない。

「私たちが壊してしまいました。」

「では罪状、器物破損の罪で連行する。」

剣を地面から抜き、鞘に戻すと、銀色の髪の少年の後ろにいた白いコートを着た人らが二人を掴み上げ、車に乗せると、車を走らせた。騒ぎが収まると、野次馬たちは自然と散っていった。

彼ら、白いコートを着た者たちは警察や軍隊とは違う。

五十年ほど前、軍隊が苦戦した戦争をきっかけに、国際全連合が極秘に世界に向けて新たに立ち上げた司法的武装組織「ETHICS」

「ETHICS」 〓 「MORAL」 〓 「道徳」という意味である。

彼らにはどんな場所、状況下においても、武器の使用が許可されていて、武器の所持が認められる。活動範囲は依頼されれば世界全土どこへでも向かう。扱う事件は警察や軍隊が扱えない事件を主に行う。大きさは暴行事件から、横領のような金銭的事件、国際的テロ事件までを取り扱う。

基本的に国民や市民が触れることは無い。

依頼をするのは、国の政府機関がほとんど。

そのためあまり国民には名前も活動も知られていない。

車は街を外れて、立ち入り禁止の策を通り、白く大きな建物の中に入ってしまった。

建物の入り口で車が止まり、白いコートを着た男を先頭に罪人二名、

その後ろに白いコートを着た二人が続いて、建物の中を歩いた。彼らは建物の中心にある大きな扉の前に立った。

「入室させてもらいます。」

扉の前で大きな声で言うのと、扉をゆっくりと開けた。

中には一人の大男がいた。机上でペン先を何度も机に突いていた。

「罪人を我の前へ。」

罪人二人は前に出て、正座をした。先頭を歩いていた男は大男の耳元で罪状を述べた。

「罪状は器物破損……今回は初連行ということもある。では更生の余地があるとして、ファシリティに連れて行け。期間は二日間。」

それを聞き入れると、罪人は急に喚いた。後ろの二人が罪人二人を押さえつけながら、ファシリティと呼ばれる場所へ連れて行った。ファシリティは並みの牢獄よりも全ての点において過酷らしいが、期間が少ない。だが今までに再犯をする人間がいないという。

「ご苦労だったセイル。」

「任務ですから。失礼します。」

セイルも大きな扉の前から出て、この大きな建物の中にある寮に向かった。部屋の扉は自動扉。前に立つとシューンと扉が開く。

寮の自分の部屋に着くと、剣を下ろし、白いコートを脱いだ。首から下がるネックレスを指の中で少しの間転がすと、私服に着替えた。ベッドに寝転がり、本を一冊取ると、それを読みだした。

「セイルー！」

部屋の中に女の子が入ってきた。と思うとセイルのいるベッドに飛び込んだ。本を読んで顔を隠すセイルの上に乗った。

「セイルー、今日はどんな事件だったの？」

「帰りがけに見つけた事件だ。たいした事件じゃない。それより下りてくれ。」

「名前を読んでくれなきゃ嫌だ。」

「解ったよ。ウィンディ、下りてくれ。」

「はーい。」

ウィンディは潔い返事をする、セイルの上からセイルの寝るベッドに降りた。

「ベッドからも降りてほしいんだが……」

「いーじゃんよ。恋人同士なんだから。」

「俺は一度もそんなことは思ったことは無い。」

「謙虚にならなくて良いのにな。もしや照れてる？」

ウィンディから顔を背けて、本の世界に集中しようとするが、それを妨げてくる。本にも集中することが出来ず、ベッドから起き上がった。

「ねえ、今日は何処行く？」

「鍛錬場だ。」

「そんなところよりさ、街の遊園地とか公園とか行こうよ。」

そう話を吹っ掛けるが、セイルは壁に掛けた剣を手にすると、部屋を出て行った。

ウィンディはムツとつまらなそうな表情を浮かべ、そのままセイルのベッドに横たわった。

セイルは寮の近くにある鍛錬場に入った。中にはセイル以外に数名の男女が鍛えていた。

「おい、セイル。彼女はどうしたんだよ？たまにはデートぐらいしてやれよ。」

何百キロもあるハンマーを振って鍛えているヴェシールという男が声をかけてきた。

「五月蠅い。それにあれとはそういう関係じゃない。」

セイルは怒りながらそういうと、一本の鉄のパイプを地面に固定させて立たせた。

鞘と剣の柄を強く握り、目を瞑り、ぶつぶつ呟きながら集中力を高めた。集中力が頂点についたとき、目を開け、鞘から剣を抜き、パイプを一刀両断した。パイプが切れたのを見ると、切れた太刀筋を見た。目ではよくわからないが触れてみると、ザラザラした感触がある。

「集中が足りないのか……疚しい事が……」

そう呟いていると、部屋にいたウィンディの事を思い出し、溜息をついた。

「おいおい、それで集中が足りないって……常人じゃ成し得ない業だぞ。」

ハンマーを置いて近寄ってくるヴェシールにセイルは刃先を向けた。

「俺たちは常人ではないけない。それを分かれ。」

「そうかよ。そういや今度、同じ位だけで小隊で行動するようになるから、お前となれば、楽が出来るぜ。」

「俺は足手まといがいなければ、誰とでも構わない。」

剣を鞘に戻し、また新しい鉄のパイプを立たせた。ヴェシールもまた何百キロもあるハンマーを手にし、上下に振り出した。セイルはあと三十分の間、パイプを両断し続け、納得がいかなまま、鍛錬場にある射撃訓練エリアに入った。射撃エリアでは無口で髪が長く、眼鏡を掛けているフザという少女がスナイパーライフルで目では霞んでしまうものを狙い討ち取っている。

「やあ、セイル君。射撃とはね、君は太刀ではないのかい？」

セイルの隣に金髪の男が立った。セイルを勝手に好敵手と思いつむエンジという少年。

「俺は上官に偏ってはいけなさと教わった。余り好まないが、しなくてはならないからな。」

「そうかい。所詮僕よりの中率が低いんだから、やめといたほうがいいぜ。」

50mも遠くに現れた小さな標的をエンジは意図も容易く、打ち抜いた。銃口から出る煙を吹いて消そうとすると、隣でセイルは大きく狙いもせず、70mも遠い標的を打ち抜いた。それを見るとエンジの顔は軽く引きつっていた。

「銃声が俺は好きじゃない。」

一発撃つと、銃を戻し、鍛錬場から出て行った。

廊下には長い掲示板があり、そこには指名手配中の顔写真が随時更

新されて張り出されている。今は800枚を越える指名手配の紙が張られている。それを眺めながら、寮に備えられている大きなシャワー室へ入った。

寮のシャワー室で汗を流し、部屋に戻ると、ベッドの上でウィンディがスースーと寝息について眠っていた。何をするわけでも無く、冷蔵庫から飲み物を取り、ソファアに座り、テレビを点けた。すぐにニュースをやっているチャンネルに変え、飲み物を飲みながら、最近の事件をじっと見ていた。テレビの音のせいか、ウィンディが目を覚ました。

「あ、お帰り。」

「部屋に戻れ。そろそろ時間だぞ。」

この寮は午後八時を過ぎると、部屋の自動扉が開かなくなるようになっていく。そのとき外にいたものは、野宿しか道は残されていない。

食べ物は午後六時から食堂が開放され、みんなそこで食べる。もしくは別の場所を買ったものを部屋で食べる。の二通りがある。飲料に関しては綺麗な水が常に水道から出るし、飲み物を買っておけば冷蔵庫に保存できる。トイレやシャワー施設も部屋には完備している。さらに言うと、午前零時になると冷蔵庫の電力以外の電気が落ちるようになっていく。

「今日は泊まってくね。」

「帰れ。」

半ば追い出すような形でウィンディを部屋から出した。やっとのことでベッドに横になることが出来、そのまま眠りに付いた。

翌朝、白いコート以外の制服を着て、眠たい目を擦りながら、食堂に向かった。パンと牛乳を取り、机に座る。

目の前にあるパンや牛乳を食べながら、眠気を消していく。

「おっはよー」

ウィンディが朝から、上機嫌でやってきた。セイルと同じメニューを取ると、セイルの隣に座った。

「朝なんだから元気にね。」

セイルは気を抜いて、パンをパクパクと食べていると、セイルのポケットにウィンディは無理やり手を突っ込んだ。

「なにをしてる？」

「朝は寒いんだもーん。」

「それじゃあお前が、パンが食べれないだろ。」

「それじゃあ食べさせてよ。」

口をあくと開けてウィンディは待っているが、セイルはスツと立ち上がり、ウィンディの手をポケットから抜くと、食事を終えて、部屋に戻った。

部屋に戻ると、白いコートをビシツと着て、剣を手にし、ブーツを履いて、とんぼ返りさながらに部屋を出た。部屋を出て向かった先は、寮から外れたところにある集会場。

そこに寮生全員が揃い、綺麗に整列ができると、集会が始まった。

「[ETHICS]に入隊して三ヶ月が経過した皆さん。本日から実践的に任務をこなしてもらいます。同じEE (Elementary Ethics) ランクの人とチームを組んで、小隊として動いてもらいます。今までは訓練で地元の街の任務のみではなく、大陸的、世界的に動いてもらいます。人数は一小隊につき、五名。では一小隊ずつ発表します。発表された人は担当上官のもとへ。」

説明を終えて、順々に発表された。セイルの名前はなかなか発表されない。だんだんと人が少なくなっていくって、どんどん小隊ができていく。

「では次、

セイル・K・ラディア、

ウィンディ・シャンベイン、

ヴェシール・R・ライド、

エンジ・デオール、

フザ・クレイア

以上。担当上官はロード・ゲール。」

セイルは名を呼ばれると、スツと動き出し、上官のロードの元に集まった。ロードはこの前、セイルが連れてきた酔っ払いに判決を下した人だった。

「お前らの担当を受け持ったロード・ゲールだ。私の指示には従うこと。」

五人は敬礼を交わした。五人には早速初任務が下された。隣の大都会にいる食い逃げで常連の男を捕らえるというのが任務だった。警察でもできそうなことだが、警察ではどうしても捕らえることが出来ないで依頼された。五人はすぐに車に乗り込み、ヴェシールがハンドルを握った。

「行くぜ。」

アクセルを踏み込み、白く聳え立つ建物から勢いよく飛び出した。「ったく、簡単な命令過ぎるぜ。セイルもそう思うだろ？」

ヴェシールは助手席に座って頬杖をついて遠くをばかりを見ているセイルに声をかけた。

「与えられた仕事を達成させるだけだ。簡単も何も無い。」

「相変わらず、無愛想なのね…」

無愛想という言葉で後部座席にいるフザの存在に気がついた。ミラー越しに見ると、セイルの後ろの席で、セイルと同じような格好で外ばかりを見ている。

「フザちゃんだっけ？ どんどんいろいろ話していこうぜ。俺たちはチームなんだからよ。」

「ええ。出来る限り。」

そういうと、イヤホンを耳につけて、音楽を聴きだした。硬い言葉がセイルに似てるなど、頭を悩ましながら運転に集中した。そのフザの隣ではウィンディが小隊初任務にキャッキヤしながら、お菓子をぱりぱり食べている。一番後ろの後部座席に座るエンジは銃をハーツと息を掛けては磨き続けている。

「このチーム、大丈夫なのか…」

二人を見ると、さらに頭を悩ました。

隣の大都会までは車で約50分。

ストレスが溜まり続けながらも、ヴェシールの運転でようやく到着した。

第一節：ETHICS（後書き）

これからもがんばらせてもらいますので、よろしくお願いします。

第二節：任務遂行

―大都会メナス―

ここはETHICS本部が近いということもあるせいか、街は高層ビルが立ち並び、車の通りが多かった。

工業技術が発達しており、最新の電化製品や新製品の車が次々と出てくる。

大都会メナスに到着すると、ひとまず人目のつかない路上に駐車し、車を降した。

セイルとフザは車から降りると、丸まって硬くなった背筋を思い切り伸ばした。背筋を伸ばすセイルの肩をエンジが叩いた。それに気づき、振り向くと、鼻の先に指先を向けられた。

「セイル！僕と君でどっちが先に捕まえられるか勝負しようじゃないか？」

「構わないが、全体に迷惑を掛けることになるからな。やめたほうが良いぞ。」

「知ったこっちゃねえよ。じゃあ午後三時になるまでに食い逃げ犯を捕らえること。」

僕が勝ったら、お前は僕の舎弟、お前が勝ったら、……ひ、一つだけ言う事を聞いてやる。じゃーな。」

エンジは素晴らしい残すと、タッタと駆けて、人ごみの中へと消えていった。四人はあまり他の人に明かされぬよう白いコートを車の中に置いた。

ヴェシールは大きな目の鞆を担いだ。

「俺たちも動くぞ。」

四人は横に一列に並び、街の中へと進んでいった。任務中にもかかわらず、フザはイヤホンをつけて、音楽を聴きだし、ウィンディはセイルの腕と自分の腕と組んだ。

「こうやって歩こっ！」

セイルはウィンディの彼女面にこみ上げる怒りの感情を抑えながら、そのまま都会の中心部まで歩いていった。

中心部へ着くと、セイルはウィンディの腕を振り払い、ヴェシールが背負っている鞆から小さなファイルを取り出した。

「犯人は毎度違うレストランで食い逃げをするという。このリストに載っていない店に当たること。」

そういつてセイルは、ファイルを三人にそれぞれ一つずつ配った。「ここからは手分けをして探す。犯人を見つけ次第、このイアーシーバを使って連絡をすること。常に耳に掛けて、通信が行えるようにしておけ。」

フザも音楽を聴いてる場合じゃないぞ。解散だ。」

セイルはそういうと、ファイルを手にして、人ごみの中へと溶け込んでいった。

イアーシーバとは、ETHICSにいる科学者が独自に作り出した通信機である。ETHICSに所属している者には全員に渡されている。

これは小型トランシーバーで常に耳に掛けて使うことが出来る。トランシーバー同様、スイッチを押しながら話せば、自分の声が通り、押さなければ、常に受信状態にある。

半径100km圏内であれば、問題なく通信を行うことが出来る画期的なアイテムの一つである。

三人もセイルの指示に従い、それぞれ別の道に進み、探すことになった。

フザは片耳をイアーシーバ、もう片方は音楽を聴きながら、一番高いビルの上へ向かい、肩に背負っていた組立式のスナイパーライフルからターゲットスコップだけをもち、それを覗いて、食い逃げが起きて騒ぎになっていないか探した。

「さて、どこにいるのかしら。」

聴いている音楽に合わせて、鼻歌を歌いながら、探しているが全く見つからない。その代わりに歩いて捜索中のセイルを見つけた。

「あ、セイルだ。後姿も格好良いな…」

そう呟いたとき、自分のすぐ周りに誰かいなかった、辺りを警戒してしまった。

警戒を解き、もう一度ターゲットスコップを覗くが、すでにそこにはセイルはいなかった。そんなことにちよつと肩を落とした。

ウィンディはコンビニで使い捨てカメラを買い、辺りをキョロキョロしていた。そして一軒のお店を見つけた。

ゆっくり近付き、そのお店の看板をジッと眺めた。

「これはテレビで見たことがある。」

道行く人に声をかけて、事情を話して写真を撮ってくれる人にカメラを手渡した。

そのお店を背にしてウィンディがポーズを取った。そこでシャッターを切ってもらった。

「ありがとうございます。」

お辞儀までしっかりとして、またキョロキョロとテレビで見た事のある建物を探した。

「あーあ。セイルと写りたかったな。」

そうぼやきながら、歩き続けると、またテレビで見たことの有る建物を見つけると、カメラを道行く人に渡して、写真を撮ってもらっていた。

ヴェシールは特にたいしたことはなく、真面目にファイルのリストと名前を照らし合わせて、食い逃げ犯を捜していた。

セイルもまた真面目に捜索していた。まだ食い逃げにやられずに繁盛しているぼんくらという店に入り、店員と事情を話して店長に

出てきてもらった。

柄の悪そうな店長と話をした。

「店長のリグニッド・アソレムです。」

「どうも。セイル・K・ラディアです。早速ですが最近、この街に連続食い逃げ犯がいると聞いたのですけど、まだ被害にはあつてはいませんか？」

「警察か？まあいいが、うちには来てねえよ。」

「それならいいのですが、被害にあった際には連絡を。」

「わかったから。さっさと帰ってくれ。」

セイルは店内を見回した。沢山の人がワイワイと賑やかに食事していて、お店が満席でまだ食べられず、外にも人が並んでいる。

「このお店、随分繁盛してますね。それに沢山のメニューがありますし。」

「そりゃあ、この辺はお店多いですし。負けてられませんからね。」

「そうですよね、ではこれを一つ下さい。」

メニューのラーメンを指差しを確認すると、店長は厨房に戻り、二十分ほどしてラーメンを作り上げた。ラーメンをテーブルの前に出され、セイルは割り箸を使って、食べ始めた。

「おいしいですね。」

おいしさのあまり、箸は止まることを忘れて、麺を口へと運んでいく。チャーシューやスープを食べ終えたと、勘定を置いて、すぐに店を出た。

そのあとすぐにファイルを開き、今度は逆にリストにあるお店へ向かった。

そのお店に先ほどの店の傍にあり、入ってみると、客は一人もおらず、机や椅子には薄く埃が被っていた。

セイルの顔を見ると店の店主がサササッと出てきた。

「お客さん。何をご注文で？」

「そんなことより、話がしたい。食い逃げにあったのはいつですか

？」

「二ヶ月も前だ。それにその事件以来だんだんと客は来なくなつて、ついにはこうなつちまつた。」

「何故ですか？」

「そんなことわかるかよ。それに食い逃げをやられたあと、調理場のほうで火災が起きたんだ。消したと思つたけど、慌ててみたいで……」

「その現場は今でも見れますか？」

「ええ。ある程度綺麗にしましたけど、まだ跡は何箇所もありますよ。」

セイルは厨房に案内された。火災のあとを見て、セイルは黙ってしまった。

「どうしました？」

「いや構わない。それよりラーメンを少量作れるか？御代はちゃんと払う。」

ヘイと喜んで店主は言うど、チャツチャカとラーメンを作り上げた。見た目は先ほどのお店と同じラーメンだった。

ズブーっとラーメンを食べてみて、スープも飲み干すと、何か核心を得た。

「やっぱりそうか。」

耳のイアーシーバのスイッチを押して、声を発した。

「こちらはセイル。今すぐ、ぼんくらという店に迎え。犯人はそこにいる。」

そう言い終わり、指を離した途端、急にパリンパリンと誰かがお店の窓ガラスを割った。

「ほう。早速お出ましか？」

セイルはポケットからサツと十数枚の紙幣を机の上に置き、店の外に飛び出た。外に出ると黒いスーツを着た数名の男達がいた。

「犯人の手先か？」

「殺せ！」

何丁もののピストルから銃弾が放たれてくる。

「究極の権力に楯突くとはな。知恵のない奴らだ。」

眼を見開き、鞘から剣を抜いた途端、神風のごとく、放たれてきた銃弾を全て斬りおとした。

「まだやるか？」

「恐れるな！やれ！！」

「ならば正義の名において、ケガを負わすことを許可されている。」
剣の刃をセイルに向け、峰を相手に向けて構えた。再び放たれてきた銃弾を次々と野球のように打ち返した。

返された銃弾は黒いスーツの足や手に当たった。動けなくなった黒いスーツの男達にゆっくりと近付いた。

「初めまして。私は司法的権力を持つETHICSだ。貴方達は公務執行妨害及び器物破損、殺人未遂の罪とし捕獲する。」

ETHICSと聞かされた途端、銃に撃たれた痛みよりも恐怖が彼らを襲った。するとアイシーバに通信が入った。

「ヴェシールだ。今、エンジを除く三人が店の前に到着した。」

「わかった。裏から回れ。ただし頭は殺すな。ではすぐに向かう。」
それだけ言うと、すぐに通信を切断した。セイルは続けて別の人間と通信を取りあった。

「お前らは別の者に連行してもらおうよう頼んだ。逃げれば命は無いと思え。」

そう言い告げると、さきほどラーメンを食べたぼんくらの店にゆっくりと戻った。セイルが暴れた騒ぎは辺りをガヤガヤと賑やかにしていた。

だがセイルは気にすることなく、歩き続けた。店の前には山のような野次馬がたかっていた。

「着いたな。」

野次馬を避けて進むとするのだが、中々入ることが出来ない。

セイルは二歩三歩と下がって、急に駆け出し、野次馬たちの肩を次から次へと足場にして飛び、店の入り口に足を着けた。肩を足場にしたらせいで、野次馬たちから反感を買ってしまった。

「てめえ、何してくれてんだ！」

「そんな忍者みてえなことしてんじゃねえよ。」

セイルは怒りで吠える野次馬たちを見て、フツと笑いが零れた。その笑みを見て、また野次馬たちは怒りを増幅させた。

「たかが野次馬が。てめえらみたいのが束になってかかってきても、俺には到底届かねえ。齒向かうものはいらなら、さっさと挑め。」

あまりもの恐怖、覇気に野次馬たちの吠えはピタッと止まった。それを見ると、セイルは店の中へと入った。店の中には幾つも死体が転がっていた。

「あいつら……やりすぎだ。」

だがここにはヴェシールたちがいない。二階から銃声が聞こえる。セイルは階段を上って、二階へと向かった。

「抵抗するな。」

ヴェシールの声が聞こえた。

「五月蠅い。黙れ！黙れ！」

頭らしき人の声がする。部屋を覗いてみると、頭はピストルを構えている。その前でフザが頭の脳天を狙っている。

他に逃げられる場所とは見てみると、すでにヴェシールとウィンディに囲まれていて、もう逃げることが出来ないでいた。そこにスタスタとセイルが足を踏み入れた。

「ここまで追い込まれて、まだピストルを構えてるのか？」

「お、お前！！」

「他人の店から味を盗んで、すぐには復帰できないようにキッチンで火事を起こして。最後に止めを刺すように悪い噂でも流したんじゃないですか？」

ばんくらの店長さん。いや営業妨害、放火さらに殺人及びテロ行為で指名手配中のソレッド・グリニウムさん。」

「なんだ、その名前は？私はリグニッド・アソレムだぞ。」

「そんな名前、簡単なアナグラムだ。それに少し整形をしたぐらいでは、俺の目はごまかせない。」

セイルは表情一つ変えず、ソレッドに近付いていく。途中フザの持つライフルの銃口を下ろした。

それを見ていると、ソレッドのピストルを持つ腕はだんだんと震え出した。

「く、来るな！！」

セイルに向けていたピストルをソレッドは恐怖から逃げるように自分の米神に向けた。

「殺させはしない。」

そういうと、セイルは目にも止まらぬ早業で銃をバラバラに斬った。

「ソレッド・グリニウム。営業妨害、放火、殺人及びテロ行為の容疑で捕獲する。」

この部屋にあった縄で縛りつけ、ヴェシールがそれを担ぎ上げて、店の裏から外へ出た。人ごみを避けながら、何とか自分らの車が止めてある所へと戻ってきた。

ソレッドを後部座席に乗せて、四人は車に乗り込んだ。セイルは車に着いている時計を見た。

「午後一時三十分。あいつは何時戻ってくるのかね。」

そう呟くと、ダッシュボードの上に足を乗せて、コートを毛布代わりにして眠り出した。

隣の運転席でヴェシールはイアーシーバで連絡をして、戻ってくるよう言った。街中から走って戻って気たエンジを車に乗せると、すぐに発進した。

「しかし、よく指名手配犯なんてわかるよな。俺なんか全然気づかなかったぜ。」

セイルに話しかけようとするが、セイルが眠っているため、悲しい独り言となってしまうた。

「私も気づかなかった。毎日指名手配犯リスト見てるのに…」

フザがボソツとヴェシールの話に参加していた。フザからの返事に少し気を取り戻した。

「聞いてたのか？セイルは何か普通のETHICSと違うよな。」

うんと頷いた。その後ろではウィンディとエンジンが指名手配犯を弄くっていた。

車は何もない平原を走り続け、夕刻を終えようとしていた頃、ようやく本部へと車は到着した。ヴェシールはセイルの肩を揺らし、目を覚まさせた。

車の外に出て、縮こまっていた体を伸ばそうとセイルは思い切り、背筋を伸ばした。するとまたエンジンが肩を叩いた。

「僕は君に勝つことが出来なかった。さあ、何か一つ命令するが良い。」

「ならもう俺を勝手にライバル視するな。」

そう言い去ると、セイルは縄で縛られているソレッドを担いだヴェシールと一緒に本部の建物の中に入っていった。

それに続いて、ウィンディとフザも入っていった。エンジンはタイヤの横でズーンと重い空気の中、ずっと落ち込んでいた。

第二節：任務遂行（後書き）

更新はこんな感じになってしまいましたが、応援お願いします。

第三節：セイルの過去

ETHICS本部に帰ってきて、の中央にある茶色い大きな扉を開けると、中ではロード・ゲールが頼杖について待っていた。

「セイル、少し遅いのでは？」

「ですが任務は遂行しました。」

ヴェシールが肩に担いだソレッドをドシッと落とした。

「ほう、ソレッド・グリニウムだったか？」

「なんで指名手配になったの？だってこの人はシェフなんだよ。」

ウィンディが垢抜けた声で聞いてきた。

「教えてやる。こいつは俺がまだ軍人だった時に潰したテロ組織蛇　という組織の幹部をしていた。」

この組織は何かあっては小型爆弾でテロ活動を繰り返してきた。組織全体は潰したが、この男ともう一人にだけ逃げられてしまったのだよ。

整形までして、どんだけ自分の身分を隠そうと思ったのかわからないが、ついに捕まったな。ここからは我々の仕事だ。帰ってよい。」

セイルたちは敬礼をすると、茶色い大きな扉の部屋から出た。

「今日は解散だな。それじゃ。」

ヴェシールはそういうと、自分の無力さを感じてすぐに鍛錬場に走った。

セイルは自分で肩を揉みながら、部屋に戻っていった。ウィンディも付いていこうとするがあっさりと拒否されてしまった。

仕方なく、フザと一緒に図書館へ向かっていった。

茶色い大きな扉の中ではセイルたちの声が扉のそばから消えると、ロードはソレッドに話し始めた。

「しかしハマしたな。」

ロードは手錠をかけて、縄を解いた。向かい合って座れる机の前に二人は座り、ロードはコーヒートを差し出した。

「あのセイルってガキは誰だ？」

「お前の事を根に持ってる奴だ。たぶん今でも覚えてるだろう。」
「ってことは……あのときのガキか……」

……10年前

オーダバールと呼ばれる街でテロ組織 蛇 によるテロ活動が行われた。

その中にはセイルが今日捕まえたソレッドもいた。爆破で崩れた瓦礫の山の上に立ち、ライフルの銃弾を空に放っていた。

「どんどんやっちゃまえ！！こんな国、滅びるが果てだ！！」

その声に従い、車で建物に突っ込んだり、手榴弾を投げつけ建物を破壊していく。

悲鳴を上げながら逃げ回る人々を蟻を踏み潰すように、撃ち殺していた。

「テロ活動を中止しなさい！！」

地元の警察がヘリコプターに搭乗して、マイクを使って要請してくる。

幹部のソレッドが顎で指示すると、ソレッドの部下の一人がロケットランチャーを手に、ヘリコプター目掛けて放った。

ヘリコプターは被弾し、空で爆発した。その光景を見て、ソレッドたちは酒の入ったグラスで乾杯しながら、大笑いしていた。

「警察なんて、くそくらいだ。」

すると遠くからガガとキャタピラが動く音が聞こえた。その音を聞いて、酒の入ったグラスを地面に叩きつけた。

「おっと、今度は軍隊のお出ましか……」

戦車が一台、また一台と到着した。戦車から一人の男が降りてきた。その姿は若き頃のロードだった。

若きロードはETHICSには所属しておらず、軍人の一人として活躍していた。

「ちっ、ロードの野郎だ。野郎共、ずらかるぞ。」

その言葉を合図にいつせいに逃げ出した。さらに積んであったオイルを撒いて、火をつけると、その場から逃げ去った。

声が届かなかった辺りにいた部下もそれを見て、続いて逃げ出していく。

「一人残らず、全員を捕らえるんだ。」

ロードの声に軍人が一斉に動き出した。テロを起こしていた人たちが次々と捕まっていく。

時々捕まった人が手元で手榴弾を爆発させ、同士討ちや自害を図るものもいた。だがやつのことで、テロ集団を全員捕らえることが出来た。

「これで組織も解散だな。」

「しかしロード大佐、頭のササニルと幹部のソレッドの姿がありませんが……」

「逃したとはいえ、たった数名だ。泳がせても問題はないだろう。仕切るしか能がないからな。」

ロードは捕らえたテロ集団のライフルを手にし、銃口を頭に向けた。テロ集団はいざ殺されるとなると、脅え震えた。

「コレぐらいでビビッてんじゃねえぞ。お前らはこれ以上の事をしてきたんだ。どんな死に方をしても、文句はねえよな。」

「け、威嚇か。そんなもん通用すつかよ。」

テロ集団の一人の相手を馬鹿にした声に、後から続々と同じように罵声を上げた。

次の瞬間、ロードは銃口を向けた一人に銃を放った。

それにはさすがのテロ集団も怖気づいていた。

一人の軍人が瓦礫の下に動きがあるのを見つけた。

屈んで覗き込んでみると、そこには頭から血を流している少年の姿があった。

そこから脱出しようともがき苦しんでいた。

「大佐！少年がいます！！」

「総がかりで救い出せ！！」

瓦礫をバケツリレーの要領で、次々と下ろしていき、重いものは何人も的人数を掛けて下ろし、遂に少年の姿が見えるまでに瓦礫を崩すことが出来た。

少年の上には大人二人が覆い重なっていた。きっと両親だろう。子を護ろうと二人がかりで、かぶさっていたが、落ちてきたものの当たり所が悪く、死んでしまったようだ。

「とにかく子供を救い出せ。」

軍人が拾い上げようとすると、少年は機敏に動き出した。軍人からライフルを奪い取り、銃口で頭をぶん殴った。

「取り押さえろ!!!」

ロードの言葉に軍人達は抑えかかろうと動き出すが、少年の動きに意図も容易く翻弄されてしまった。

少年はその翻弄させた動き中で、軍人の持つサーベルを抜き取り、一人の軍人の背中を斬りつけた。

「復讐してやる。」

持っているライフルを乱射した。そのいくつかの銃弾は、軍人や捕らえたテロ集団に当たってしまったている。

「なんと末恐ろしい子なのか。私が行く。」

ロードは剣を手にし、子供にゆっくりと近づいた。

乱射していたライフルは弾切れになり、ライフルを捨てて、サーベルを両手で握り、ロードの持つ剣にぶつけた。

そのときの衝撃で崩れかけていた建物が一気に倒壊した。一太刀を交じり合わせた瞬間、ロードは感じた。

「筋が良すぎるな。この少年は。」

子供はウーウーと言いながら、押し合うが子供と大人では歴然の力の差があった。

子供は一瞬の隙を突いて、ロードの心臓を目掛けて、突き刺した。

「調子に乗るな。ガキが!」

剣で刃の刺す場所を弾き変え、剣を捨て、その手で少年の胸倉を掴み、動きを止めた。

「大佐……」

ロードの左腕から、血がポタポタと流れていた。

「騒ぐな。これぐらいで死なん。」

少年はいくら噛み付いたり、暴れようとも、ロードの手からは逃れることは出来なかった。

「この少年を連れて帰る。麻酔を撃て。」

少年の後ろから注射で麻酔薬を注入した。麻酔にはすぐかかり、ガクツと倒れると手錠をしてその少年を車に乗せた。

その功績を認められ、ロードは後にETHICSに入隊し、今の地位を得ている。

……

「そういうことだ。では裁きの代行者として、裁きを下す。ファシリティに十日間。」

ソレッドは少ない数字を聞いて、フツと笑った。

「そんだけでいいのか？」

「ファシリティから出てきたとき、お前は廃人と化す。普段の生活に戻るかな？」

ソレッドを立ち上がらせ、茶色い大きな扉の部屋から出て、本部の地下の奥の奥にある蝋燭の明かりしか明かりがない冷たい鋼鉄の扉の前に立った。

「この先に広がるファシリティに十日間だ。せいぜい生きろ。」

ゆっくりと開いた。向こうからはおぞましい気がどんどん漂ってくる。

ソレッドは扉の中を見て、体がだんだんと固まってくる。そのせいで自分からは進めなかった。

ロードに体をポンと押され、鋼鉄の扉の中へと入った。この扉は閉められると、中からはどうしようにも開けられない。

扉を閉めた瞬間、ソレッドの悲鳴が冷たい鋼鉄の扉の向こうから響いて聞こえた。

部屋に戻ったセイルはベッドに横たわり、暗い部屋の天井をずっと眺めていた。

テレビも点けっぱなしで、ニュース番組を聞いていた。

子供が殺されるだの、老人が殺されるだので、碌なことは何一つ流れない。

日は暮れて夜になり、部屋の扉はロックされた。

何を考えるわけでもなく、眠りに着いた。

第三節：セイルの過去（後書き）

ホントにのんびりとした更新で、楽しみ？にしてください方には本当にすいません。

第四節：裁きを下す者

次の日、ある朗報が流れた。朝食の間、各テーブルはその話題で持ちきりだった。

「裁きを下す者がここに来るらしいぞ。」

「本当か？でも今なんでここに来るんだ？」

「それだけ、重い犯罪者がいるってことだろ。」

隣のテーブルの話を聞きながら、セイルは朝食のパンをモグモグと食べていた。

「ねえねえ、裁きを下す者ってどんな人なのかな？しわしわのおじいちゃんとかかな？」

ウィンディが隣でニコニコしながら、話をかけてきた。その前でフザがウィンディを睨みながら、パンを食べ続けている。

「セイルはどう思うんだ？どんな感じのやつだと思う？」

フザの隣で食べているヴェシールが、セイルに話しかけた。

「たぶん俺らと年齢が近いだろうな。年齢だけが、役職ではないかな。」

それだけ言うと、食事を食べ終え、席を離れた。寮の部屋に戻る途中、ロードに足を止められた。

「セイル、やったな。裁きを下す者がお前に会いたいといっている。正装に着替えたなら、付いて来るんだ。」

コクツと頷くとセイルは従順に動き、正装をきちっと整えるとロードに付いて行った。

着いた先は本部の最上階。ここには自分と同じ位のETHICSは絶対来ないだろう。

例えロードと同じ位の人もここへ来ることはないだろう。

そして着いたのは見たことも無いような真っ白な扉の前だった。

「ここは裁きを下す者の部屋だ。ここではどんな些細なことでもした場合、命がないと思え。」

コクツと頷くと、ロードはゆっくりと真っ白な扉を開いた。眩い光が差し込んでくる。

扉の中にはこの建物にいる全ての上官がすでに揃っていた。その奥にある机に一人の男が座っていた。

「セイル・K・ラディア君だね。よく来てくれた。」

その容姿はセイルの言ったとおり、同じ年ぐらいの青年だった。セイルは頭を深く下げ、上官たちの行に並んだ。

「私がここにきたのはある情報が耳に入ったからだ。それはこの世界に立つ三本の塔を破壊するというテロ声明が流れた。

真実かは不明だが、注意をしてもらいたい。その中のフリーダム・タワーのそばにあるこの本部に私がここに着くことになった。

テロ事件が未遂でも終了が確認できるまではここにいさせてもらおうよ。それと毎日、上官とその小隊による監視をするように。」

裁きを下す者の言葉が終えられると、上官たちは一斉に敬礼をした。

「では本日より交代制で、見張りに着くように。セイル・K・ラディア君を残して解散。」

そういつて二度手を叩いた。上官たちは頭を下げ、真っ白な扉の部屋を出た。

他の上官たちが出ると、裁きを下す者は立ち上がり、会談が出来る机の椅子に足を抱えて座った。

「楽にして、座れ。」

セイルは指示に従い、向かいの席に座った。

隣の部屋から秘書の女性が、コーヒーを持って部屋に入ってきた。それをガラステーブルの上に二つ置いた。置くと、話を聞くまいと静かに隣の部屋に戻った。

「君に話があるといったのは、他でもない。実はETHICSという組織は君の存在を狙っている。」

「狙うとは？」

裁きを下す者はティースプーンでコーヒーを回し、チビチビと飲

みだした。セイルもそれをゆつくりと飲んだ。

「君は無名ながらも名の知れたテロ組織の幹部、それに訓練生時代にも指名手配者を捕らえた実績を上げている。」

それに君のその冷静な理性で抑えている能力も買っているのだがな。

「

「何が言いたい？」

セイルは冷酷な目で裁きを下すものを睨んだ。飲んでいたコーヒーをガラステーブルに置いた。

「君の行動は人一倍に目をつけられている。生活、任務中には気を配った方がよい。それにそんな目はやめろ。私の方が各位は上だ。」

今度は三度手を叩き、隣の部屋から秘書が包装された大きなモノを持ってきた。

「テロ組織 蛇 の幹部捕らえたとして、この刀を褒美とする。受け取れ。」

秘書からセイルへと渡された。何重にも包装紙に包まれているが、何かがセイルの心にドーンと重くのしかかった。

「立派な名刀だ。しっかりといかせ。」

セイルは立ち上がり、その部屋を後にした。秘所はセイルが出て行くのを見ると、裁きを下す者に声をかけた。

「ETHICSが世界平和を訪れさせることはできるのでしょうか？。」

「そんなことよりミルクをくれ。苦すぎる。」

秘書はバタバタと動き出し、隣の部屋からミルクを持ってきた。

第四節：裁きを下す者（後書き）

連続で本日中に更新します。

少し短めですがよろしくお願いします。

第五節…失態

セイルは急いで寮の部屋に戻り、その剣を壁に立てかけた。

ベッドを見てみると、ベッドの布団が人の形状に盛り上がっている。

「何やってんだ？」

きつとあいつだろうという意識で、バサツと布団をのけると、バアッとウィンディが顔を出した。

いつもの調子かとそのまま部屋のキッチンの冷蔵庫に入っている缶コーヒーを取り出して、プシュッと開けるとグビグビ飲みだした。ウィンディはベッドから降りて、ニコニコとセイルのいるキッチンに入った。

「ねーねー。今日はさ、どんな任務なんだろうね。」

「任務があると分かっているなら、さっさと用意しろ。」

いつも持っている剣を手にし、正装を簡単に崩した。

「あれは持っていないの？」

ウィンディが指差すのは包装紙に包まれた褒美の刀。

「いいんだ。早く用意しろ。」

キッチンから出て、包装された刀を手にして、それを手渡そうと差し出した。

「折角なんだし、持っていきなよ。」

包装が剥けて、刀が見えているところがある。

セイルはそこを見ていると、自分の生命を吸わているような苦しさがやってくる。

それを払い捨て、刀が床に転げ落ちた。セイルの左側の瞳が真っ赤な瞳になっていた。

だんだんと冷静になり、その片目を手で覆いながら、ウィンディに背を向けた。

「早く行くぞ。」

ウィンディは怒らせてしまったと勘違いし、シュンと小さくなっ

てしまった。

すでに三人はロードの前に集結していた。二人が来るのを確認すると、ロードは任務の書かれた書物を読み上げた。

「では次の任務だ。最近、各地から原油ばかりを盗む集団が現れた。」

「軍隊は出ないのか？」

「狙撃をして、もし原油が詰まっているタンクに穴が開いたりなどして、爆発や海に原油を撒く等、大惨事になりかねない。

それに原油という大事な資源を消滅させては、世界は辛いからな。原油に注意をはりながら、任務を遂行してくれ。」

五人は敬礼をすると、車に乗り込み、ディテノ街の港に向かった。「なんで原油なんか盗むんだろうな？」

運転席のヴェシールの隣にはいつものようにセイルが座っていた。セイルはまだ片目を覆い隠していた。

「原油は経済発展には欠かせないアイテムだ。それでその集団は原油を発展中の国を相手に取引を行っているはずだ。

それに原油を盗むなら、タンカーのような原油を積む巨大な船が必要だ。」

「タンカーか。でもあんなでかいのじゃ、すぐばれちゃうぜ。」

「その通り。不思議だ。」

二人の後ろの席では、ウィンディがまだしょぼくれていた。

「どうしたのウィンディ？」

隣に座るフザがウィンディの異変に気づいた。ウィンディはフザの耳元に小声でボソボソっと話した。

「あのね…セイルを怒らしちゃったんだ……」

「不思議。クールで寡黙で、滅多に怒ることなんてなかったのに。」フザはウィンディに見えないところでウィンディの評価が下がったと小さくガツポーズをした。

「任務が終わったら、前みたいに話せるかな……」

「たぶん大丈夫じゃない？」

フザの内心は大喜びで、踊りを舞っていた。

「セイルに振られたなら、僕が付き合っても良いよ。」

エンジがもう一つ後ろの後部座席から、身を乗り出して、ウィンディにアプローチを仕掛けた。

「嫌。」

瞬間的なお断りに、見事にプライドは崩れ、エンジンも頭を抱えてしまった。

沢山の感情が行きかう車は、ディテノ街の港に着いた。

車を降りて、港の人間に挨拶をした。

「ETHICSです。我々が乗る船はどこに？」

港の人の指差すほうには、小さなクルーザーが一隻あった。五人は車から船に乗り換えた。二階の操縦席にはヴェシールが昇った。

「ヴェシール、操縦は任せた。」

セイルはそういうと、一階の船内にある部屋のソファで足を組み、海を眺めた。

それに続いてフザとエンジンもロビーに入った。だけどウィンディだけは二階にやってきた。

「ウィンディは船室にいかないのか？」

「私は潮風を浴びたいの。」

そう言って、操縦席の角に立ち、日差しを手のひらで隠した。「そうかい。じゃあ出るぜ。」

日差し避けのサングラスをして、船はエンジンを鳴らした。

「昼間から、石油を盗んでんのか？」

港から四海里ほど離れた海底油田発掘所プラントへ向かった。

すでにそこには代表の作業員が数名待っていた。クルーザーを縄でプラントと繋ぎ、クルーザーを降した。

セイルと発掘所代表の一人が握手を交わした。

「ETHICSです。最近、石油の盗難にあってるそうで。」

「はい。掘り出した四百万バレルのうちの五割はもう持ってかれて

しまつて。」

「そうですか。それでは我々はあのクルーザーで外から警備をします。何かあったら、すぐに連絡を下さい。」

再びクルーザーに乗り込み、一海里ほど離れたところから、ヴェシルはプラントを遠くから眺めているが、それらしき船は一隻も見たら無い。

双眼鏡を下すと、すぐさまウィンディもその望遠鏡を覗くが、怪しいと思われる船は見当たらない。

「本当に船は無いね。」

「俺の目を疑ってるのか？視力は問題無しだぜ！」

「あっそ。」

ウィンディにストレスを覚えながらも、搜索を続けた。

その頃下の船室では、セイルは肘掛に肘をついて、頬杖を付きながら、いつものように眠りについてしまった。

エンジは船に備え付けの釣竿を手にした。フザを誘って、二人で釣りをはじめた。

船から見える景色は海と遠くに大陸、そして目線を上げると、雲を貫くほど巨大な塔が見える。

「あれはフリーダム・タワーか？」

「そんなこと、見たらわかるでしょ。」

「経済の自由と発展を求め、全人類が貧しい生活を送らぬことを望み、天を昇るようなこの塔を造る、か。」

エンジはフリーダム・タワーを見ながら、昔勉強して覚えた難しい言葉を心無く言い出した。

「そんな前文、言われなくてもしっかり覚えてます。」

そんな会話をしていると、フザの釣竿がピクッピクッと動いた。

「ヒットしたんじゃないか？」

「わかってますよ！」

竿を引き、リールを巻いた。獲物が重いのかだんだんと巻く速度が遅くなってくる。

やっこのことでかかった獲物を釣り上げた。二人が獲物の姿を見ると、エンジは腹を抱えて笑い出した。

「これ、タコじゃねえか！！こんな大海原でタコって。釣竿にかか
るなんてな！！」

「五月蠅い！！」

釣り上げたタコをエンジに投げつけた。吸盤が腕にくっつき、取
れなくなり、大変なことになってしまった。

その騒ぎを聞いて、セイルがパツと目を覚ました。冷蔵庫から水
を取り出し、船室から出て、二階の操縦席に上がった。

「何か情報は得られたか？」

「盗みが起こるところか、船は一隻も通らないぜ。」

ヴェシールは軽くお手上げだった。セイルには何かざわつく音が
聞こえた。

「騒ぐな！」

下の二人も注意し、誰も声を出さず、ただ波の音だけが大きく聞
こえる中、セイルは何かを聞いていた。

「フザ！スナイパーライフルのスコープで、工場を見てくれ。」

「はい！」

フザは気持ちよく声を出し、言われたとおり、スコープで工場を
見た。なんだか工場が騒がしい。

「なんか、すごく慌ただしいよ。」

覗き続けていると、先ほどセイルと握手を交わした作業員が、た
った今、刀でスパッと斬られた。

「今、人が殺された。」

同時に五月蠅すぎるくらいのサイレンがこの辺の海域に鳴り響い
た。

「まさか…いつの間に。プラントへ向かうぞ。」

エンジン全開でモーターを回し、プラントへ急行した。

プラントに到着し、すぐにクルーザーから降りると、その場は惨劇
場となっていた。まだ数名の海賊らが残党狩りをしていた。

「海賊共、俺らが相手だ。」

セイルは剣、ウィンディは二本の短刀、ヴェシールは大きなハンマーを手にし、

エンジは威力のあるピストル、フザはスナイパーライフルと五人はそれぞれの武器を構えた。

「んだ？ なんだかしらねえが、本気で狩るぜ。」

海賊らは四方八方から、斬りかかってきた。だがそんなことも相手にならず、ものの数秒で決着が着いてしまった。

戦いを終えるとセイルとヴェシールは、海賊船に乗り込んだ。三人はそれを待っていると、セイルと握手を交わした工作員が肩を抑えて、歩いてきた。

「助かりました。ここまで海賊が乗り込んでくるのは初めてです。」

「たまたま、僕たちETHICSがいてよかったですね。」

「ええ、本当にそう思います。」

エンジと工作員が会話をしていると、海賊船からセイルとヴェシールが帰ってきた。

「あの船には石油を積むようなタンクはなかった。」

「それじゃあ、石油は盗まれてないってこと？」

「とりあえず、確認しよう。」

セイルとエンジは肩に傷を負う工作員と共に高い位置にあるコンピュータ室へ向かった。

コンピュータのモニターには今の析出量が映し出されている。工作員はそのモニターを見ると、サーツと血が引き、目が大きく見開いた。

「何故、盗まれているんだ？」

工作員は哑然として、体が固まってしまった。

「ちょっと調べさせて。」

コンピュータに使い慣れているエンジが率先して、席についてコンピュータを弄り出した。キーボードをカタカタとうち、石油を別のタンクに移した時間を調べた。

「僕たちが……さっき到着してから、盗まれてるみたい。」

「どれくらいの量が盗まれた？」

セイルがエンジンに聞くと、再びキーボードを打ち、その数値を出した。

「今朝、三億バレルあったのが、今は一億バレルに減ってる。」

「どうやって二億バレルも盗んだんだ……」

どうすれば盗めるかと頭を悩ましていると、体が固まっていた工
作員が急に机を叩き殴り、怒り出した。

「ETHICS!!これじゃあお前等に依頼した理由がわからねえ
じゃねえか!!」

「そうかもしれない。だがこれは俺たちのミスだ。ETHICSに
文句を言うな。これから俺たちは会談に入る。暫く黙っている。」

二人はコンピュータ室から出て、三人と合流した。石油が盗まれ
たことを三人にすぐ話した。

第五節：失態（後書き）

のんびり書かせてもらって、本当にすいません。
でも着々と更新はしていきます。

第六節：滝切と岩砕

五人は集まって、どうして大量の石油を盗まれて話し合っていた。「どうやって、盗んだって言うんだ？」

「そこがわからない。」

フザは辺りの海を見渡すが、タンカーのような船は見当たらない。

「だけど、瞬間移動でもしない限り、移動させないと物は動かないでしょ。」

ウィンディのその言葉に四人は頷いた。

「それにどこから石油を盗んだのか……」

セイルは黙って、目を瞑り、座り込んだ。四人も真似て座った。「音がする。」

セイルがボソッと口を開いた。だが他の四人には何にも聞こえていない。

「どんな音？」

「エンジン音だ。辺りに船は走ってないか？」

四人は一人一方東西南北を確認するが、船は一隻も走るどころか、存在すらない。

「船なんか無いぜ。」

ヴェシールの言葉を聞き、目を開けて立ち上がった。「ってこと盗む道はあの道しかない。」

セイルの結論づいた言葉を聞いて、みんながみんな、生唾を飲み込んだ。

「奴らは水中を伝っている。つまり潜水艦を利用している。船に戻るぞ。」

五人は船に乗り込み、いくら走らせると、セイルが急に上半身の服を脱ぎ捨て、海に飛び込んだ。

その飛び込む音を聞くと、慌ててエンジンを止め、飛び込んだセイルが帰ってくるのを待った。

待っていると、海底にはぼやけてだが鯨よりも大きな潜水艦がそこにはあった。

するとセイルが海から顔を出し、船に這い上がった。

「やっぱりあったぞ。潜水艦が一隻。」

ヴェシールはヒューと口笛を鳴らした。

「どうして軍のリーダーに引っ掛からないの？」

ウィンディはフザと小声で聞いたが、フザは答えてはくれなかった。

「とりあえず、潜水艦を追うなら潜水艦だ。港に戻って、乗り換えよう。」

ヴェシールは船の鍵に手をかけた。セイルは忍者のように飛び、鍵をかけようとするヴェシールの手を止めた。

「だめだ！今、港に戻っては、消息を絶たれる。この船である潜水艦を追跡する。」

「だけど、どうやって確認するんだ？」

「このクルーザーには水底の様子を見れるよう、船底にカメラがいくつかセットされている。ロビーのモニターで確認できる。」

エンジがロビーの中に入り、スイッチを入れると、大きな潜水艦が映った。そのあと四人もロビーの中になだれ込んだ。

「今の海賊って、潜水艦も操るのか……」

「だけどこれは、軍の潜水艦だ。」

ウィンディは船についているマークを見た。旗の中心に六望星が描かれている。

「オールディーランドの国旗だ。」

「オールディーランドといえば現在GNPが世界第四位の国だ。

確かニュースで、ビル・マーディンがこの国の施設に多額の投資をするとかと言ってたな。」

エンジが即座に説明のようなことを言った。

「ビル・マーディンって誰？」

ウィンディはその名前、存在すら知らなかった。

「世界長者の五人と呼ばれる一人さ。その中でも、彼は武力知らずの投資家で、現在彼の投資したビジネスは全て成功している。」

今回はオールディーランドの経済を突いたというわけだ」

ヴェシールは船に付いている地図とコンパスを開いた。オールディーランドは北西の大陸の海に面している国だ。

潜水艦の進路とコンパスの指す方向は北西で一致した。

「この方向、間違いないぜ。石油を国に持って帰る気だぜ。」

「このまま俺たちも付いていく。次の戦いに備えとけ。」

セイルの言われるままに四人は動き、ヴェシールは潜水艦に速度と舵を合わせながら操縦し、

エンジンとフザはロビーのモニターで潜水艦を見失わぬよう、徹底に注意していた。

セイルとウィンディは甲板に座り、敵船が現れないか辺りを警戒していた。

「悪かったな……」

セイルがボソツと呟いた。そのまま続けて、

「お前の態度に怒ったわけじゃない。気にするな。」

「うん。わかったよ。」

それを聞くと、心がホツとし、ウィンディは少しずつセイルに近づき、二人の背中を合わせた。その感触にセイルは気づいた。

「どうして、セイルは目を押さえてたの？」

それを言った途端、ウィンディの脳裏に怒れる獣の目のようなセイルを思い出した。

「あれは時々、出る発作だよ。自然に落ち着くようにはなってる。」

「あの発作はそのままにしておく、どうなるの？」

「俺が、死ぬな。」

死ぬと聞いて、少し背中を離した。

「薬とかないの？」

「これは心の問題なんだ。誰かが手を加えて治るもんじゃない。」

ふーんと鼻を鳴らしながら、ウィンディは三角座りをして、前後

に揺れた。

「ねー。この任務終わったら、三日ぐらい休みになるでしょ。そして、私と一緒にディテノ街で買い物しようよ！」

「構わないよ。」

「ホント!？」

キャツキヤと喜んで立ち上がり、セイルの隣に座った。

「そしたらねー、一緒に洋服見たりねー、動物園とか行ってねー……」

会話をしていたら、どこかの大陸が見えてきた。一番近くに見える港にはオールディーランドの国旗が掲げられている。

ロビーの中の二人が、慌てて出てきた。

「せ、潜水艦が上がってくる！」

エンジの声にセイルはサッと動き、船の下を見た。下には大きな影が見える。

「大舵、九十度!! 九時の方向に進め!!」

セイルの指示に従い、エンジを一気に吹かし、船を潜水艦の影から逸らした。

避けたのも束の間、潜水艦の巨大な船頭が出てきた。全体が浮上してくるまでそう時間は掛からなかった。巨大で真っ黒な潜水艦が堂々と港に入っていく。

セイルたちも近くの砂浜に船を乗り上げ、フザのスナイパーライフルのスコープを使いながら、下りてくる船乗員の顔を確認した。

「あの人の顔、掲示板で見たことある。あれは確か……」

名前を言おうとするのだが、出てこない。セイルが覗いてみると、その正体をすぐに見破った。

「あれは滝切りだ。それに岩砕までいるな。それに……」

ヴェシールが本部から持ってきたETHICSのブラックリストファイルを開き、名前を探した。

「これか。滝切といえば、背中に背負う巨大な剣で滝の流れを斬った行方知らずの男ジューダールか……」

確かあいつは有名どころの山賊や海賊を壊滅させたから、ETHICSより指名手配になった。」

そのあとすぐにペラペラとページを捲り、岩砕を調べた。

「岩砕。業界最強の怪力男ジバサン。三十年前、ETHICSが開設当初にETHICS狩りと発言し、行った者。

三名を殺したところで逃亡。殺し方は頭蓋骨を粉々に砕く。これってやばいんじゃないか？」

ヴェシールがファイルを閉じると、閉じたときに起きた僅かな風で寒さを感じるほど、身震いしていた。

「所詮用心棒だ。俺たちの目的は石油の奪取。行くぞ。」

五人は忍び足で港に近付いた。肉眼でもその人と確認できるぐらいの茂みにまで近付いた。

そこに見えるのはオールデールランドの軍曹と滝切と岩砕、それと

……

「ビル・マーディンだ。」

ビルの容姿はブロンド髪をオールバックで整え、細いインテリアの眼鏡を掛けていた。両手には二つのトランクケースを持っていた。「永世中立国といったのに軍隊を作ってるなんてね。世界遺産とか多くて、好きだったんだけどな。」

フザは少しがっかりして肩を落としていた。

「彼ら自身は軍隊とは呼んでいないようだがな。裏では核兵器や大量殺戮兵器の製造及び輸出は当たり前のようにしているからな。」

冷静にセイルがそういうと、体の各々を伸ばし、準備体操を始めた。

「永世中立国の名の立場を護らせるために、今叩くぞ。ただし指名手配のかかるやつ以外狙うな。」

セイルの言葉に見解は一致し、フザはライフルを構えた。スコップを覗きながら、狙いを定めていた。

「フザの狙撃を合図に攻撃を仕掛ける。それとフザ。俺が指を鳴らしたら、どんな場合でも、奴を目掛けて放て。」

うんと頷き、狙いを定め、数秒もしないうちにズドンとライフルの銃弾は放たれた。

当たった先にあったものはビルのトランクケースだった。地面に落ちて、その衝撃で開いて、風に乗って数百枚の紙幣が空に舞った。用心棒の二人が、ビルの前に立った。四人は茂みから飛び出し、攻撃を仕掛けた。

「敵襲か。銃を使うな、剣術で立ち向かえ！！タンクに移しているものは続けてろ！」

オールディーランドの軍曹が大声を上げる。

兵士は槍や剣を持って、セイルたちに立ち向かってくる。ジュダールはセイルたちのコートのEという文字を見た。

「あのガキたちはETHICSでは？」

ジュダールが彼らの存在に気づいた。

「つてことはわし様の大好物じゃねえか？」

「まだ持ち場は離れるな。雇い主が移動するまではな。」

セイルは峰打ちで次々と敵を気絶させていく。他の三人も同じように気絶させていく。

「なんだあいつらは……」

「つよすぎる……」

兵士たちはセイルたちの強さに武器を捨てて、降伏をしだした。

「弱っちい。お前はビルを連れて、国に入れ。わし様が相手をしよう。」

ジュダールは頷き、ビルと軍曹を連れて、国の中へと入っていた。

それを見届けると、ジバサンはサングラスを掛けて、ダッダッダと突進を仕掛けてきた。

「俺がやるぜ！！」

ここぞとばかりにヴェシールはハンマーを捨て、自分の持てる力を発揮しようと突進を止めに入った。

「見切りが甘い。」

そういわれると、シヨルダータツクルが腹に入り、ブハッと軽く吐血してしまった。

「所詮、小童だな。」

倒れようとするヴェシールの頭を鷲掴みした。

「これはまずい!!!」

ヴェシールの姿を見て、エンジがピストルの銃口を構えた。それを見つけると、ジバサンは、鷲掴みしたヴェシールを盾にした。

この状態では撃てない状況になってしまった。

「や、やめろ!!!」

急にヴェシールが悲痛な叫びを上げた。ジバサンがメリメリと鷲掴みにしたヴェシールの頭を潰し始めた。

「時間の問題か…」

攻撃を仕掛けようにも、仲間を人質にされ動けないでいた。

その間にもヴェシールの頭は潰されようとしていた。

「弱いもんだな!!! E T H I C S の虫けらどもよ。」

すると後ろから、セイルが後ろから飛び掛かり、背中に深い斬り傷を入れた。ジバサンはセイルを睨みつけた。

「お前はこの状況が見えてないようだな。」

そう言って、鷲掴みのヴェシールを見せ付けた。だがセイルの表情は何一つ変わらない。

何にも動じないセイルに腹を立てて、さらに力を加えた。ヴェシールの頭蓋骨はピキピキとひびが入り始めた。

いつの間にかヴェシールは気絶してしまっていた。

「仲間を失っても良いのか E T H I C S は？」

どんなに脅されても、セイルは表情を変えなかった。

「いかなる場合においても、任務を遂行する。それが E T H I C S の存在理由だ。」

セイルはそういうと、指を鳴らした。

スコープ越しでその動きを今かと待っていたフザがジバサンの腕を狙って、銃弾を放った。

銃弾はヴェシールを鷲掴みする腕に当たり、腕を貫通した。その痛みには耐えかね、最後の力を振り絞り、鷲掴みしていたヴェシールをエンジンに投げつけた。

ヴェシールにこれ以上の傷を増やさないためと、避けずにしっかりと受け止めた。衝撃が強く、全身がジンジンと痺れている。

貫通された腕を抑えながら、適度な大きさの石を拾い、それを茂みに隠れるフザに向かって投げつけた。

「キャッ！！」

その石はスナイパーライフルとぶつかり、銃口をバキッと折ってしまった。もうライフルは使い物にならなくなってしまった。

ジバサンの次の標的はウィンディに変わった。一度目が合うと、ウィンディは体が震えて、動けなくなってしまっていた。

「この小娘が！！」

「逃げろ！！ウィンディ！！」

セイルの声で自分を取り戻し、逃げようとするのだが、つまずいて転んでしまった。

ジバサンは傷を負っていない腕で足首を掴み、ウィンディを逆さに持ち上げた。

「なかなか可愛い小娘だな。」

ジバサンの巨大な図体のせいで、ウィンディが小さな人形に見える。

ウィンディの脳裏には恐怖しかなく、声も出ず、体は固まってしまった。次第に気絶してしまった。

もうセイルの声も届きそうにない。セイルは機敏な動きで、相手の懐にまで攻め込むが、すぐにウィンディを盾にされてしまい、思うように攻撃ができなかった。

「さっきの威勢はどうした？存在理由がどうこう言っていたらどう？」

機敏な動きを見せるが、ジバサンは一瞬の隙を見つけた瞬間に蹴り飛ばした。

セイルは壁にたたきつけられて、頭から血が流れてしまった。立ち上がろうとするが、フラフラしてしまっている。

「まだまだだ。」

「そうか…」

人形のように持たれたウィンディをセイルの方へ投げ飛ばした。セイルは痛みをこらえて、飛ばされたウィンディをキャッチした。だがその勢いは強く、また壁にたたきつけられてしまった。

第六節：滝切と岩砕（後書き）

だいぶ、更新をしませんで……すいません。

この前、第一節の頭部分だけ改良しました。

これからも、読みやすくしていきたいと考えていますので、よろしくお願いします。

第七節：越える：

敵の動きを伺いながら、フザが戦場に出てきた。セイルに駆け寄った。

「セイル！コレを使って。」

それは部屋に置いてきたはずの刀。それを見た途端、全身のどんな痛みよりも、強い痛みが左目を襲ってきた。

左目を抑えながら、フザの手にしている刀を手にした。

「お前はエンジンと石油を奪取しろ。」

コクツと頷くと、エンジンを目覚めさせて、エンジンをひっぱるように連れて、潜水艦から石油を移している連中に攻撃を仕掛けた。セイルは鞘から刀を抜き、鞘を地面に捨てた。刃の色は黒く染まっていた。

「今助けるからな。」

左目の痛みのせいで、さっきのような機敏な動きは出来なかった。ウィンディを姫様抱っこのように持ち抱えていた。

「お前がリーダーなんだろう。そのお前を倒せば、あいつらもう一環の終わりだ。」

ジバサンの言葉を聞き流し、気絶してしまっているウィンディを優しく下ろし、ジバサンを人とは思えない形相で睨みつけた。

睨み返しているはずのジバサンの表情はだんだんと脅えていき、ついには顎がガクガクと震えだした。

「馬鹿な……こんなことって……」

サングラスを捨て、セイルから遠くへ遠くへと全力で逃げた。するとセイルの全身から痛みがスーッと消えて、同時に理性も消えつつあった。

その辺りから、セイルは誰かに乗り移られたようになり、さっきよりも俊敏に動けるようになっていた。

ジバサンは逃げていたはずなのに目の前にはセイルがいた。

「この化け物め……」

「任務を遂行する。」

力任せに殴りかかるが、セイルには当たらず、その腕を刀で痛みもなく斬られてしまった。

目にも止まらぬ速さで、もう片腕も斬りおとし、蹴り飛ばし、膝を崩させ、倒れたのを見ると首筋に刃先を当てた。当てられただけで、薄く切傷ができてしまっていた。

「裁きを代行する。」

「待ってくれ…命は…」

「もうすでに絶たれた命であろう。今頃、脅えるな。過去の罪を償え。」

スパツと首を斬り、ジバサンの命を迷わず絶った。しかし血は流れることがなかった。

彼の切り口を見ると、肉ではなく、たくさんの精密な機械やコードがそこにはうじゃうじゃとあった。

「やっぱりサイボーグだったのか……」

お前がすでに死んでいたのは知ってる。生きていたというほうが不思議なくらいだ。」

セイルは鞘を取りに行こうとするのだが、刀を持つ右腕が意思とは別に暴れだした。

なんとか腕を押さえ、それを地面に血が流れるまで叩きつけて、やっと手から刀が離れた。

「しかしこの刀、危険だ……」

コートの一部をビリッとやぶり、その一部を血が出ている右手をきつく縛った。気絶してしまっているウィンディを、抱きかかえ、安全な場所に移動させた。

そのあとフザたちがやってきて、石油の流出も抑えることに成功した。三人は怪我人を担いで、一旦船へ戻った。

「よし、あと潜水艦を戻して、任務完了だ。」

エンジがやっと終わったという喜びで笑顔になった。

「二人はこのまま船で帰ってくれ。俺はあと少しやることもある。」
そういう残すと、ETHICSのコートを着て、セイルは船を飛び降り、また港へ戻った。

フザたちはセイルに従い、クルーザーを沖に出した。港でそれを見届けると、一挙に目つきを変えて、さっき落とした刀を手に取り、鞘に戻した。

セイルはジバサンの頭を持って、オールディーランドの中へと入っていった。

傷だらけのセイルの姿、人の頭を持つセイルを見た国民は動揺し、騒ぎ立てた。

セイルはそれにそそのかされることなく、目的とする場所の宮殿に入っていた。

そこにはオールディーランドの国王、ビル・マーディンと滝切のジユダールがいた。

彼の姿を見た途端、国王とビルはジユダールの後ろに下がった。セイルは手に持っていたジバサンの頭を放り投げた。

「なんのようだ？」

「任務はまだ完了していない。」

顎に生えた髭を弄りながら、ポケットからガムを取り出し、噛み始めた。

「殺しにきたのか？殺されにきたのか？」

「まずはオールディーランド国王に永世中立国と世間に言い、軍隊を持つとしたことによる虚偽罪、ビル・マーディンに石油の窃盗罪、

そして滝切のジユダールに殺人罪により、全員をETHICS本部へ連行する。それ以外の連中は、警察行きだ」

「そんなこと誰がやった？」

ガムを噛んでいた口の動きが止まった。

「ETHICSの三名以上の言葉の内容が一致していれば、連行は

可能となる。」

「じゃあこの頭の男を殺したお前の罪は何だ？」

「その男は過去に修行中、上から落ちてきた巨大な岩によって、事故死している。」

そのときこいつは指名手配犯であったため、あまり口外にはなかった。指名手配からはずそうとしていたとき、あの姿が動いている情報を得て、指名手配からは外せなかった。

そしてその動いていた正体がサイボーグだったっていうわけだ。」するとジュダールはニヤッと不気味な笑顔を見せて、背負っている巨大な剣を取り出した。

「よくわかってるな。この大剣は俺をも斬ったときに使った剣だ。これでお前の人生を断たしてやる。」

セイルはジバサンを斬った刀を手にした。

「ETHICSに攻撃を仕掛けたとして、公務執行妨害を加える。」

二人が争いをしようとする、国王が戦いをやめさせた。

「もうよい。我々は罪を犯したのだ。従うしかないだろう。」

ビルもコクツと頷いた。それを聞くと、ジュダールはにやりと笑った。

「それじゃあ契約破棄ということでもいいんだな。」

ものも言わぬ速さでセイルに斬りかかった。

力を振り絞り、俊敏な対応でなんとか攻撃を防いだが、一撃の重さは今まで食らったどんな攻撃よりも重く、手がジーンと痺れてしまった。

セイルが動けないのを見ると、ジュダールはセイルのコートの懷から、ETHICSの手帳を取り出した。それには警察手帳のように身分証明としての写真や名前が記入されている。

「セイル・K・ラディアか……覚えてぞ。」

手帳を投げ返し、宮殿から逃げるように出て行った。

セイルも追おうと立ち上がろうとするのだが、今の一撃の反動や全身の痛みで動くことが出来なかった。

「すまなかったね。」

国王が手を差し伸べて、セイルを立ち上がらせた。

「ありがとうございます。」

「ビル君。私は間違っていたようだ。石油の強盗に協力してくれてありがとう。共に罪を償おう。」

セイルはビルに睨みつけた。

「何故、世界長者の癖に盗みに走ったんだ？」

「石油は高すぎる。いくら私でも、一つの国のビジネスに協力するのには限度がある。だから石油を盗み、設備投資に金をかけることにしたのだ。」

その後、セイルは二人と共に潜水艦に乗り、ディテノ街の港へ戻った。

石油を全てプラントのタンクに戻した。

二人は裁判に掛けられ、国王はファシリティに五日間、ビルは罰金を支払いで釈放となった。

任務終了後怪我を負った三人はすぐに医務室に運ばれた。

ヴェシールは頭蓋骨にひびが入っていて、全治するまで任務には参加できなくなってしまった。

エンジの手には大きな打ち身があり、ヴェシールを受け止めたときの衝撃で、打ち身が出来てしまい、銃を放つと痛みが伝わるという。フザの武器は修理するのに十日間はかかるということなので、二人の任務への参加は難しいものとなってしまった。

ウィンディは本部へ戻ると、すぐに目が覚めて、今はもう何事もなく、普段の生活している。

最後にセイルは、刀を持ったときに起きた痛みは全て消えていて、彼もまた普段の生活に戻っている。

第七節：越える…（後書き）

なんか、いいサブタイトルが付けられませんでした、
前話とバランスがだいぶ悪くなってしまいました。

これからも頑張っていくしますので、応援してください。。

第八節：七十二柱

その日の夕方、セイルは本部の中央広間にフザを呼んでいた。

フザにとってこんなことは初めてであって、心臓が飛び出るぐらいにバクバク言いながら、中央広間に向かった。

広間の中央のベンチには私服姿のセイルが座っていた。セイルはフザの姿を見つけると、立ち上がって、手を振ってきた。手を振り替えし、小走りでセイルの元に寄った。

「悪いな。」

「そんなことないよ。」

心臓の鼓動の音しか聞こえない。まわりには目もくれられず、セイルの顔は見ることは出来なかった。

セイルは紳士に持っていたハンカチで、ベンチの上に引いた。手を取って先導され、ハンカチの上にフザはぎこちなく座った。

フザが座ると、セイルもその隣に座った。

「聞きたいことがあるんだが。」

フザはもう顔すら上げなくなった。顔はだんだんと火照ってきて、眼鏡も少し曇りつつある。

「どうしてあの刀をお前が持ってたんだ？」

「そ…それは……」

息が荒れてしまって、普通に答えようとしても、どうしても声が裏返ったりと変になってしまう。

「はつきり答えろ。」

そう言われ、深く息を吸って、なんとか心臓を押さえさせた。

「実は船にあったの……」

「初めから積んであったのか？」

「そう。ライフフルを壊されて、何かないかって船に戻ったら、あれがあったから。」

でも私は剣術は使えないから。それをセイルに渡したの。」

「そうだったのか。ありがとう。」

セイルは事情を聞けると、フザを置いてスタスタと歩き出した。止めようとしたが、あまりもの興奮で動こうにも動けなかった。

自分の尻の下にあるハンカチを手にし、大事に両手で持った。セイルはフザとの話し合いの後、図書施設に向かった。

目的のものはすでに決まっている。その本のある本棚へ向かい、目でそのタイトルを探した。

そして見つけた本は 武器百科事典 剣・刀編 だ。図書施設にある机に座って読みだした。

写真だけを見て、自分の持っている刀と同じ刀を探す、全く該当する絵が現れない。仕方なく本を本棚に戻すと、ある本に惹かれていた。

その本を開くことなく借りると、寮の部屋に戻り、その本を開いた。その本には信じられないような話ばかりが次々と描かれており、それはまた幻なのかもしれないとばかりに書いてあった。

次々とページを捲り、二十ページ開いた辺りでようやく見つけることができた。

「妖刀アモン：」

そのあとに綴られている文章を指で追って読んだ。

この刀についての文章を読みきると、何かを知り、喜びを得ていた。本を閉じて、ベッドに横になった。

日は暮れて、夜を迎えた。

セイルはそのまま眠ってしまった。

真夜中に差し掛かったとき、部屋に物音が響いた。

「うまいな。これ…。」

その物音にセイルはバツと目を覚ました。立ち上がってみると、冷蔵庫の扉が空いていて、明かりが見える。

キッチンへ向かうと、見たことも無いような生き物が、冷蔵庫の食べ物食い漁っていた。

「本当に出てきたな。七十二柱の悪魔アモンよ。」

見たことも無いような生き物はセイルの声を聞き、体がビクツと揺れた。

手に持っている食べ物を落とし、口に入っている食べ物を一気に飲み込んだ。

「すいませんでした。」

見たことも無いような生き物はセイルの方を向き、土下座してきた。

「別に食い物ぐらいで怒りはしない。それより話がある。」

セイルは土下座しているそれを軽々持ち上げ、ソファーに座らせた。

小さな明かりをつけて容姿を確認した。体の大きさはセイルの半分もない。ふくろうのような顔をしていて、犬の前足に、ヘビの尾のような下半身をしていた。

「お前の全てを話せ。」

その生物は座りなれていないのか、ソファーを降りて、地べたに正座して座った。

「では話させてもらいます。」

か弱く高い声で、細々と話し出した。

「実は私は昼間や人のいる場所では刀として存在しています。」

そして真夜中過ぎから明け方に掛けて、この醜い姿で動くことが出来ます。」

「それは本に書いてあったこと。俺が聞きたいのは、本に書かれていないこと。」

セイルの威圧に再びそれは土下座してしまった。土下座しながら口を開いた。

「過去に私は悪魔の一部として生きていました。だが悪魔である化け物は破壊されてしまい、七十二の数に分かれてしまいました。その後各々は武器に変化したり、人に化けたりして、隠れて生きています。」

そして貴方にはその悪魔である化け物の核が眠っています。だから私を扱うことが出来るのです。

他の者が触れた場合、その触れた手はどんどん壊死していきます。邪悪な意思が強い場合、無理やり扱うことができるのですが。」

セイルはそれに土下座をやめさせた。

「化け物とは何だ？」

「三世紀に渡ってその名を風靡した化け物です。名はととてもとも言えません。」

「俺の左目が痛くなるのは？」

「核と私が共鳴している証拠です。そろそろ眠りに着いたほうがよろしいのでは？」

それに言われて、カーテンの隙間を見た。カーテンの外は少しずつ明るくなろうとしていた。

仕方ないといわんばかりに、ベッドの布団に潜った。

「それじゃあ俺は眠りに着く。お前は刀の姿になり、じっとしている。」

それは刀の姿に戻り、壁に立てかかったまま動かなくなった。セイルはそれを見ると、ベッドに入り、眠りに着いた。

セイルはそのまま眠り続け、食堂に朝食を食べにいなかった。朝食を食べ終え、ウインディはウキウキと心を弾ませながら、セイルの部屋に向かった。

扉を開けて、部屋の中に入った。ベッドの中で眠るセイルの上にウインディは飛び乗った。

「寝坊？夜更かしでもしてたの？でも今日は約束の日だよ。ほら起きて。」

セイルはウインディの騒がしさで目を覚ました。

「やっと起きた？チャツチャか準備済まして、早く行こうよ。」

「わかったから、下りてくれ。それと着替えるから、部屋から出てくれ。」

ウインディは言われたとおりに動き、部屋の外で待っていた。

十分もしないうちに、セイルは身支度を済まして出てきた。腰には刀が刺さっていた。

「そんな危ないもの持ってたの？」

「世の中を安全視しすぎだぞ。」

二人はETHICSの本部から出て行こうとすると、本部中に放送が掛かった。

「セイル・K・ラディア、ウインディ・シャンベインの二名。至急、上官室へ来ること。」

その放送の声はロードの声だった。二人は何事かと上官室へ向かった。

「どうしました上官？」

二人は横に並んで、ロードの前に立った。

「緊急で任務が入った。今すぐに正装に着替えて来い。」

「私たちこれからデートだったんですよ！！」

ウインディはセイルと腕を組んで、ロードを睨んだ。

「それは次の機会にしてくれ。それに今回はお前達二人で行ってもらう。」

「他の三人は？」

「二人は怪我で任務参加を不可とし、フザは得意な武器を失ったので、ETHICSの武力法の第十一条該当し任務参加不可とされる。ということでお前等二人だ。」

セイルはスタスタと、ウィンディはしぶしぶと寮の部屋に戻り、部屋で着替えると、再びロードの前に集まった。

「任務内容はガンダルシア王国の姫の護衛だ。王や優秀な兵士は統領会に出ることになっていて、二日は帰って来ない。その間、姫を護るためとして依頼された。」

「ETHICSは護衛のような任務は受けないのでは？」

ロードはそれを聞き入れた。

「相手は国王だ。もし姫が死ねば、また戦争の引き金にもなってしまふ。」

世界を平和という名の元に置いておくには、そういった任務も受ける必要があるのだ。」

戦争と聞いて、二人とも反論がしづらくなった。

「二日間帰って来ないということは泊りがけの任務？」

泊りがけと聞いて、ウィンディが顔をにやっとさせた。

「そういうことだ。それと今回はバイクで行け。ガンダルシア王国にはここより西に八十キロ先の地点にある。では行って来い。」

二人にヘルメットとバイクの鍵を渡し、上官室へ戻っていった。

「それじゃあ、さっさと行こうよ。」

ウィンディは気分を良くし、駐輪場まで距離があるのにもかかわらず、すでにヘルメットを被って、バイクのところまで走っていった。

セイルは腰に妖刀アモン、脚にあるホルダーに普段使っている剣があることを確認すると、ウィンディの後をゆっくりと追った。

二人はバイクを見つけると、鍵を回して、エンジンを吹かした。

「落ちるなよ。」

ヘルメットを被りながら、後ろに座るウィンディに注意した。するとウィンディはギュッと手を回し、自分の体とピッタリとくっつけた。

「これで大丈夫。」

その言葉を聞くと、ブーンと速いスピードでバイクを走らせた。

第八節：七十二柱（後書き）

すんごくのんびりと書かせていただいています。

ちゃんと最後までひっそりとですが書きますので
よろしくお願いします

第九節：NEXT MISSION

ガンダルシア王国までは？ETHICS？本部からを内陸へと進んだ。

その間は一切喋らず、耳元をフーフーと向かってくる風の音を聞きながら、王国へ向かった。

他の車両は一切走っておらず、どれだけスピードを出しても、事故すら起きず、予定より少し早い時間に到着した。

王国に入ってから、検問で？ETHICS？のバッチを見せて、ガンダルシア王国に入った。ウインディが街の出店に目を奪われながらも、二人は真っ先に王や姫のいる城へ向かった。

門番の兵士に止められてしまった。再びバッチを見せて、素性を教えると、兵士たちが伝達して、王に伝えた。

王からの承諾が伝達で返ってくると、門番の兵士と一緒に城内に入った。城内の中庭はとても綺麗で、陽がポカポカとして気持ちよかった。城内も一部屋一部屋が寮の部屋よりも広くそして何もかも揃っていた。

ウインディは城の中をキョロキョロしながら歩いていると、いつも間にか玉座の間に着いていた。玉座には王が座っていた。

「王よ。？ETHICS？本部の者が到着いたしました。」

「よろしい。おぬしは門に戻れ。」

門番はキビツとした敬礼をすると、今来た道に戻り、門へと戻っていった。

「？ETHICS？の者よ。よくぞ来た。我がガンダルシア王国、国王ソロモン四世なり。」

ソロモン四世は鼻の下に黒い髭が立派に生えていて、細い背丈だった。

その姿を見ると、二人は片膝を床につけ、頭を下げた。

「？ETHICS？本部より参りました。セイル・K・ラディアで

す。」

「同じくウィンディ・シャンベインです。」

二人の名前を聞き終えると、ソロモン四世は少し顔を歪めたが、その表情をすぐに元に戻した。

「楽にして聞いてくれ。これより我は国を離れる。」

そなた達には、我が姫の護衛と国の治安を維持していて欲しい。」

「はい。任務は確実に遂行します。」

「頼れる言葉だ。姫の名はサラという。頼むぞ。」

王は数十名の衛兵を連れて、玉座から立ち上がり、セイルの横を通るときに小さな声で耳打ちすると、玉座の間を出て行った。

ソロモン王が出て行くのを見ると、縮こまった筋肉を伸ばしながら、二人は立ち上がった。

「早く姫様を見にいこうよ。」

ウィンディに急かされ、二人は玉座の間の奥にある姫の部屋の扉をノックした。

「姫君。我々は？ETHICS？です。これより王不在の間、護衛をさせていただきます。」

扉の前で部屋の中に聞こえるように言った。

それを聞くと、部屋の中がドタバタと音がした。急に扉が開いた。

「やっとあの父は消えてくれたわけ？」

姫というぐらいなのだからゴージャスなドレスを着て、何億もする指輪の一つや二つつけて、ブロンド色の綺麗な長い髪をサラサラさせて登場してくるかと思ったら、

部屋から出てきた格好を見て、啞然としてしまった。

「ホントに姫様？」

「失敬ね。当然でしょ。」

口調からは上品さが感じ取りにくい。格好もショートで茶色い髪、ロングスカートを履いていた。

「随分ラフな格好……」

「あんな暑苦しい格好してられないもん。別に社交の場に出るん

じゃないんだからいいじゃんよ。」

部屋の置くには何着ものゴージャスなドレスがあった。

それを見るとウィンディが興奮して、部屋の中に勝手に入ってしまった。

「勝手に入って悪いな。」

ドレスに夢中のウィンディの代わりにセイルが謝った。

「別にいいよ。それよりすごいカッコイイ顔してるね。ねえあたしの婚約相手になってよ。」

「え！」

部屋の奥で婚約と聞いて、ウィンディが異様なまでに大声を上げた。

「な、な、なにいつてんの。出会って早々結婚なんて、ね！もう少し考えたほうが良いよ。セイルもそう思うよね。」

ウィンディが二人の間に入り込み、距離を離そうとする。

「何故、婚約の話？」

「うちの親父が領土拡大するために隣国の王子と結婚させようとしてんだけど。」

「どれもいまいちだね。でもあんたは特別カッコイイから。」

サラの自分勝手な言葉にセイルは冷静に対応した。

「人は見かけで判断するものではないぞ。警備にあたり少々城内を探索させてもらいたいのだが。」

「いいよ。あたしと一緒に行く。」

サラはセイルと何の恥じらいもなく手を繋ぎ、セイルを引っ張りながら城内に向かった。

それを見て、ウィンディは自分の感情を抑えながら、二人の後ろから付いていった。

「人がいないな。そんなに人員が不足しているのか？」

城内を歩いていて、まだ一人も兵士に会っていない。

「ええ。少し前にあった紛争やテロ行為で、たくさんの人が殉死してしまったの。」

今は百にも満たない兵力でこの王国を守ってるの。王と出張に行っちゃってるから、城の警備は十人もいないんじゃないかな？」

城の中を歩いていると、歩きタバコをしている一人の兵士に出くわした。兵士らしくない格好をしていた。

「へー？ETHICS？がどうしてここに？」

男は無精ひげを生やしていて、背中には大きな弓を背負っている。「彼らはあたしの警備の者です。タバコなんて吸ってないで、ちゃんと持ち場に着きなさい。」

無精ひげを生やした男はやる気のない返事をする、タバコを地面に落とし、踏み潰して火を消した。

持ち場へ歩き出した。ウィンディは離れていくその男を見ながら、サラに聞いた。

「あの人は誰？」

「昔？ETHICS？の支部で働いていた男です。」

任務で不祥事を起こして、支部をクビにされ、その能力を見込んで、親父が兵士として雇っているの。」

「不祥事って何したの？」

「聞いた話だと……ターゲットを殺すために、近くの民間人も一緒に殺したっていう話を聞いたことある。」

その話を聞いた途端、ウィンディの心臓がキューツと縮こまった。

「次へ行こう。」

三人はその後、沢山の部屋を見回り、最後に少し城を出たところにある神殿に入った。

何十本もの柱があるだけのものだった。入ろうとした途端、セイルの腰のところにある刀が、急に重くなった。

「この神殿は？」

「エルサレム神殿です。先代の王が、倒した悪魔が眠っているって話。ちょうど悪魔の数に合わせて柱の数があるらしいんですけど。」

神殿の名前や倒した悪魔等を聞いて、セイルは入ることをやめた。「そろそろ日が暮れてきた。戻ろう。」

三人は城内に戻り、食室へ入った。そこには数名のシェフが並んで待っていた。

「本日はここにいて一流のシェフに作らせました。」

三人は何十人も座れる長いテーブルの端の方に座り、食べ物があるのを待った。

「二人はお酒は飲めて？」

「私たちはまだ未成年だから……」

ウィンディはテーブルにあるハンカチを脚の上に引き、ワイングラスに入っている水を飲んだ。

「この国はお酒に関しての法令は15になってから飲めることになっているのよ。」

飲んだって捕まりはしないわ。」

サラ姫は説明すると、ソムリエにワインを入れさせた。入ったワインをスーッと一口飲んだ。

「そうなの？ 私たち18だし。ねえセイル。飲んでみよっか？」

「俺はいい。飲むなら数口にしておけよ。」

ウィンディはそれを聞くと、ソムリエにワインを少量注いでもらった。

「んー良い匂い。」

ワインを数回ほど回し、香を嗅ぎ、どこかのテレビで見て覚えたような動きを見せた。

「私もお食事にご一緒してもよろしいですか？」

突然の声に一斉に振り向いた。そこには、さっきの無精ひげを生やした男だった。

「貴方、警備は？」

「ちょうど交代の時間でして。一人で食べるのも何なんで。」

「貴方に出す料理はありませんよ。」

「大丈夫ですよ。ここに弁当もあります。少しお話を一緒に聞かせていただだけで。」

そう言って図々しく、食室の中に入り込み、セイルの隣に座った。

男が座ると、同時に三人の前に上品な料理が幾つも並んだ。

「それでは頂きましょう。」

サラは怒りを抑えながら、前菜のスープを飲みだした。セイルとウィンディも食べ出した。

無精ひげの男は、古汚い弁当箱を開き、ご飯を食べ始めた。

セイルは出されたステーキを食べていると、急に無精ひげの男がセイルの足を軽く叩いた。

それに気づくと、男の指先には、小さく折りたたまれた紙が挟んであった。

「あとで読んでくれ。」

男は小声でセイルに放しかけた。その行動を黙っていなかったサラが遂に声を上げた。

「なにやってるの貴方！！もう警備に戻りなさい！！」

セイルはそれを受け取り、すぐさまポケットに入れた。

それを渡すと、男は叱られながら、弁当を片付けて、椅子から立ち上がった。

「それじゃあお先に。」

無精ひげの男は鹵の間に詰まった茸を爪先で除きながら、食室を出て行った。

あの男が出て行くと、サラもだんだんと気が安らいできて、ふつふつと湧き出す怒りが消えた。

怒りが消える頃には、三人も食事を終えて、サラは部屋へ、ウィンディとセイルは二人並んで、部屋の前に立って警備を始めた。

「それでは警備の方よろしくお願いします。」

それだけ言って、部屋の中へと入っていった。

「姫もいろいろ大変だね。」

「何がだ？」

「城内を歩くにも絶対誰かと一緒じゃなきゃいけないし、城の外には出ちゃいけないし。ホントに姫様じゃなくて良かったよ。」

「そうか…」

そつけない返事をした。

「しかし、二人きりの任務って初めてだよ。またあるかな？」

「かもな。」

ウィンディは話の盛り上がりがないことに退屈を覚えた。

「ねーねー。セイルは将来どんなところで住みたいと思ってるの？
ちなみに私はねー」

ウィンディが理想を話し出した。昔から理想を話し出すとウィンディの口は三分以上止まらない。

セイルは男に渡された小さな手紙の事を思い出し、それを読んだ。

——話がしたい。 中庭に来てくれ。——

汚い字でそう綴ってあった。セイルはウィンディが目を瞑って、理想を話し続けている隙に抜け出し、忍び足で中庭に向かった。

第九節：NEXT MISSION（後書き）

適当な更新でいいません。

まだまだ続いていきますんで。

第十節：救出作戦

紙をクシャツと丸めてポケットに入れた。

「来てくれましたか？セイル・K・ラディアさん。」

中庭の噴水には無精ひげの男がすでに待っていた。

「何故、俺の名を？」

「そのアモンが教えてくれましたね。」

「アモン？お前、こいつを知ってるのか？」

「知ってるも何も同胞ですから。」

「それじゃあお前も武器になるのか？」

「いえ。私は姿を変えることはできません。ですが私は貴方の忠実なる僕です。」

そういうと、正座して座った。

「お前、名をなんと言う？」

「私の名はバルバトス。」

その名を聞くと、急にアモンが元の姿に戻り、共に並んで正座した。

「なあ、ここにいて怖くないの？」

アモンがか細い声で、バルバトスに聞いた。

「怖いよ。でも四代目は少し馬鹿だから、ここにいても平気なんだよ。」

「何が怖いんだ？神殿の事か？」

セイルが聞き始めて、バルバトスが答えようとすると、急に誰かがやってきた。

それはサラ姫の姿だった。アモンは慌てて刀の姿に戻り、バルバトスは重い腰をやっとあげたかのように立ち上がった。

「貴方は何をやってるの？」

「失敬。これより警備に戻ります。」

バルバトスはダラツと敬礼して、持ち場へとだらだら戻っていつ

た。

噴水の前で二人だけの空間になると、サラが急にポツと赤くなり、セイルに身を寄せた。

「ねえ任務が終わったら、ここから出て行くの？」

「そうだ。それより部屋に戻っていただかないと……」

「もう少しいいでしょ？」

「遊びに来たんじゃないんだ。」

無神経にセイルは放った一言がサラの胸に鋭く突き刺さった。

サラは顔を下に向けて、噴水の淵に座った。

「一国の姫に好かれるのがそんなに困るの？」

セイルは何か言おうとしたが、サラはなぜか目に大粒の涙を溜めていた。

コートの内ポケットからハンカチを取り出し、それを差し出した。

「俺たちはお互いを知らな過ぎる。」

「それはこれからでも出来るでしょ。同じ時間を一緒に過ごしてもっと仲良くなって。」

「それに俺は国を背負えるような器の大きい人ではない。」

その言葉を聞いて、セイルからもらったハンカチで涙を拭くと、星が輝く夜空を眺めた。

「その言葉、何度も聞いたことがある。城下街の学校に通ってたときに好きな子に告白して、

一度は付き合ったんだけど、姫であることを話してみたら、急にフられて。ほかも全部そう。

：私も普通の家の子で生まれたかったな……。それで？ETHICS？に所属して、セイルと一緒に任務がしたかった。あの子みたいな生活がしたい……」

サラの瞳からはボロボロと涙が零れている。どんな立場でも苦労は誰でもすると聞いて思えた。

すると急にサラの部屋の方で、大きな爆発音がした。

「姫！立ち上がってください。」

セイルは言葉を投げかけるが、全く立とうとはしない。

「無理にでも来ていただきます。」

サラを背中に背負うと、爆発が起きた場所まで急いで向かった。現場の近くに到着すると、なにやら人影が見える。ひとまず相手が直接は見えない壁際に立ち、相手の動きを遠くから見た。

「うっひょー、随分金目のものがあんな。さすが一国の姫様のお部屋だぜ。」

一人の男は宝石箱をあさって、沢山の指輪やらネックレスを自分の体につけたり、ポケットに突っ込んでいる。

「見ろよ。下着だってこんな派手なもんまであんな。ガキだと思つてたが、マセてやがんな。」

もう一人の男はクロゼットや筆筒を弄り、衣服をあさっている。

「しかし可愛い姫様だ。」

「連れ帰って、やっちゃいましょうぜ。」

二人の視線の先には縛られたウィンディの姿があった。ウィンディを見ては舌を出して、自分の唇を舐めている。

「ああ。連れ帰ったらボスに報告だ。」

バギーに沢山の服や宝石とウィンディを乗せると、爆破した壁からブーンと走り去った。

「追うぞ！」

セイルはバイクを取りに走った。バイクを見つけて、鍵を入れて、エンジンを吹かすと、サラを呼んだ。サラは少し待っててというので、すぐに部屋に戻り、動きやすい格好に着替えた。

其れを見ると、ヘルメットをポーンと投げ渡した。サラはヘルメットを被り、セイルの後ろに座った。

「しっかり捕まってる！」

その声を聞き、セイルの腰に腕を回した。バイクを動かし、異常な速度でバギーを追った。

王国の裏に広がる荒野を走っていると、5分もしないうちにとろとろと走るバギーに追いついた。

バギーに乗った一人が気づくと、急いで加速した。セイルも負けじと加速させる。

「アニキ、なんか付いてきますぜ。」

「どうせ、この姫様の護衛だろ、撃て。」

助手席に座る一人は、マシンガンを取り出し、機銃掃射した。

「振り落とされるなよ。」

サラにそう声をかけると、右へ左へと体重移動し、バイクを操作した。その間銃弾は一発も当たらなかった。

「あいつ過ぎまんぜ。」

「ならロケットランチャーを食らわしてやれ。」

助手席に座る一人はマシンガンを車の外へ捨てると、服や宝石のしたに埋もれているロケットランチャーを取り出した。それを見た途端、セイルは急に止まった。

「食らえ!」

バシューと放たれたロケット弾はセイルたち目掛けて飛んでくる。それを見ると、再び加速し、バギーから離れた。

「避けるぞ。」

セイルは体重を右にかけて、思いっきり曲がってロケット弾を避けて、離れようとしたがロケット弾はいつまでも追ってくる。

「それはターゲットに当たるまで何時までも追いかけるんだ!」

それを聞いたが、体制を上手く戻せず、セイルはバギーの後を追えず、そのまま逸れて行った。

バギーに乗った二人はそれを見ると、ロケットランチャーを道端に投げ落とし、アジトへと向かった。

夜中の内にバギーは森の中にあるアジトへと到着した。アジトにはすでに誰かがいた。

「お前ら、遅かったじゃないか?」

一人のセクシーな女性が、ランプをつけて、男達の前に立った。

「ええ。?ETHICS?の連中が絡んできました。でも姫様と宝

石やらがつぱり頂いてきました。」

「ほう、でその姫はどこにいる？」

一人の男がバギーの荷台からウィンディを担いで、優しく地面に置いた。

ウィンディの口や全身を縛られていて、動こうにも動けなかった。

金髪でセクシーな女性はウィンディの顔に灯りを近づけ、凝視した。

「なあ、その女と交わしてやりてえんだ。早くしてくれ。」

「お前ら、厄介なものを連れてきたね。」

女は不敵な笑みを浮かべながら、だいぶ褪せた古い紙の書類を広げた。

その中に一枚だけ新しい紙があった。それを見つけると、手にとって、灯りを翳した。

「やつぱりそうだ。この女は？ETHICS？だよ。」

しかも要注意人物が所属するチームだ。交わすのはやめといったほうが良いと思うよ。」

それを聞くと、足がブルブル揺れて、ゴクツと唾を飲んだ。

「マジかよ！確か、この辺の？ETHICS？の要注意人物は二人、セイル・K・ラディアとギルバード・フォックスだったよな。ど、どっちだ？」

二人の体中からは、いやな汗が全身から流れてきていた。

「前者だよ。だけどその娘は逃がさないでちゃんと鹵獲しておけ。仕返しに来るはずだよ。」

そういつて新しい紙を二人に突きつけ、剣と銃を装備した。二人は紙を見ると、背中がゾツとしていた。

「こいつ、もしかして、さっきのバイクのじゃねえか？」

「わからない。でももしかしたら……」

セクシーな女性は二人に武器を投げつけた。

「早くそいつを装備しな、もしもセイルを討てれば、こんな事しなくていいんだよ。」

確か報奨金2000万リクルだったね。姫より価値がある。」

「そいつはすげー。」

「殺した奴には分け前で半分やるよ。」

二人はやる気が上がり、ウィンディを背後に隠して、槍を持った。
「さあ、何処からでも掛かってきなよ。」

女は高らかに笑っていた。あたりの森から声が聞こえた。

「そうかい。じゃあ、相手してやろう。ラーク・B・ユッドさんよ。」

セイルは怒りを露にしてやってきた。その後ろにはサラの姿があった。

夜は少しずつ明けようとしていて、お互いの姿がだんだんとはっきり見えてきた。

「あたしも立派な著名人みたいだね。セイル君。」

「なぜ俺の名を知る?? ETHICS? の情報は漏洩するはずはないはずだ。」

「どうだろうね?」

ラークは剣を抜いた。セイルも剣を抜いた。静かにサラに声をかけた。

「姫はここで。」

「私も戦います。」

「なら三人を俺がひきつける。これでウィンディを救ってくれ。」

そういつて、小さなナイフを渡した。サラは頷いた。

日は明るくなり、相手の姿がはっきりと見える。セイルは体制を低くして、ラークに斬りかかった。

「どれだけ強いんだい? 2000万リクルは?」

「何の話だ?」

二人の剣が大きな音を立ててぶつかった。肌がピリピリと痛いくらいの衝撃波を感じるくらい。

ラークは空いた片手で、銃を取り出し、二発放った。そのうちの一发はセイルの右足を掠めた。

「あたしだって、それなりに実力はあるんだよ。簡単に殺せると思

うな。」

それを見ると、男達二人も戦いに参加した。

「俺たちだってやれんだ。」

二人が槍を持って突っ込んでくる。それに反撃しようとするのだが、力を入れると、右足から血が噴出し、思うように動かすことができず、防ぐことしか出来なかった。

「ジャマをするな。」

セイルは槍の刃先を斬りおとし、峰打ちして気絶させた。

男二人が倒れようとしているときに、ラークは二丁の銃を手にし、乱射した。

その銃弾は仲間だった二人に当たっても構わず、撃ち続ける。

「そんな雑魚いくらでもやるよ。あたしゃ2000万リクルがもらえれば気が済むんだから！」

弾が切れると、銃を放り捨て、剣を手にして、斬りかかってきた。セイルは一度防ぐたびに右足から出血を繰り返してしまう。相手はそんなことを知らず、休むことなく乱れ突きをしてくる。

「ルーキーの癖に随分弱いんだね。」

乱れ突きをしている最中に空いている片手でナイフを取り出し、それをセイルに投げた。

投げられたナイフには気づけたが、避けることができず、それは腹部に突き刺さった。

倒れるのを見ると、一度攻撃の手をやめた。

「それで？ETHICS？が勤まるのかい？」

セイルはゆっくり立ち上がり、腹部に刺さっているナイフを抜いた。

それを思いっきりぶん投げた。だが点での外れで、それはアジトの入り口の方へ飛んでいった。

「ノーコンかい。」

斬ろうとすると、左目が突然、強烈な痛み出した。

「攻撃も出来なくなったかい。」

再びラークの乱れ突きが始まった。

セイルは左目を瞑りながら、なんとか攻撃を防いでいるが、時々死角に入ってしまった、攻撃を受けてしまう。

「これじゃあ？ETHICS？のルーキーもまだまだガキ同然だな。」

セイルは息を切らし、傷の痛みには耐えながら、ラークから距離をとって立ち続けた。

左目の強烈な痛みが治まり、何かに乗り移られたかのように表情を一変させた。

相手の足元まで踏み込み、斬りかかった。防ごうと剣をぶつけようとする、簡単に剣を折られてしまった。

後ろに逃げながら、二本のナイフを手にし、ウィンディを人質にしようとする、そこには縄から解放されたウィンディとサラの姿があった。

「この！！ふざけるんじゃないよ！！」

ウィンディを蹴り飛ばし、サラをナイフで刺そうとするが、ナイフは別のモノに刺さった。

それはセイルの腕だった。ナイフの刃は腕を貫通し、痛みには耐えかね、剣を手から離してしまった。その落ちた剣を手にとると、倒したウィンディに刃先を向けた。

「この女がどうなってもいいのかい？いやならその姫様を渡しな。」

正気を取り戻したのか、セイルは口や態度には出さないが、酷く痛みには悲鳴を上げていた。

「あたし…行きます。」

「行っちゃダメだ。」

腕に刺さっているナイフを抜き、痛みには耐えながらサラを止めようとした。

血は止まることなく流れるのを見ると、サラは服の一部を破り、血を止めるよう固く縛った。

「そんなことしてないで、どうするのか決めたらどうだい？」

そういうと、急に回りに誰もいなくなり、真っ暗な世界にいた。

「ここは？」

すると剣からシューっと何かがラークの体に纏わりつこうとしていた。

？キサマ、その器で俺を使う気か？？

この真っ暗な世界に悪魔のような声が轟く。

「誰だ！？」

？キサマは我を使う器ではない。苦しむが良い。？

すると真っ暗な世界は一転し、元の世界に戻った。何が起きたかと思っていると、剣を持っている手が自分の意思とは反して、ラーク自身を襲おうとしている。

それを必死にもう片方の手で、防いでいる。

「な…なんだこれは…!!」

ラークが可笑しくなったのを見ると、セイルはナイフを滑り投げ、ウィンディは咄嗟にそれを掴み、ラークの右足に突き刺した。

ラークは握っていた剣を落とし、痛みにもがき苦しんだ。その隙にウィンディは縛られていたロープを使って、ラークを縛り上げた。

「よくやったウィンディ……」

「でしょ！」

セイルはサラの肩を借りて、アジトの中へ入った。

元々が洞窟のため、設備のようなものはないが、床に広がる何十枚もの紙を見た。その中の一枚を拾った。

「これは……？ETHICS？の写真か？」

古汚い紙の中にはまだ若いロード・ゲールの姿や、若々しい上官たちの姿もあった。

「ねえ、私たちのもあるよ。」

一番真新しい紙を見ると、セイルやウィンディ、他のメンバーも小隊の一員となった仲間達全員の顔写真が載っている。その中でセイルの顔写真には丸がしてある。

「コレは何なの??」

「これで? E T H I C S ? の情報が流れてるってことか…」

ラークに話を聞こうと、ラークを見ると、ウィンディとサラは絶句した。

もうすでに舌を噛み切っており、自害していた。

「死人に口なし……か……」

この広がっている謎の紙を集めていると、一人の部下が目覚ました。

その部下をひっ捕らえて、この紙のことについて白状させた。

「こ、これは……俺らの世界で出回ってる情報? ゼタ? っていうもんだよ。」

価格は結構なものだが、相当な量の情報をいただけるのよ。」

「誰から買ってる?」

「それは知らない。全てラーク様が買っていたんだから…」

セイルは紙をまとめ、それを持って、証人の男と二人をバギーに乗せて、王国へと戻っていった。

「国に戻ったら、私たち、離れ離れになっちゃうのかな?」

ボソツとサラ姫が呟いた。

「コレもなんかの縁だし、また会えるよ。ね! セイル!」

セイルはバギーの運転に集中しているせいか、返事をしなかった。

王国へ戻る頃には日は昇っていて、王たちも戻ってきていた。壊された壁の復旧作業はすでに終盤を迎えていた。セイルとウィンディと男は王国に着くと、すぐさま王の間へと連れて行かれた。

「貴様らどういふことだ? どうしてこの城にいない?」

ソロモン王の声は荒げていた。

「昨夜、サラ姫及び城内の金品がこの者の一味の手によって、攫われそうになりました、それを取り返しにいきました。」

そう言って縄で縛り上げた男をソロモン王の前に突き出した。

王は兵士にその男を牢獄へ連れて行かすと、セイルたちに背を向けた。

「そういうことがならぬよう、お前たちを雇ったのに。何だこの様は。お前らはとっとと帰れ。」

ウィンディは弁論したげだったが、セイルはスツと立ち上がり、二人は一緒に出ていた。

玉座の間の外ではサラ姫とバルバトスが待っていた。

「行っちゃうんだね。」

「もうちょっと話が出来たらよかったね。」

サラとウィンディが話していると、セイルは風除けのゴーグルをして、バギーに鍵をさして、エンジンを吹かした。

「行くぞ。」

「わかった。じゃーね。」

別れを惜しみながら、セイルの乗るシートの隣に座った。

するとサラ姫はセイルを呼び、自分の首に付けてたネックレスを外して、セイルの首につけた。

ウィンディにも左手首に付いてた腕輪を外して、渡した。

「お土産に持っていて。私の事、忘れないでね。」

ウィンディはありがとうと言って、ニコニコとその腕輪を自分の腕にはめた。

セイルは着けてもらうと、バギーに乗った。そのあと、サラを指でクイクイと招き、顔を近づけさせた。

「また会う日まで。」

そう囁くと、頬に優しく接吻を交わした。接吻された姫は顔をポツと赤く染めた。

するとバイクを発進させ、その場から去っていった。

「あのお方に会うまで、絶対の警備をさせてもらいますよ。」

そういつて大きな弓を持ってバルバトスがやってきた。弓を強く引き、空へ矢を放った。その矢は天高く飛んでいった。

「貴方に出来るの？」

「やらせてもらいます。プリンセス。」

バルバトスは優しく手を引きながら、サラ姫を部屋と連れて行っ

た。

第十節：救出作戦（後書き）

続けて投稿します。

次の更新がいつになるかわかりませんが、がんばります

第十一節：暗躍組織

帰り道、ウィンディは大声を出して、荒げていた。

「ねーなんで、キスしたのさ！！あたしにはしてくれないのに！！！」

こうなると駄々っ子よりも手ごわい。

「ネックレスをくれたお礼さ。」

ゴーツとバギーのエンジンを吹かし、スピードを上げた。

「じゃあ私もプレゼントしたらしてくれるの？」

「考えとく。」

そういうとさらにスピードを上げて、？ETHICS？の本部へと戻った。バギーを駐車場に止め、二人は上官室にいるロードに捜査報告をした。

「そうか。ご苦労だったな。」

「それとコレ。」

そう言って、ラークの持っていた？ゼタ？と呼ばれるものを渡した。

「コレは何だ？」

「悪党の間で？ゼタ？と呼ばれるものだ。？ETHICS？の情報が漏れている。犯人を突き止めてくれ。」

ロードは二度ほど頷いた。それを見ると、二人は上官室から出て行った。二人はその足で本部内にある医務室へ向かった。セイルはそこで足の傷の手当をしてもらい、二人のケガの様子を見に来た。しかし？ETHICS？の医療技術は街の医療とはかけ離れて進化していて、ヴェシールの頭蓋骨の罅もエンジの打ち身もケロっと直っていた。

「明日から、任務に復帰できるぜ！」

「よかったね！！！」

そういつてウィンディは二人と手をつなぎ、わいわいと三人ははしゃぎ出した。するとそこに腰に長い刀を差している茶髪の男がや

ってきた。

「セイル。来い。」

その男はセイルを医務室から連れ出し、中庭に向かった。

「何かようか？ギルバード。」

「どうして俺のような天才がキサマとは違って、くだらないチームに組まれて、くだらない任務ばかりでよ。キサマはどうだ？立派な任務を任せられ、上官にも好まれ、そしては裁きを下す者と直接会い、見事な名刀まで頂くとはな。」

「嫉妬か？」

ギルバードはセイルの胸倉を掴み揚げた。

「嫉妬だ！！嫉妬に決まってるだろ！！俺は人を斬るような任務を受けたいんだ。」

「離せ。お前とじゃれあう気はない。」

その言葉のせいで頭に血が上った。

「キサマ！！！」

ギルバードは思い切り押し倒すと、鞘に収まっている剣の柄を握った。

「これ、止め。」

一人の老人の上官がギルバードの肩をポンッと叩いた。

「グレカル…」

柄から手を離し、グレカルと呼んだ老人を睨みつけて、去っていった。グレカルはセイルに細長い指の手を伸ばし、セイルを起き上がらせた。セイルは尻についた埃をはたきながら声をかけた。

「有難うございます。」

「いえいえ。」

細長い指を華麗に駆使して、櫓の杖を回して、セイルから離れていった。

セイルは部屋に戻り、汗を流すことにした。

ロードはセイルの持ってきた？ゼタ？を手にして、この施設の中に

ある裁判所へ向かった。そこには裁きを下す者より任命された裁判官が、常時二名以上の裁判官がいる。ロードは中に入り、二人の前に立った。片方の女性はうとうとと眠っていた。

「どうした？ロード・ゲイル君。」

老眼鏡をかけた老人が眼鏡を調節しながらロードの顔を見た。

「全開の任務で戦利品としてこれを得てきた。」

そういつて？ゼタ？を見えるように高いところに上げた。

「ほほう。またそんな情報誌が流れていたか？」

「ご存知で？」

「十年前にも似たようなものを見た。現職の？ETHICS？が金を得るために売った情報だ。一時期、どんな小隊も負けてしまう時期があったが：原因がそれだと追究されたとき、それを売ったものを調べ上げ、そく処分したものだ。」

「また金に眩んだ輩がいるということだな。」

ロードが話を続けようとすると、裁判所に杖を振り回しながらグレカルが入ってきた。

ロードの横を通る際にサツと？ゼタ？を取った。取るとその場で、ペラペラと捲って読んだ。

「これ面白いね。だけど、流出するのは危ないから、我々が管理するよ。」

「お願いします。流出した者は早々にファシリテイへ。」

それだけ言うと、ロードは三人に一礼して、裁判所を出た。

「それどうするんですか？」

「とりあえず放置じゃな。」

そういつて、裁判所の中央で宙にバラバラと放り投げた。それはヒラヒラと舞って、地面に落ちていく。

「すごく気持ちが良いの。」

そういつてグレカルは二人の真ん中の座席に座った。隣で眠る女性を起こし、コシヨコシヨと耳打ちすると、女性は立ち上がって、どこかへ向かった。

セイルはシャワーを浴び終えて、ソファアに座り、くつろいでいた。テレビには任務をした場所の映像が映っていた。そこにはサラ姫や王様の姿が映っている。カメラマンや記者に対して、怒りぶってコメントしている。見てみると、部屋に勝手にウィンディが入ってきた。

「ほらほら。こんなところでグダーっとしてないで、ご飯食べ行こうよ。皆元氣になったんだしさ。」

テレビを消され、ウィンディに無理やり連れられて、食堂へ向かった。ガヤガヤとしてる中、向かったテーブルにはすでに三人が座っていた。

「ほらセイル！ 飯食おうぜ。」

本当に頭蓋骨にヒビが入ってたのかと思えるぐらい、ヴェシールは元氣だった。テーブルには大きな肉の塊やら、見た目が美しいものまで、沢山の料理が並んでいた。セイルが席に座ると、会食は始まった。ヴェシールとエンジは手が止まることなく、食べ物をバクバクと口の中に入れていく。ウィンディはそれを見て笑っている。フザはマナーがなくてないと、少し不機嫌だった。セイルも少しずつ、食べ物を食べ出した。

「セイル！ 遠慮すんなって！ もっと食べよ。」

エンジがセイルの肩をトントンと叩いた。

「そうさせてもらっているつもりだが。」

セイルもあまりの騒がしさにだんだんとだが腹が立ってきていた。そこにちょうどロードが通りかかった。

「楽しそうだな？」

「ロード上官もご一緒はどうですか？」

フザが空いている隣の席を動かすが、ロードは横に首を振った。

「まだやらなくてはいけない仕事がある。明日からのお前らの任務も決めなければならぬからな。」

そういつて、ロードは去っていった。その後も五人は食事を続け

た。

刻はだんだんと暮れていき、真夜中にさしかかろうとしていた。セイルたちも寮の部屋に戻っていて、扉にはロックが掛かっている。すると？ETHICS？の本部の屋根の上周辺に奇妙な仮面を着けた全身黒尽くめの集団が現れた。

「目標を捕獲せよ。」

仮面を着けた一人が言うと、一人を先頭に周りの五名は一斉に動き出した。集団は忍び足で行動をして、目標のいる地点に向かって、進撃している。

「目標発見。」

一人がそう呟いた。そういつて確認すると、そこにはロードの姿があった。

「あまり物音を立てるなよ。」

そういうと、三人が一斉にロードに奇襲を仕掛けた。だがロードは殺気を感じて、サッと避けた。

「ほう。この？ETHICS？本部に侵入者か？」

だが侵入者が入ったというものの警報装置は一切ならなかった。セキュリティには、上級の設備を整えてあるというのにもかかわらず、奇襲を仕掛けてきた三人に気を取られていると、後ろにも三人現れ、挟み撃ちされてしまった。

「目標を捕捉。」

「相手が悪かったと思え。」

そう言っロードは、長めの剣を懷から取り出した。体勢を低くし、まず奇襲を仕掛けてきた三人に攻撃を仕掛けた。三人は鳥のようバラバラになって逃げた。今度は後ろから大きな鎌を持った者が一人、隙を突いて攻撃してきた。ロードはそれを上手くかわして、剣の刃を太ももに思い切り、刺そうとするが、大きな鎌の柄のところで後頭部を打たれてしまった。クラッとして、倒れそうになったが、なんとか踏ん張って、持ちこたえた。だが、残りの二人に押さ

え込まれてしまった。

「お前ら、一体何者だ？」

「極秘書を扱う暗躍組織だ。」

それだけ言うと、手に持っていたスタンガンをロードの首筋にあて、バチバチと痺らせると、気を失ってしまった。六人は気を失ったロードを担いで、闇の中へと消えてしまった。

次の日の朝、セイルは裁きを下す者に呼ばれた。

「保護者がいないと来ないと思ったが、よく来てくれた。」

セイルのカンに触れるような言い方だった。だが相変わらずここは神聖で、冷たい空気が流れている。

「ロードはいなくても歩ける。此処へこれる。」

「まあいい。座れ。」

そういつてこの前と同じソファアに同じように向き合って座った。「実はそのロードの件なんだが、昨夜、何者かとの戦闘を行い、どこかに拉致されてしまった。」

裁きを下す者の言葉に耳を疑った。訓練では負けしらずのあの男が誰に負けたというのかという思考が頭の中を駆け巡る。

「相手は誰だ？」

「さあ。でもロードは優秀だから、こんなものを残していったよ。」
そういつて取り出したのはボイスレコーダー。それをピッピと弄り、問題の発言を確認した。

「お前ら、一体何者だ？」

「極秘書を扱う暗躍組織だ。」

変声機で声は変えてあって、誰の声か全然想像つかない。一度聞かされると、裁きを下す者はすぐに内ポケットにしまい、セイルに聞いた。

「この極秘書っていうのは？ご存知？」

「その前に一つ聞きたい。争われた場所は？」

「この建物の中だ。朝、セキュリティシステムのプログラムが停止

状態にされていることに気づいて、搜索していたらコレが落ちていた。」

裁きを下す者はたくさんフルーツが詰まれた皿からバナナを取り出して、皮を一枚一枚丁寧にむき出した。

「俺が思い当たる節は一つ。？ゼタ？と呼ばれる書物だ。そこには？ETHICS？の個人情報やデータが載っていた。たぶんそれを造る集団では？」

バナナをパクパクと食べ、一本食べきると、皮をポイッとそこらに投げ捨てた。

「じゃあその集団を焦らせないように、できるだけいつもの生活をしてろ。チームメイトにはロードは出張したと言ってもっておけ。不在の間の担当は、グレカルに任務を与えられる。お前らにはいつでもどりの仕事をしてもらうつもりだ。では行け。」

そういつて手で払って、部屋から出させた。セイルはみんなにどういえばいいか、考えながら、みんなが集まる食堂へ向かった。

第十一節：暗躍組織（後書き）

もうすぐ二年経っちゃいます。
結構放置しちゃってますが：

温かく見守ってください

第十二節：ソシエル合衆国

「あ、セイルだ。どうしたのさ？そんな顔して？」

いくら暗い顔をしていても、険しい顔をしていてもウィンディは明るく出迎えてくれる。セイルは意を決していった。

「ロードが昨日出張に出たそうだ。いつ帰ってくるかはわからない。その間の代任はグレカルとなった。」

「ロードは強いから仕方ないぜ。さあ、飯を食って、任務に備えようぜ。」

ヴェシールは力強く、セイルの肩をドンドンと叩き、五人は一つのテーブルに着席した。

いつものように騒がしい食事の時間を済ますと、五人は完全な正装に着替えて、グレカルの前に横一列に並んだ。

「では私より任務を。今回は、ソシエル合衆国に広がる闇市場の実態を調査して欲しい。」

「闇市場？」

エンジが聞きなおした。

「そう、最近闇市場が急速に規模を拡大している。裏があると見ておる。」

車のキーを投げ渡され、四人は車に向かった。セイルも向かおうとすると、グレカルに耳打ちされた。

「もしかしたら、？ゼタ？がそこで売られているかもしれない。もしそうであれば、根絶やしにしてくれ。」

セイルは一回コクツと頷いた。車庫に向かう途中、セイルはギルバードに出くわしてしまった。ギルバードのチームメイトは巨大な箱を車に積んでいた。

「よう、また大層な任務を頂いたみたいだな。」

「お前らこそ、そのでかい荷物は何だ？」

「俺たちはこれを運搬よ。フリーダム・タワーの軍用基地に物資補

給をね。」

「なかなか任務だな。」

それだけ言うと、助手席に乗り込み、すぐに出発した。それに腹を立てて、車を思い切り蹴った。車は何事もなかったかのようにブーンと発進してしまった。

「さて、次は怪我しないようにしなくちゃな…。」

ヴェシールは首を横に曲げ、ボキボキと骨を鳴らした。静かな助手席を見ると、セイルは出発して間もなくというのにぐっすりと眠っていた。ミラーを使って、後部座席を見ると、フザは綺麗な姿勢で本を読んでいるし、エンジは携帯ゲーム機でゲームをしている。ウィンディは窓の外を眺めながら、髪の毛を弄くっている。

「ウィンディ、暇なのか？」

「うん。ひまー。」

「なら後ろから毛布を取り出してくれ。セイルがもう寝てるんだ。」
うんと頷いて、ウィンディはゴソゴソと後ろからフワフワとした毛布を取り出した。それを優しくかけてあげた。その作業を終えると、ウィンディはまたちょこんと座席に座り、窓の外を眺めた。

そこから東へと三時間かけて、ようやくソシエル合衆国に着いた。ソシエル合衆国はこの世界最大規模の国。異国民も多く、沢山の企業が成長と父さんを繰り返している。だが金持ちがいれば、また貧困層の人もいる。貧困層の人たちが、都市街の外れで、市場を開いている。そこで売られているものは自分らが作った野菜や家畜の販売、飲み水の販売、衣料の販売。ここまでなら普通の市場とも同じように見える。だがここでは、当たり前のように違法ドラッグの販売、人間の殺し合いによる博打、そして人身売買。その規模が酷く拡大していて、ドラッグで脳をおかしくしたものが、犯罪を犯す始末だ。国の警察が動くこうにも、危なっかしく、逆にやられてしまうので、今回？ETHICS？に仕事を依頼した。

合衆国に到着すると、政府の人間しか入れない場所の駐車場に車を止めた。

「よく来た。？ETHICS？の諸君よ。私の名はガロン。」

長い前髪で左目を隠した男がセイルたちを出迎えた。その男は統領の右腕とも言われる副大統領だ。

「闇市場の所在地は？」

「闇市場はいつも夕方から始まる。今行ったところで何も起きていないよ。」

セイルは目覚めたばかりの目つきでその男を睨みつけながら、話を続けた。

「ならどうする？」

「夕方まで観光でもしていたら、どうです？」

そういうと、トランクケースから五つの札束を取り出し、それを一人に一つずつ渡した。

「好きに使ってくれ。」

ウィンディはそれを受け取ると、セイルと腕を組んだ。

「ねえ、それじゃあウィンドウショッピングに行こう。」

ウィンディは無理やり、セイルをその場から連れ出そうとした。

「わ、私も行く。」

ウィンディに負けじと、開いている腕の方に並び、三人一緒に駐車場を出て行った。

残ってしまった二人は、それぞれ思いのものを買いに向かった。

三人は大きな高層ビルが立ち並ぶ街並を歩いた。

「ねー。このバッグ、超可愛い！！あ、これも！」

ウィンディは窓の向こうにある純白のバッグを見て、興奮している。フザはセイルの横にいて、緊張している。それと少しソワソワとしている。

「フザは欲しいものはないのか？」

セイルの突然の一言に、身体がビクッと反応した。

「え、えっと私は…あのバッグが…」

フザの指差したバッグとウィンディがあれやこれと選んだバッグを持って、会計を済ました。セイルは沢山の袋を持って、店から出

てきた。

「次行くぞ。」

それを聞くと、ウィンディはルンルンな気分でスキップしながら進んだ。フザは申し訳ないという表情を見せながら、セイルの後をゆつくりと歩いた。

「ねーねー。次は洋服を見に行こうよ。」

後ろを歩くセイルたちを見ながら歩いていると、体格の良い数名の黒人とぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい。」

ウィンディはすぐに頭を下げて謝った。だが黒人たちは、後ろから急にナイフを取り出した。目を血走らせながら、ウィンディの後頭部目掛けてナイフを刺そうと振りかざした。咄嗟に動こうとしたのだが、荷物がジャマで絶対に間に合わない。すると目に見えぬ速さで、ナイフを振りかざした黒人の手の甲に別のナイフが刺さった。男の痛がる声に気づき、ウィンディは状態を戻した。だが黒人達はこれに怒りを覚えて、手の関節をバキバキと鳴らしだした。

「フザ、持っていてくれ。」

買ったばかりの荷物をサツとフザに渡すと、モノの数秒で黒人達に峰打ちし、気絶させた。

「一体どうしたの？」

「わからない。だが常人とは少し感覚が違うようだ。警察を呼んで、検査してもらおう。」

通行人に警察を呼んでもらうよう指示すると、セイルはどこから飛んできたナイフを拾った。柄の部分にはなにやら、見たことのある紋章がある。

「ちよつと、そこの人たち。」

どこからか高い声が聞こえた。振り向くと、まだ十五歳にも満たさないような女の子が

いた。その娘の手首にはナイフと同じ紋章があるブレスレットをしていた。

「そのナイフ、返して。」

「君のかい？」

「ええ。ちょっと練習しててね。」

女の子はナイフを受け取ると、人ごみの中へと消えていった。その後警察の方々がやってきて、黒人達に手錠をかけて、すぐ刑務所に連行して行った。セイルは残った警察官と話をした。

「あの性質の悪い連中は、ドラッグによる異常者ですね。」

「あの連中は、どこでドラッグを買うんだ？」

「多分、北東の方で夕方からやってる市場だな。ミシエルドという男がやっている。」

「誰なんだ？そいつは？」

「元々軍人で、地雷搜索中にミスして、片腕を失くして、それから軍では使えぬと強制解雇を食らったんだ。それからもう三年経って、半年前から市場を開いている。ではこれから仕事があるので、失礼します。」

警察官はセイルに敬礼をすると、白バイに乗って、警察署に帰っていった。

「悪いな。」

そう言っ、フザに渡した買い物袋を手にした。ウィンディもあり急ぎすぎないよう、前に出すぎないようにした。だがその後も夕刻になるまで、三人は買い物続け、ついには札束三つがなくなろうとしていた。

「そろそろ時間だ。戻るぞ。」

ウィンディは嫌そうな表情を浮かべたが、もう三人では持ちきれないぐらいの量の荷物がジャマになっていた。三人は車を止めた駐車場に戻っていた。車の前にはすでにエンジンとヴェシールが待っていた。買った荷物を全て車の中に入れると、五人は？ETHICS？のコートを着た。

「やっぱ、これを着なきゃな。」

エンジンはコートを着た感触に、気持ちいいぐらいのフィット感を

感じていた。次にフザとヴェシールはそれぞれの武器を取り出した。五人が準備を整えたところで、ガロンがやってきた。

「普通の乗用車を用意いたしました。私の部下が案内します。」

ブーンと五人の前に一台の車がやってきた。五人が乗り込むと、何も言わずに発信した。

車は地下の駐車場を出ると、猛スピードで闇市場に向かった。

第十二節：ソシエル合衆国（後書き）

今回もまた連投です。

軽い気持ちで呼んじゃってください

第十三節：極葉（前書き）

だんだん文章が下手になってるかもしれません
最後まで読んでみてください。

第十三節…極葉

少し離れたところから車を止めて、やけに光が集まっているところを見つけた。そこが闇市場だとすぐわかった。フザがライフルのスコップを覗いて、様子を見てみると、異様なまでに人ごみが出来上がっていて、袋に入った白い粉を買っていたり、銃やナイフなどの刃物も買う者もいた。

「これ以上近づくとは危険なので、ここからは徒歩でお願いします。」
五人は運転手に従い、車を降りた。降りると車はすぐに立ち去っていった。

「市場には、二手に分かれて入る。まずは、俺とフザが行く。十五分経ったら、残りの三人が来るんだ。」

セイルの作戦を五人は聞き入れ、セイルとフザが真っ直ぐに市場に向かった。三人は腕時計に明かりを照らしながら、時間が過ぎるのを待った。

市場に入ると、まずは沢山の人が行き来をしている。お店は地べたにシートを広げて、形の悪い野菜を売る野菜の店や新鮮ではない魚屋、鶏の生きているところから裁く肉屋が立ち並んだ。

「何が起こるかわからない。絶対に離れるな。」

フザは表情に現れないように喜んで近づいた。だがまわりには、昼間見た黒人のような人相の悪い面がゴロゴロいる。奥に向かうにつれ、サーカスをやるかのようなテントと店舗のような小さなテントが多くなってきた。そこまで入ると、警備のような人が濃くなって、セイルたちの服装を凝視してきた。そんなこと気にしないで、一つの小さなテントに入った。

「ここは何を売っている？」

「闘技場のチケットを売ってんだよ。買うのかい！」

やつれたおばさんが、新聞のように丸めて叩き売りのような感じで商売をしていた。

セイルはあてが外れたが、何かの役に立つかと、チケットを二枚買った。もう一つ、別のテントに入った。その中では数名の男達が酒を飲んでいた。そのテーブルの中にセイルは無理やり混じった。

「なんだてめえはよ？」

酒の入ったコップを取り、思い切り飲み干した。

「まずい酒だ。」

その言葉で頭にきた一人が、血管が浮き出た手で、セイルの胸倉を掴んだ。

「暴力か？そんなことより、ミシエルドという者に会いたいんだが？」

奥から空瓶を持った男がやってきて、セイルの胸倉を掴む男の頭にその空瓶をぶつけ、気絶させて倒した。

「俺がミシエルドだ？なにかようか？」

噂では片腕をなくしたと聞いていたが、綺麗に両腕揃っている。

「あんたがミシエルド。この市場の経営者か？」

「ああ、そうだよ。？ETHICS？が可愛い女の子を連れて、こんなどこに何か用事でも？」

「？ゼタ？というものを知ってるか？」

セイルはいきなり、直接的な質問をぶつけた。ミシエルドは近づいて、他の誰にも聞こえないように口を開いた。

「ああ。知ってるぜ。セイル・K・ラディア君。」

そう言って、テーブルの上にある酒の入った瓶を掴み、グビグビと飲みだした。剣の柄を握ろうとすると、ミシエルドの目がギロツと動き、セイルの手の動きだけを見た。

「その剣の事も、知ってるぜ。最近じゃ、ラークを潰したってことも。」

そこまで聞いて話は早いとふみ、鞘から剣を抜いた。

「なら？ゼタ？を回収する。」

呑みきった酒瓶を思い切り、地面に叩き付け、服の裾を肘の上まで上げた。

「久々に楽しめそうだ。」

店内にいた男達は店に並ぶ酒をゴソつと持って、テントの外へ出て行った。相手は剣があるにもかまわず、セイルの顔面を目掛けて殴ってきた。刃を向けて防ごうとするが、気にもしないでセイルを殴った。剣が破壊されるかと思うほどの一撃だった。だが相手の手には傷一つ付くことなく、セイルはテントの外へ吹っ飛ばされてしまった。

「なんだあいつは？」

フザは吹っ飛ばされたセイルに駆け寄った。

「大丈夫？」

「それより、少し離れてろ。」

セイルの言う事を素直に聞き入れて、距離をとった。するとすぐにテントからミシエルが出てきた。

「一発でへばるのか？」

「お前が、？ゼタ？を売りさばっているのか？」

「正確には転売だな。一回俺に売られた情報をさらに高い金で売りつけてるのさ。」

左手でセイルの頭を掴み、持ち上げた。セイルはじたばたしながら、ミシエルの腹を蹴り飛ばした。手が開いた隙に、斬りかかろうとするが、刃が見事なまでに捕まれてしまっている。いくら抜こうとしても、手が切れる感じはしないし、何しろビクともしない。

「弱えな？ETHICS?！」

空いている手で、殴ろうとするが、フザの行動に気がついた。フザが遠いところから、左腕目掛けて狙いを済ましていた。あわてて、セイルの剣から手を離し、距離をとった。

「ミシエル様！そろそろお時間です。」

さつき酒場にいた一人の男が大声で呼んだ。

「わかった。今すぐいく。」

そういうと、地面に片手を付き、その勢いでセイルの腹を目掛けて、蹴飛ばした。セイルは吹っ飛ばされたまま、小さなテントを次

々と壊してしまった。フザはライフルで狙い続けていたが、セイルの事が心配になり、銃口を下ろして、助けに向かった。それを見届けると、ミシエルドは大きなテントの中へと走って向かった。

争いが終わる8分前

残された三人は時計を見続け、十五分経ったのを見て、市場の中に入ってしまった。

「セイルたちは、何処へ行ったんだ？」

ヴェシールを先頭に市場の中を歩いていった。

「やっぱなんか怖い感じするね……」

ウィンディが恐怖で体を縮こまらせ、ヴェシールの服の裾をギュツと握っていた。

「荒くれ者なんか沢山いそうだな。」

いつでもサツと銃を出せるようにだが、エンジはちよつと不自然な歩きかたをしながら、一番後方を歩いている。

「おい、お前ら、他所モンだな？」

鈍らを持った一人の男が、三人に突っかかってきた。

「そんなことはない……」

「こんな綺麗な格好して他所モンじゃねえだ？」

その一人の罵声にどンドン野次馬が集まってきた。だんだんと三人は身動きが取れなくなってきた。

「任せろ。こういう時はな。」

エンジはおもむろにポケットに手をつ込み、くしゃくしゃとした紙を何十枚も取り出し、空へパァッと投げた。

「受け取れ！」

「こりゃなんだ？」

野次馬として集まった一人が一枚の髪を掴んだ。広げてみると、この国の紙幣だった。

「金だ……！」

金だとわかると野次馬たちは空に舞う金を我のものだ我のものだ

とかき集めた。その騒ぎのウチに三人は急いで逃げ出した。あわてて逃げてしまったので、何処へ逃げたのかさっぱりわからず、また人が少ない道に入ってきてしまった。

「ここはどこなの。」

ウィンディが弱弱しい声で、ヴェシールに訴えた。

「さ、さあな。でもあっちにあの大きなテントがあるから。あっちに向かうから心配ないぜ。」

「それじゃあ、早くあのテント行こうよ。」

「そうだな。ところでエンジはどこだ？」

さっきまで一緒だったエンジが姿を消してしまった。二人は辺りを警戒するが、どこにも怪しい人はいない。何処へ行ったのか：

「二人とも！」

エンジの声がする。声の聞こえるほうに向かうと、エンジが壁の影から何かを見ていた。

「何見てるんだ？」

「ドラッグの押し売りだ。」

エンジの目先と一緒になってみてみると、数名の男が、一人の少年に薬を売り渡していた。少年の渡す金額がまだ小さいため、始めたばかりだと思われる。

「止めなきゃな。」

ヴェシールは大きな身体で、その現場へ突入した。

「なんだこのでかいのは！」

「今は渡すな。散れ！」

巨大なハンマーを大きく振り回した。その中で一人の男を殴り、気絶させた。

「ち、鎮静剤でも無理やり打て！」

少年は腰が抜けて、その場にへたり込んでしまった。ドラッグを売る男の一人は、トランクケースから一つの手のひらサイズの瓶を取り出し、それを特殊な銃に銃弾のように弾を込めた。

「おい、それって…」

「構うもんか。」

男は構わず、ヴェシールの首筋を狙って、それを放った。サイレンサーを着けていたのか、発砲音は鳴り響かなかった。その弾のようなモノは見事にヴェシールの首筋に刺さった。それを食らった途端、瓶の中の液体が体内へと少しずつ入っていった。ヴェシール体内に何かが注入されているのを感じ、空になる前にそれを取り、どこかへ放り投げた。刺さった箇所から血が流れるのをヴェシールはポケットから出したハンカチで抑えていた。

「お前、あれは極薬だぞ。」

「う、嘘だろ。」

ドラッグの売っていた男達は、急にざわめき出し、大急ぎでその場から逃げ出した。陰に隠れていた二人は、近寄ろうとしたが、ヴェシールが突然暴れ出した。徐々にヴェシールの体が大きくなっていく。

「ヴェシール！！」

二人が彼の名前を呼んでも、見向きもせず、暴れ続けている。エンジは気絶した男を無理やり、目覚めさせた。

「おい、極薬ってなんだ？」

「極薬か？あれはすげえ薬だ。昼間はなんてことねえが、夜になるとそれは、人に異常な力と恐怖を与えて、暴れていなければ、気が落ち着かず、時には殺しもなにもかもするって話だ。まだ実験段階で鼠の実験だけで、人体へはまだ未投入なんだ。」

男が説明をし終わると、エンジはヴェシールに銃を構えた。

「止めなくちゃいけねんだな。」

左足に狙いを定めて、銃を構えたが、仲間を撃つということに気が引けてしまい、引き金を引くことが出来ないでいた。グズグズとしていると、暴走しているヴェシールに思い切り殴られてしまった。

「大丈夫？」

ウィンディが声をかけるが、気絶していて、声は届いていなかった。エンジに起こされた男はある悪巧みを企んだ。思いつくと、ポ

ケットから注射器を出して、すぐにウィンディをその麻酔で眠らせ、二人をどこかへと運び、さらに沢山の仲間を引き連れて、またこの場所に現れて、幾つものの麻酔と鎖でヴェシールを抑えると、またどこかへと連れて行った。

第十四節…ゲーム

フザは壊れたテントを辿って、吹っ飛ばされたセイルをようやく見つけた。

「セイル！セイル！！」

セイルの体を揺らし、何度も声をかけたが、なかなか目覚めようとはしない。フザはセイルを安全な場所に移し、意を決した。ライフルを三つのパーツに分けて、コートの中に隠し、大きなテントの中へと入っていった。

テントの中は薄暗い明かりしかなく、ゴロツキの悪い輩がお菓子やら何やらを手にして、椅子に座っていた。座席が輪の形になっていて、中央には闘牛場のような広場があった。フザはチケットに書いてある番号の座席に座ると、だんだんと明かりが強くなっていった。すると、いきなり空中で人が宙を舞っていた。さらに賑やかな音が鳴り出した。

「さ、サーカス？」

すると随分と高いところで一輪車を使って綱渡りが始まっていた。フザはすっかり見入ってしまい、サーカスを楽しんでいた。中央の広場にはピエロが出てきて、ジャグリングを披露し出した。それが終わると、熊がバイクを乗り回していたり、像が重そうな車を引っ張ったりと、見ごたえのあるものが次々と休む間もなく出てくる。周りと一緒にあって拍手までしてしまっていた。小一時間もすると、ジャグリングをしていたピエロがマイクを手にした。

「ではメインフェスティバルの開催です！！」

ピエロがそう宣言すると、観客が一気に湧き出した。それと同時に中央の広場の土が二つに割れた。もっと下にはまた土が広がっていた。上にはモニターが現れた。そのモニターに写るのは、高価な鎗を持ち、丈夫そうな甲冑を着け、万全の様子の子士。それと手に斧を持たされ、ボロボロの衣服を着る動揺している男。

「ではコロッセウムの開始だ。」

ピエロがマイクにそう言いかけると、騎士は槍を構えて、走り出した。ボロボロの衣服の男は斧を捨てて、一目散に逃げ出した。騎士は慈悲を見せることなく、兜の奥の顔はニヤリと笑みを零した。男が捨てた斧を拾い、再び追いかけた。男はいくら逃げようとも周りは壁で囲まれていて、恐怖からは逃げようにも逃げられずにいた。追いつこうとしている騎士から再び離れようとする、騎士の手から投げられた斧が逃げようとしたほうの壁に刺さった。それで完全に腰が砕けてしまい、男はジリジリと迫る恐怖に土下座した。

「お、願いです。殺しは…死だけは…」

その声はスピーカーを通じて、聞こえた。だが間もなく、グサツと男の背中を一刺しした。さらに刺す場所を胸部に変えて、宙に上げられる男が写された。観客はそれを見ると、再び大きな歓声を上げた。フザは大量の血が流れるその映像に目を閉じ、手で口を塞いだ。

「それではセカンドコロッセウムだ!!」

一人の人間が死のうが構わず、ピエロはどんどん進行していく。甲冑を着た男は会場の外に下がり、代わりに二本の軽そうな剣を持った黒い肌の女が出てきた。反対側からは、刀を持った男がやってきた。戦いは何の合図もなく、すぐにはじまった。フザは再び目を開いた。

男は先手必勝だと、思ったのか、女に切り込んだ。だが女はそれを軽々と回避して、腹に二度斬撃を与えた。男は傷を負い、膝を屈してしまった。それをいいことに女は次々と男に斬撃を加えていく。全身は傷だらけとなり、肌は見えなくなり、だんだんと血だらけになっていく。もうこの時点で見れなくなり、再び目を閉じた。観客の歓喜が戦いの終わりを告げた。その後も幾度もコロッセウムは続いた。時間は二時間以上も経ったのにもかかわらず、観客は相変わらずの元気だった。ピエロはマイクを持つと、一番嬉しそうに喋り出した。

「次の戦いは貴重な戦いだ。なんせ？ETHICS？同士の闘い。片方は極薬を使われ、意識朦朧、野蛮さ莫大。対しては、相手は二人。銃を持つ男とナイフを持つ少女。ドッチが勝っても面白い。ではファイナルクロッセウム。」

？ETHICS？という発言を聞き、フザはモニターを見た。映像にはウィンディとエンジが映っている。そして後から出てきたヴェシールは暴れながら出てきた。すでに控え室で抑えようとしていた数名を死に追いやっていた。観客も今日最大の歓喜で湧いた。モニターで二人はどうやって暴走を止めるか話し合っていた。

「あのでかいのを俺らでどうやって止めるんだよ！！！」

「とりあえず、足を撃って動きを止めてみれば？」

ウィンディの意見に賛成し、エンジは銃を構えた。暴れているヴェシールの足に狙いを定めた。銃弾を放ち、足には当たるが、葉がききすぎているせいで、相変わらずの暴走振りで、エンジたちを襲ってきた。

「効かない……」

ヴェシールの猛襲に二人はただ逃げることしか出来なかった。フザは暴走を止めようと、立ち上がり、テント内にあるトイレへと向かった。そこで三つのパーツに分けたライフルを組み立てていると、後ろから声がした。ハッと振り向くと、そこにはミシエルドの姿があった。

「困るな。クロッセウムは部外者からの攻撃は禁止だよ。それに試合のジャマをすると、観客に殺されちゃうよ。だけど君みたいな綺麗な娘なら別かもね。ソシエル軍少将サラウザン・クレイアの娘、フザ・クレイア。」

名前や父親の存在を軽く上げられ、フザは心臓に鋭いものが刺さったかのような気持ちになった。

「なんで、とでも思ったか？これも？ゼタ？に載ってることだ。」
ミシエルドはそれをそこいら雑誌のようにバシバシと叩き、その存在を誇示した。

「これほど世界を脅えさせるものはない。あらゆる裏事情というものが乗っている。特に？ E T H I C S ? に関しては愛用の武器、その特徴、戦略、気づかれているものは弱点も乗っている。だが君の場合は今日判明した。」

ミシエルドは数名の部下を呼び、フザの手首足首を縄で縛ると、どこかへと連れて行った。組み立て途中のライフルを拾い上げると、観客の騒ぎ方が変わった。少しブーイングが交じったり、反応が途切れ途切れだったり、いつもとは違う騒ぎ方。何かを感じ取ったミシエルドはテントの中で一番高いところにある個室へ向かった。そこにはたくさんの小さなモニターがあり、コロッセウムの様子であったり、観客の様子はここで会場の様子を見ていた。モニターを見る限りだと、ヴェシール動きは鈍くなってきたいて、二人は容易く避けられるようになり、攻撃も少しずつだが効くようになってきている。

「このままでは見せ場がもったいないな。」

フザのライフルに極薬入りの銃弾を装填した。窓を開けて、狙いを定めた。ズドンと放ち、それは見事にヴェシールの首筋に刺さった。中の液体が体内に取り込まれると、体はさらに大きくなり、身長は推定3メートルにまで及んだ。

「ミシエルド様、極薬は24時間以内に二本以上打ってしまうと、体が滅ぶのでは？」

「所詮政府のペット？ E T H I C S ? だ。そういうやつらは滅ったほうがいいに決まってるだろう。」

そういうと、木製の椅子に座り、モニターに映る映像を眺めた。映像の中で、ヴェシールは最初よりも酷いぐらいに暴れ出した。容易く避けていたはずの二人も、攻撃が掠るようになってきてしまっていた。

「なんか変わったぞ！」

「これじゃあ、どうしようもないよ。」

飛びながら避けていたエンジが地面に着地しようとすると、張り

手で思い切りビンタされてしまった。壁に埋もれるほどの衝撃だった。その威力は人のものとは思えぬほどだった。だが観客の歓喜は今以上に盛り上がった。

「さあ、ここで？ETHICS？が何人死ぬか？ゲームでもしようか？」

モニターを見ながら、ミシエルドが部屋にいる仲間に行った。

「そうですね。まああの壁に埋まった奴と葉吞んだ奴が死ぬとして二人ですかね？」

コーヒーを飲みながら、のんきに答えた。

「考えが甘い甘い。俺の予想じゃ、三人は死ぬ。ということで掛け金は10万リクルでな。」

「高すぎっすよ。ちよつと僕、トイレ行ってきます。」

そう言って、コーヒーをテーブルに置くと、部屋を出て行った。階段を降りて、男子トイレに入っていた。そこで用を足している、セイルが入り口に突っ立った。用を足し終え、二人は顔を見合わせた。

「お前は…」

「お前には何の怒りもないが、場合が場合だ。ミシエルドはどこだ？」

背中から死を伝えるオーラ、恐怖を感じる。言わなければ、絶対殺されると思った。

「い、一番上の個室にいる。」

それだけ聞くと、去ろうとするが、男はミシエルドに迷惑はかけまいと、銃を構えた。

「良い度胸だな。」

セイルはそれに気づき、居合いの太刀でその男を斬り倒した。

「傷は浅い。病院に行けば、直るはずだ。」

そう言って、立ち去った。上へ行く階段を見つけると、すぐさま昇り、扉をゆっくりと開けた。

第十四節：ゲーム（後書き）

一ヶ月ぶりの更新ですが、
待っていない方のほうが多いですか、読んでみてください！

第十五節：壊滅：

「随分長かったな。たまってたか？」

ミシエルドは扉の方の様子を見ず、モニターを見ながら、コーヒ―を飲んでいた。

セイルは忍び足で近づき、刃を首筋に当てた。

「少しぐらい警戒したらどうだ？」

ニコヤカだった表情が一瞬できりつと変わった。

「お前か。モニターを見てみたらどうだ？」

セイルは少しモニターを見た。その映像を見ると、刃を立て、いつでも斬るような体制にした。

「三人をどうした？」

「私は何にも。ただあの大きな子の意思で暴力を振るっているだけだよ。それよりそんな物騒なものを向けるな。」

そう言って右手でセイルの刀の刃の部分思い切り握った。セイルは背中からもう一本のナイフを取り出した。それをまた首筋に当てた。

「悪いな。武器は二つある。」

だがその脅しにミシエルドは脅えることもなく、ふと笑い出した。セイルはその様子を見て、ナイフで突き刺そうとしたが、モニターの映像を見ると、ヴェシールによって、二人が殺されそうになっているのだ。

「くそ：」

一瞬握る力を弱めたと思うと、ミシエルドは刀を奪い取り、セイルを思い切り、裏拳で殴った。セイルは思い切り壁にたたきつけられてしまった。

「？ETHICS？の分際で、こんな良いもの持っていやがって。」
ミシエルドは刀を窓の外へ投げた。それはくるくると回りながら、三人がいる会場に突き刺さった。

「続きしようか。？ETHICS?!！」

そう言って、見覚えのあるライフルでセイルに向けて乱射した。セイルは見切れる分は全て弾き落とした。だが見切れていない分は足を掠ったり、頬を掠ったりしてしまった。

「ちえ、弾切れか。」

ライフルを放り捨て、ミシエルドは殴りかかってきた。セイルの頭を掴み、身体を持ち上げると、腹部に思い切り膝蹴りをかました。その重い一撃にセイルは握っていたナイフを落としてしまった。ミシエルドはそのまま、別の壁に投げ飛ばした。

「こんなもんか？」

セイルはフラフラと立ちながら、上の立場のような言葉遣いで言った。全身はもう余りに痛くて、言う事を聞いてくれるか解らない。

「ほう、元気なやつだな。」

セイルの落としてしまったナイフを手にした。

「ケリを着けてやるよ。」

素晴らしい残すと、ナイフを投げようとするが、ミシエルドの動きがそこで止まった。いや正確には右手の動きだけが止まった。

「なんだ…これは…」

ミシエルドが動揺しているのを見ると、全身に残る力を使って、タックルをした。衝撃は余り大きくないが、少し足元をグラつかすことが出来ると、さらに蹴りを加えて、ミシエルドを窓の外へと動かした。

「動け!! 動け!!」

ミシエルドは必死に右手を動かそうとしているが、その手は全く動こうとはしていない。

セイルは最後の一撃とも言える拳で、窓の外へと突き落とした。セイルはそれで力尽き、その場で大の字になって倒れた。だがミシエルドの右手がガシリと窓枠を掴んでいた。

「こんなとこで終わってたまるか!!」

そう言って、よじ登ろうとするが、急に右肩のところでプシュー

プシューと蒸気が出始めた。すると肩から腕と体は外れてしまい、ミシエルドはそのまま落下して、沢山の観客のいる中へと落ちていった。すると二つの頭を持つ龍と天使のような翼を持つ少年の姿に変わった。

「やっとな解放された。助かりましたマスター。」

霞む視界の中で、天子の翼を持つ少年は話しかけてくる。

「お前は、何だ？」

「私はウアラク。貴方の僕の一体であり、アモンの仲間です。」

「そうか……」

「大分お疲れのようで。フェニックスほどではないですが、治癒の能力がありますので。」

そういうと、ポケットから薬瓶を取り出し、セイルにグビグビと飲みました。その薬を飲むと、セイルは疲れが少し消えたのを感じた。立ち上がって、窓の外を眺めた。二人は必死に逃げている、今のヴェシールに人の心のようなものは見えない。助けに行っても、この傷や素手では足手まといになりかねない。

「どうすればいいんだ。」

「仲間はあの三人だけですか？」

ウアラクの一言にセイルはフザの存在を思い出した。だがどこにいるのかさっぱり解らない。セイルはひとまず、この部屋を出て、会場の周りの廊下を歩いた。どこかに人を隠れさすような倉庫がないか探しながら歩いた。だが目星となるものは一切見つからない。

「何処にいるんだ？」

「探しものなら私にお任せを。」

ウアラクを乗せる二つの頭を持った龍は目を光らせて、その場で四方八方を見た。ある一点で二つの頭の動きが止まった。

「あっちだ。」

二人はその方へ向かっていくと、小さなテントがあり、その前には数名の輩がいる。コレだけの傷を負っていてもかてるものかと、不安にしていると、ウアラクはツンツンと頭でつついてきた。

「私をお使いになってください。」

ウアラクは以前のアモンのように少年のような姿から、二つの銃口を持つ銃の姿になった。セイルはその銃を手にとると、構えながら数名の輩に挑んだ。銃を構えられると、輩はサツと手を上げて、後ずさりした。守りが弱くなるのを見ると、セイルはテントの中へ駆け込んだ。

中には縄で縛られたフザの姿があった。フザの縄を解くと、すぐさまこの場所から離れて、ミシエルドと戦った部屋へ向かった。ライフルを拾い、それを渡した。

「フザ、あの縄を撃ってくれ。」

ポケットから新たな銃弾を取り出し、空のライフルに装填した。狙った縄とはサーカスの時に空中ブランコでもし失敗したときのための非常用のネットと柱に繋がれている部分だ。

「俺は下に行って、あいつらを助けに行く。四本目は一番近いのを撃って、すぐ会場に下りてこい。」

そういうと、窓から会場に飛び降りた。フザは言われたとおり、まず一箇所を打ち抜いた。会場の観客席に着くと、ミシエルドが我を失って暴れていた。

「そこをどけ!!」

二つの銃口のある銃を向け、ミシエルドに構えながら、中央のコロッセウムに近づいた。

だが一向に暴れるので、セイルはミシエルドをコロッセウムに蹴り落とし、セイルもすぐに一緒に落ちた。セイルが来たことで必死に逃げていた二人に笑みが零れた。セイルはすぐに弾き落とされたアモンを見つけ、それを手にした。上の状況を見ると、フザは三本目を打ち抜いていた。

「あと一歩か……」

ヴェシールの顔をよく見ると、やけに悲しみに満ち溢れていた。逃げ回るウィンディとエンジと一緒に走って走り、作戦を伝えた。二人は了解すると、バラバラに動き出した。

「このでけえの！来るな！！！」

ミシエルドは我を取り戻し、懇願したがヴェシールに声は届かず、ミシエルドに数え切れないぐらいの拳を与えて、止めの張り手でミシエルドは壁の中へと埋まってしまった。

そのときのミシエルドはすでに人の顔をしていなかった。ミシエルドに視線が行くことで時間を稼ぐことが出来て、空からネットがゆっくりと落ちてきた。フザもセイルと同じ要領でコロッセウムまで下りてきた。ネットの端を一つずつ四人で掴み、ヴェシールの体をネットで覆った。

「今、止めてやるからな。」

セイルはそう呟き、漁獵のようにネットで一匹の大物を捕らえた。ヴェシールは足を崩して倒れるが、まだ暴れ続ける。四箇所を固く縛り、ネットの中へと閉じ込めた。ウィンディとエンジは疲れて、その場にへたってしまった。

「もー疲れたー。」

ウィンディの足はピクピクと少し痙攣もしていた。セイルはイアーシーバを耳につけ、誰かと連絡を取り合った。

「ヘリコプターを三台、コチラに送ってくれ。」

「帰りは空か？」

エンジの言葉に首を振った。

「この状態のヴェシールをヘリで本部へ運んでもらう。俺たちは、まだ仕事が残っている。」

そういうと、急に観客から、沢山の瓶や缶、それにゴミまで飛んできた。

「こいつらをこの場から排除しなければいけない。」

セイルは壁に穴を開けて、どこかの道と繋がると、四人はそこを通って、会場へ上がった。

会場には千、二千を超える人々がいた。

「そんな強くないかもしれないけど、この数は凄いよ……」

ウィンディはナイフを構えているが、コレだけの数に少し脅えて

しまっている。

「一人一人、倒していくしかないだろ。」

「そんな…。」

セイルがその行動に移ろうとすると、外からキュルキュルといった機械音が聞こえてきた。そして会場の中に何台もの戦車が入ってきた。

「我々はソシエル軍だ。お前ら全員を確保する。」

一台の戦車のスピーカーから、声がした。千を越えていた人々はゴキブリのようにバーツと辺りに散っていった。

「軍だと？一体どうして？」

一台の戦車が近づいてきて、セイルたちの前に止まった。戦車の中から一人の太ったおじさんとガロンが出てきた。

「いやはや、素晴らしい。本当にミシエルドを玉砕してくれましたね。残りは軍隊に任せなさい。」

「はじめからこうしてれば、いいんじゃないのか？」

エンジンがもう誰もいない会場の光景を啞然としてみながら、聞いた。

「いやいや、ミシエルドの爆発的な攻撃力で戦車が破壊されてしまうのですよ。だからミシエルドさえ潰してくれば、あとはこっちの思い通りで。」

太ったおじさんとフザはおたがいを見合って、うるうると涙を溜めていた。

「フザ。今まで何処に行ってたんだ？」

「ご、ごめんなさい。お父さん…。」

二人の感動を壊さないためと、セイルは二人を連れて、ヴェシールが暴走しないように見張った。

「なんで、？ETHICS？なんかに入ったんだ。」

「お父さんは私の話なんて、聞いてくれないんだもん。子供はおもちゃをあげてれば、それでいいってわけじゃないんだよ。だからこうやって、私が行動しなくちゃ、いけなかったの。」

「家に帰ってきてくれるのか？」

「無理だよ。私は？ETHICS？だよ。これからもいくつもの任務をこなさないといけないんだ。」

二人は固くきつく抱き合い、再会した感動に浸れていた。

「そうか。ただどいつかきつと、また家に帰ってきてくれ。友だちを何人でも呼んできていいから。」

フザは満面の笑顔でうんと言うと、セイルたちと一緒に並んだ。

軍隊がテントを退かすと、空から？ETHICS？のヘリコプターがやってきて、ヘリコプターのフックをヴェシールが入っているネットにかけると、そのまま空へと再び上昇した。空は真っ暗だったのが、少し明るくなっていった。

「じゃあ、帰るか。」

四人は軍隊と一緒にソシエルの中央都市へと帰っていった。残った軍人の一人が、何十枚も重ねられた紙を見つけた。その内容を確認すると、誰にも見られぬよう、服の中へと隠した。

第十五節：壊滅：（後書き）

少しずつですが、読者の方々が増えていっています。
これをばねにこれからも続けていきたいと思っています。

第十六節：G9

エンジがかなり強くアクセルを踏んで、スピードを出していたのもあって、本部には案外行きよりも早く着いた。任務の報告をしようと、車を華麗に降りたが本部の中は大変なことになっていた。本部内にある窓がない部屋でセイルが連行を頼んだヴェシールが再び暴れているのだ。

「嘘でしょ!!」

ウィンディはドツと面倒だったことが脳裏に蘇ってきて、セイルの後ろに隠れた。するとウィンディの後ろから大きなドレスを着た上品な妃のような人がやってきた。

「その小娘、どきなさい。」

そう言つて、センスでウィンディの尻をピシッと叩いた。突然の刺激にウィンディは過剰に反応して、すぐ道を開けた。道が開くと、上品な妃のような人は再び歩き出した。その人が通ったあとはいい香りが鼻についた。良い香りをかいで、自分の汗臭い匂いが嫌になったウィンディはセイルの耳元に口を寄せた。

「ねー、なにあれ。凄く感じ悪いんだけど。」

ウィンディはぶつくさとセイルに上品な妃の嫌味を小声で伝えた。その妃は足を止めることもなく、ヴェシールのいる部屋へと入っていった。

「あの人、やばいんじゃないの?」

エンジが慌てて止めに行こうとすると、後ろから誰かが止めた。セイル以外の三人はまるで見たことがなかった。肌が女の子よりも白く、細い少年の姿。その手にはリングが収まっていた。

「彼女は御三家の一人ですよ。彼女には彼の動きを止めてもらい、体内の毒を中和してもらうために呼びました。セイル君、それにメンバーの皆さん、任務ご苦労でした。」

リングをかじりながら、四人に説明した。

「この人は誰？」

フザの質問にセイルは口に出して良いのかわからず、自分の口からは話せないでいた。だが男はセイルの戸惑いを無視し、話し出した。

「失礼。僕は名も無き者。フリーダムタワーの看守及び？ETHICS？のフリーダムタワー本部の司令官、裁きを下す者です。」

三人はそれを聞くと、手で口を塞いで絶句してしまった。サラッと自己紹介をした裁きを下す者にセイルはどうしてよいかわからず、自分の頭をポリポリと掻いた。エンジはそこでゆっくり口を開いた。

「あの人は、どうやってヴェシールを止めるんですか？」

慣れない敬語を使って、エンジは裁きを下す者に尋ねた。

「良い質問ですね。えっと君は…まあいい。彼女は御三家と呼ばれる一人、ヴィナトス・ミネス。アロマを使って、人間の脳に直接触れて、コントロールします。そのアロマの中には薬のように効くものもあって、毒素のあるものを中和する能力があるものなどいろいろあります。ほら見てなさい。」

言われたとおりに見ていると、暴れていたヴェシールの動きが、だんだんと弱まっていく。いつしか動かなくなり、眠ってしまった。「彼女には一日かけて、彼の毒を抜いてもらいます。私は疲れましたので、部屋に戻ります。これ、捨てといてください。」

そう言って、裁きを下すものはリングをかじり終わると、セイルにカスを渡し、部屋に戻っていった。

「あれが裁きを下す者ですか？」

フザの裁きを下す者のイメージは長く白い髭を持っていて、老眼鏡をしていて、腰なんか曲がっちゃて、どこか偉そうなおじいさんのようなイメージがあった。そのイメージとは正反対の容姿に驚きを隠せずにいた。セイルは何のフォローもすることができなかった。四人はとりあえず、グレカルの元へ向かい、任務完了報告を済ますと、一日休暇をもらえることになった。四人は買ったものを全て下

ろし、荷物を各自の部屋に運び終えたと、それぞれ思い思いの行動を始めた。

ウィンディは買ったものと今まで持っていたものをもって、自分のスタイルのコーディネートを始めた。

フザは着替えを済ますと、図書館へ向かい、新しく入荷された大きな本を一冊手にして、読書を始めた。

エンジは他の班の仲間を誘って飯を食って、わいわい騒いでいた。セイルは自分の怪我の治療を済ますと、ヴィナトスに毒の中和をしてもらっているヴェシールをぼーっと眺めていた。それを見ながら、自分の力では仲間を救うことは出来ないという現実に苦しみ、今回の任務で闇市場で？ゼタ？を転売していることはわかって、その実物に触れることは出来なかった。セイルは煮え切らない気持ちでいっぱいだった。

「あ、いた！」

その声にセイルは振り向いた。そこには可愛らしくコーディネートを済ましたウィンディがいた。

「どうしたんだ？」

「ねえ、どうこの格好？可愛い？綺麗？」

「良いと思うよ。」

それだけ言うと、足元を見た。いつものセイルらしい返答にちょっと喜び、ちゃんとウィンディは隣に座った。

「飯でも食べに行くか？」

「いいよ。じゃあちよつと待ってて。」

そう言って、サーツと自分の部屋に戻った。セイルがベンチに座ってウィンディを待っていると、何人もの女の子を連れた私服姿のギルバードがやってきた。

「おやおや、セイルじゃないか？こんなところでどうしたんだ？」

「ウィンディを待ってるんだ。」

ギルバードはにやりと笑い、セイルの隣に座った。

「たまには別の女と、過ごしたらどうだ？これから一緒にどっか行

くか？」

「生憎だが、どこへ行く気もない。」

嫉妬心のないセイルに腹立てて、ギルバードは女の子を連れて、本部の外へと出て行った。その後ウィンディがやってきて、食堂にご飯を食べにいった。

「そういえば、全然ご飯食べてなかったね。」

ニコニコと満面の笑みのウィンディと一緒に歩いていると、グレカルが目の前に現れて、裁きを下す者が呼んでいると、二人を裁きを下す者のいる部屋に連れて行った。ウィンディは初めて入るこの部屋に緊張の色を隠せないでいた。

「ようこそ。デートの途中、悪かったね。お詫びといっちゃなんだけど、高級料理のフルコースをプレゼントさせてもらうよ。」

そう言って、何度か手を叩くと、シェフの格好をした人がたくさん中に入ってきて、長いテーブルと高級な料理を並べた。いつも食堂で食べているメニューとは全然違っていて、どれもこれもがおいしそうに見える。

「どうぞ、好きなものを食べて良いよ。」

セイルとウィンディは向き合って座り、目の前に並んだ料理を食べ始めた。裁きを下す者も座り、一緒になって自分の食事を始めた。「実はセイル君。頼みがある。明日行われるG9の会議に君をSPとして連れて行きたい。」

「G9とは？」

「G9とは世界連合が開く会議の通称さ。そこに集まるのは世界を代表する五カ国のトップ、そして今治療中をしてもらっているヴィナトスを含む御三家の三人。そして三人いる裁きを下す者から一人の合計九人と世界連合代表が集まり、秘密の場所です会議を行う。」
グラスに注がれた水をゴクつと飲み、口の中を空にした。

「そういうものは俺より上のクラスの間がいいのでは？例えばグレカル上官とかいいのでは？」

「上官は犯行声明の流れたテロ対策のためにいつでも動けるように

しておかなければいけないんだ。なんせ戦場で指揮するのは彼らだ。だから小隊を組む君らの中で優秀な者を選抜することにした。そこでまず、セイル君。それとギルバード君、キール君、マラブゼル君を。」

「後者二人の名は聞いたことがないが。」

セイルは目の前のステーキを綺麗に食べながら聞いた。

「本部はここ以外にもある。その本部はジャステイス・タワーとエクリティイー・タワーの近くにある。その本部でトップを独占するほどどちらも優秀で、君に劣らない力を持っている。」

裁きを下す者は目の前に並ぶ高級料理よりも、いつも食べている果物をパクパクと食べながら、話をした。劣らないという言葉聞き、セイルはある程度の食事を済ますと、フォークとナイフを机の上に置き、ハンカチで口周りを拭いた。

「そういうことなら、その任務を受け入れる。少し一人にさせてもらおう。」

セイルは食事の席から離れて、真っ白なこの部屋から出て行った。ウィンディもあとを追おうとしたが、高級料理とセイルの言葉にどうしても追いかけることが出来なかった。

「ねえ、今の話しさ。私も一緒に行ってよかったり？」

裁きを下す者は暖かいお茶をズブツと飲み、ウィンディの顔をよく凝視しながら、喋った。

「デートじゃないけど、迷惑にならぬ程度なら、例えばガールフレンドでも構わないよ。」

「もう、ガールフレンドだ何て…。」

ガールフレンドと言われて、ウィンディはポツと顔を赤らめた。

「だけど残念だ。ボクのSPは、女性はいけないことになっているね。」

そういつて後ろに立つ秘書に声をかけると、秘書はコクツと頷いた。

「えー。そんない。」

「ならギルバードがSPをするヴィナトスのSPとして付きなさい。だけど今のうちにゴマをすらないと、ヴィナトスは拒否するかもしれないよ。なんせ恋路に走る小娘に守られるぐらいなら、一人で行くというし、口が裂けてもOKなんていわないだろうからね。」

それを聞くと、ウインディは慌てて食事をやめて、ヴィナトスのいる場所へと走っていった。裁きを下す者は人を呼び、食事のテーブルを片付けさせて、ソファアーに横たわった。

そのままスーッと眠りに付いた。

第十六節：G9（後書き）

一ヶ月半ぶりの更新です。

色々考えながらかいているので、読みづらいところがあるかもしれないですが：

なんとか読んで下さい。

第十七節：ギルバード

ウィンディは走り続け、ヴェシールの治療に使う部屋に入った。ヴィナトスが甘い香のする黒い粉と違う甘い香がする紅い粉を混ぜあっていた。

「あ、あの。あ、明日。私も一緒にSPとしてご同行させてもらってもよろしいですか？」

「断る。あんたみたいな小娘。全く信用できない。」

一言お願いしますと言っただけで、採用してくれるとは思ってもない。ウィンディは諦めずに頼み続けた。

「あ、あの。お願いします。貴方の命は絶対お守りします。」

そう言っ、深々と頭を下げた。ヴィナトスは作業を中断し、怖い顔をして、ウィンディに近づいた。ウィンディの体の細さ、腕の細さを見て、横に首を振った。

「こんな細い腕で、人なんか守れるのかしらね。」

金色のセンスを広げ、顔の下半分をセンスで隠しながら言った。

「それじゃあ、どうすれば許してもらえますか？」

「?ETHICS?としての実力を見せてもらえればいいわ。付いてきなさい。」

そう言っ、大きなドレスのスカートを引きずりながら、中庭に入っ、いった。ウィンディも後ろから付いて入った。

「私が認めたその瞬間から合格。だけど認めなければ、いくら攻撃してきても、無駄だから。」

ウィンディはそれを聞き入れ、二本のナイフを取り出すと、気持ちを切り替えた。だが一向にヴィナトスはセンスを広げたまま、武器を取り出そうとはしない。

「早くしなさい。私はまだ治療をしなければいけないのだから。」

それを聞くと、一気に走り出し、早くも真っ向勝負に出た。ナイフで攻撃をしようとするが、金色のセンスで防御し、弾かれてしま

った。

「このセンスはただの扇子じゃないのよ。」

そういうと、自分に優雅に仰ぎ出した。ウィンディはバック転を繰り返し、距離をとると、再び走りだした。今度は二本同時に刃を思い切り振り落とした。ヴィナトスも金色のセンスで対抗するが、片腕では耐え切れないほどの衝撃を食らった。

「その一撃にどんな感情を込めてるのかしらね。」

強大な闘争心が乗ったのか、細い腕から出てくるとは思えないほどにとっても重かった。だが再び弾き返した。

「貴方に認められるまで、諦めない！」

「やろうと思えば、やれる娘なのね……」

ヴィナトスはセンスを振り回して、風を起こした。その風は人が心地よく涼しいと感じる風ではなく、触れれば傷つきそうな、刃のような風だった。ナイフで防ぐことも出来ず、ウィンディはとにかく逃げ回った。

「どうすれば……」

ウィンディはこの戦況に苦戦していた。でも諦めないという精神を糧に風の攻撃がない道を選び、そこを駆け抜けた。そしてナイフの刃が届く距離まで近づき、ヴィナトスのセンスの動きを止めた。ヴィナトスは戦いながらウィンディの真剣な眼差しを見た。そこには絶対に負けないといわんばかりの信念が宿っていた。それを見ると、フフツと笑みを零した。ウィンディのナイフの攻撃を弾いて、センスを閉じて、閉じたセンスの先でウィンディの額を小突いた。ウィンディが倒れるのを見ると、戦いの場から離れた。

「ちょ、ちょっと……！」

「合格よ。私は忙しいから。」

そう言い残すと、ヴェシールのいる部屋へと戻っていった。ウィンディは急なことであれだったが、合格といわれ、両手に握っていたナイフを宙に放り投げて、喜んだ。そのまま中庭の芝生に横たわり、青い空を眺めた。雲がまったりと流れている。

一方、セイルは部屋に戻り、電機もつけず、カーテンを閉じて、部屋を暗くした。すると壁に立てかけてあった刀と銃が獣の姿へと変化した。

「マスター、どうしました？」

セイルはソファーに座り、電源の着いていないテレビを眺めた。そんなセイルにアモンは話しかけた。

「ミシエルと戦ったとき、俺は自分の力不足を実感した。」

「そんな一人で、背負い込まなくても……」

アモンは宥めるが、全く聞く耳を持つとはしなかった。

「それにヴェシールをこの手で救うことはできなかった。」

「でも今治療中ですし……」

セイルはその言葉では心は一向に晴れなかった。アモンはこのままじゃダメだと思い、ウアラクに話しかけた。

「どうしてウアラクは、あいつの腕になっていたんだ？」

「俺が街を歩いていたら、その男に出くわして、無理やりさ。」

「だけど、七十二柱はそんなことでは、簡単に相手の思い通りにはならないだろ。」

「でもその男の恐怖や悲劇はそれを上回るものだった……そのまま取り込まれて、彼の理想の腕になった。」

二体の話をセイルに聞かすが、なんとも変わらない。セイルは途端にカーテンを開けた。アモンとウアラクは一瞬にして武器へと姿を変えた。

「良い話し相手になるかと思えば、面倒なだけだったな。」

セイルは軽装に着替えると、一つの鍵を手にして、部屋を出て行って、本部の駐車場に止まっているバイクに乗り込んだ。何一つ言わず、？ETHICS？本部を出て行った。スピードをガンガン出して、道路を駆け抜けた。その速度で本部に一番近い街ディテノ街へと入っていった。向かった場所は小さなバーだった。

カランカランと音が鳴る扉を開けて、カウンター席に座った。

「一番上手い酒を出せ。」

バーのマスターを脅すように言うと、マスターはせせこせこと棚からお酒を取り出した。グラスと酒が出ると、ゆっくりとだが注いで飲み、注いでは飲みを繰り返した。

「お客さん、どうしたの？ 昼間から、そんな良い飲みっぷりで…」
「構うな。」

一言だけ告げると、飲み続けた。するとカランカランと音が鳴って扉が開くと、柄の悪い連中が数十名入ってきた。その連中は広いテーブル席に座ると、店内は一気に五月蠅くなった。

「マスター、酒。」

一人の男が酒を注文した。そのとき、カウンターに座るセイルの姿を見て、フッと笑った。

「あれ、今日客いるんだ？」

酒の入った数本の瓶とたくさんのグラスを持っていた。連中は酒を飲みだすと、ワーワー騒ぎ出した。酔いだした男が、セイルに構ってきた。

「なあ、お前も一緒に飲もうぜ。」

「汚い手で触れるな。」

その言葉で一人はすぐカッとなって、セイルの胸倉を掴み上げた。
「あ？ じゃあてめえの手は汚くないってか？」

その一人は馬鹿に大声を出して、連中の騒ぎも少し静かになってしまった。

「その通りだ。よくわかったな。」

後ろで聞いていた大柄な男が、ポケットからナイフを取り出した。
「てめえ！」

ズカズカと店の床に穴を開けるぐらいの勢いで歩いてきて、その一人からセイルの胸倉を横取りして、壁に押し付けた。

「俺らを知らないみたいだな。ここらじゃ、有名なチームなんだよ。警察も手を焼かすいや焦がすぐらいのもんだ。わかるか？」

セイルは飲んでいた酒瓶を手にして、大柄の男の頭から酒をかけ

た。

「上手い酒だ。飲んで頭でも冷やせ。」

そういうと、大柄な男の頭を思い切り蹴り飛ばした。大柄な男は一発で気絶してしまった。大柄な男がやられるのを見ると、ひるむ奴らもいたが、復讐にナイフや鉄パイプを持つ輩も出てきた。一人はナイフを構えて、セイルに攻撃を仕掛けた。セイルは簡単にその攻撃を見切り、腹に蹴りを食らわせた。男は口から血を吐き出し、その場で腹を抑えてもがき苦しんだ。その光景を見ると、復讐心は静かに消えていった。

それがわかると、セイルはカウンターに酒瓶とお金を置き、店から出て行った。店の外には柄の悪い連中が山のようにいた。さっきの連中の仲間のように見える。

「そいつを殺せ！！！」

店内から響き渡る声。それを聞くと、座っていた柄の悪い連中は立ち上がり、バットやナイフを手にして、一斉にセイルに襲い掛かった。セイルは襲い掛かる一人からバットを奪い取ると、全員を殴り倒していった。後ろを振り返ると、連中は数箇所も骨を折り、痛い痛い泣く奴も出てきた。それに見兼ねてしまい、セイルはバイクに乗って、どこか別の場所へ向かった。店内に残っていた女は、誰かに電話をかけていた。

「あいつ、仲間を全員やつつけて、バイクでどこか行きやがった。」

「バイクのナンバーは？」

「ナンバーはね、E-37だよ。」

「Eのナンバーね：見たことも聞いたこともねえな。まあぶつ殺してやるか。」

電話は切られたが、その男に連絡を行き届けると、女は傷を負った仲間の下へと駆け寄った。セイルはバイクで移動していると、ミラーに黒いバイクが後を追いかけてくるを確認した。セイルは止まれる場所に止まり、その黒いバイクが来るのを待った。黒いバイクはセイルのいる場所で止まった。ヘルメットを取り、見えた顔はギ

ルバードだった。

「何でお前がここにいるんだ？それに酒臭いぞ。」

「気分転換だ。連れはどうした？」

「それがなんかさ……どっかのアイドルグループのライブに引きつられちゃって……」

「フラれたのか？」

「五月蠅いな。」

セイルとギルバードはその場で話し合っていると、一台のヘリコプターが迫ってきた。やけに低く飛ぶなと見ていると、中にいる人が、ライフルを構えた。

「お前だな。仲間をボコボコにしてくれたのは……」

スピーカーを通して、ヘリコプターに乗っているやつらの声が聞こえる。

「そんなことしたのか？」

「ちょっと気に触ったやつらだけな。」

するとヘリコプターに乗っていた一人が、ロープを伝って下りてきた。首に蛇を巻いている。

「仲間が世話になったそうで。」

見覚えのある顔が目の前にいる。セイルは脳裏にその男の手配書が浮かんだ。

「ランス・ルミナーガだな。」

「その通り。」

セイルの一言にギルバードも閃いたかのように思い出した。

「ランス・ルミナーガって、あの大蛇で有名な奴か？」

「本当にご存知で。」

ヘリコプターから落とされた槍を手にとると、ランスはいつでも攻撃できる態勢を取った。ヘリコプターは槍を落とすと、上空へと離れた。ついギルバードも大鎌を取り出した。

「お前、武器は？」

「そんなもの持ってくるか。」

セイルのそんな発言にギルバードは怒りを覚えたが、今はそれどころではなかった。だけど、これは良い機会だと、不意に笑みを零した。

「お前に見せてやるよ。最近の俺の実力をよ。」

鎌を大きく振り回し、ランスに勝負をする体勢を示した。

「良い度胸だ。」

ランスは槍を振り回し、広範囲に寄る攻撃を仕掛けた。だがギルバードの持つ大釜もリーチは長く、リーチでは互角だった。するとランスは戦法を変えて、槍の刃先で乱れ突きを繰り返した。それを防ごうと、弾き返した。槍の刃先が壁にぶつかり、その壁はシューと溶け出した。

「な、なんだ？」

「槍の先には大蛇の毒が含まれている。気をつけろよ。」

セイルの助言を聞いて、ギルバードは調子を取り戻すため、深く息を吸った。

「本当に知ってるねボクの事。何かのマニアだったり？」

「そんなつもりは毛頭ない。」

ランスはそんな返答を聞いて、腹が立ち、再び乱れ月を繰り返した。だが腹を立ててしまったことで、命中率が下がり、ギルバードを狙うがそれ以外のところばかりが溶けてしまっている。ギルバードは隙を付いて、大鎌で槍の刃先を斬りおとした。大釜の柄でランスの顎を殴り、尻餅をつかせて倒した。

「これぐらいの口車で、リズムを崩すのは弱い証拠だぞ。」

セイルの言葉にランスは舌打ちを繰り返した。

「戦わないなら、てめえは少し黙ってろ。」

冷静すぎるセイルにギルバードも頭にきていた。セイルに向かって大鎌を軽く振り回した。

「仲間割れは良くないですよ。ボクの真骨頂を見せてあげますよ。」
そういうと、白いタブレットのようなものを首に巻いていた蛇に食べさせた。食べさせると、優しく地面に下した。すると小さな蛇

だったのが、どんどん大きくなり、バイクよりもそこいらの車よりも大きくなり、いつしか大型トラックのような大きさになっていた。ランスはその蛇の頭の上に乗っていた。上空のヘリコプターからさらに二本の槍が落とされ、それを一本ずつ両手に握った。

「コレが大蛇だ。さあ、同胞を殴ってくれたお返しと、ボクにケガをさせた仕返しだよ。」

大蛇は牙をむき出しにして、細い舌を出したり、しまったりして、シャーシャー鳴いている。ギルバードは大蛇の見えていない死角から、大鎌で切り裂こうとするのだが、蛇の鱗が硬く、刺さりもしなかった。蛇はゴーツと動き出し、アスファルトにヒビを入れながら、二人を追い詰めていく。止めておいたバイクは踏み潰されてしまい、逃げる選択肢もなくなってしまった。後ろには高い壁があり、もう後ろへも下がれなくなってしまった。

「さて、言い残すことはないか？」

ランスは自らが持つ槍を向けるのをやめて、見下ろしてきいた。

「ギルバードがここまで弱かったとはな。」

セイルがさっと呟いた一言で、ギルバードの頭の血管が浮き上がった。

「なんだと？」

「俺だったら、こんな蛇、ズタズタにできるけどな。」

「てめえ、俺を馬鹿にすんのもいい加減にしろよ!!」

ギルバードは怒りに狂い、大鎌を思い切り振り上げた。

「無駄だよ。先ほども試したろうに。」

大蛇の頭の上で高笑いしていると、グサツという音と大きな振動がランスにきた。見てみると、大蛇の腹部に鎌が突き刺さっている。「まさか、刺さるはずがない。鋼鉄の鱗だぞ。」

ランスはあんぐりと開いた口がふさがらないでいた。

「火事場の馬鹿力とかいうだろ。それに俺の言葉が爆発的に効果を発揮したんだよ。」

「お、大蛇！攻撃だ！！攻撃をしろ！！」

慌てて槍を構えて、攻撃をさせようとするが、ギルバードの猛襲に大蛇は傷だらけになり、最後に顎の下から大鎌の刃を突き刺した。大蛇の頭からはブシューッと大量の血が吹き出てきて、その出血から逃れるため、大蛇の頭から飛び下りた。飛び降りると、大蛇はどんどん小さくなり、元の姿に戻ると、フラフラと倒れてしまった。

「大蛇：」

ランスは両手に握っていた槍を落としてしまい、死んでしまった大蛇を抱え上げ、涙を零した。

「お、お前ら！警察に訴えてやるからな！！」

その言葉を最後に逃げようとしたが、セイルに襟を掴まれてしまった。

「悪いが、俺たちは警察には捕まらない。」

「国外逃亡か。」

「違う。俺たちは？ETHICS？だ。知らなかったかい？」

？ETHICS？と聞いたとき、ランスは耳を疑った。そして今までとは正反対の態度をとった。警察や軍隊のように制服を着ていないので、全くそうとは思ってもいなかったようだ。

「そんな組織のやつらがそんな格好で任務でもしてるのか……」

「場合によって格好は変えるが、今回はフリーなだけだ。」

「テレビでそんなこと言わないし……」

「メディアには開設をしたといったぐらいで、それ以降あまりメディアには出させないようにしている。」

セイルが襟を放しても、ランスはビクビクとしたまま、その場を動かなかった。

「ボク、捕まっちゃうんですか？」

「？ETHICS？はそんなことはしない。」

その言葉を聞いて少し、フーツと深く息をした。

「だが鹵獲することは出来るんだ。」

今深くはいた息を戻すかのように思い切り吸って、息を止めた。興奮していて、息が途絶え途絶えのギルバードが大鎌の刃をランス

の首筋に当てた。

「このまま殺しても良いんだがな。」

ランスは生唾をゴクリと飲み込んだ。心臓はバクバクなり続け、このバクバクで死んでしまうかのような気がしてならない。

「今回だけは見逃してやる。今度会うときはもう少し利口になってからだ。」

セイルはギルバードの大鎌をどかすと、ランスを逃がした。バイクも壊れてしまい、移動手段がないので、二人は近くでタクシーに乗って、?ETHICS?本部の近くまで行くことにした。本部の近くは立ち入り禁止の策で周辺を囲まれている。近くになると、お金を支払い、タクシーを降りた。

第十七節：ギルバード（後書き）

夏休み enjoyしながらもこんな感じで書いてます！

もう少し定期を決めて、更新していきたいですけど…

自分がルーズなのでなかなかそうはうまくできないんです。

読んでくれる人に感謝して、書き続けてます！

第十八節…ヴェシールの過去／出発

タクシーの中で会話をしないでいたが、ギルバートは非常に気になったことがあった。

「なんであいつを逃がした？」

二人で本部へ歩いて向かう途中、ギルバードがランスの事を話しかけてきた。

「お前はそんなに人を殺したいのか？」

「一任務でジャマが入れば、そいつらを殺すだけだ。まあ一任務で最低でも三人は殺してるかな。そうは言っても下っ端ばっかだよ。お前はどんなんよ？」

セイルはこれまで遂行してきた任務を一から思い出していた。そう思い出してみれば、セイル自身が殺人を行うということは一度もない。だが任務中に自害を起こしてしまったことが一度だけ、それとサイボーグを破壊したことも思い出した。

「俺は誰も殺していない。」

「お前は？ETHICS？の権利を無駄にしてるな。？ETHICS？は任務中、特にターゲットが目の前にいる時にジャマとなる存在が生まれた場合、殺人を犯しても、罪にはならないんだぞ。」

ギルバードはそう言って、ポケットからガムを取り出して、くちやくちやと噛みだした。上げようとするが、セイルはそれを断った。「例えそうだとしても、無益な殺生は意味がない。」

そうこう話していると、空には月が見えて、もう真っ暗になっていた。トコトコと歩いていると、二人は本部に到着した。部屋はセキュリティのためのオートロックが掛かっているため、部屋に入ることとは出来ない。二人は仕方なく、どこか休める場所がないか探している、一つだけ明かりのついた部屋を見つけた。その部屋の中に入ってみると、鎖で手首を繋がれ、背を向けているヴェシールがいた。あの化け物のような姿からは解かれていて、元の姿に戻って

いた。意識も落ち着いているようだった。ギルバードはその室内にあるベンチに横たわり、ここで眠ることにした。セイルは恐る恐るヴェシールに声をかけた。

「ヴェシール、大丈夫か？」

声をかけられると、ギョロツとした目つきで睨んできた。目の下には大きなくまがあった。

「セイルか……」

返事にはいつもの元気がない。

「どうだ？大丈夫そうか？」

鎖をジャラジャラと地面に引きつりながら、大丈夫だと手を上げた。まともに話が出来ないでいると、コーヒーを片手にヴィナトスが部屋に入ってきた。ヴィナトスに事情を話し、この部屋にいさせてくれることにしてもらった。

「ヴェシールは回復したんですか？」

「見た目は随分良くなったわ。だけど、まだ体内に薬が残留しててね。それが体内に完全に取り込まれてるの。」

「じゃあ、ヴェシールはまた暴走してしまうんですか？」

「ええ。だけど、残留している量が少ないから、彼の意志が勝てれば、それを自らの特殊な能力として利用することができるわ。」

「どういことですか？」

聞かれると、椅子に座って、ゆっくり話し出した。

「この前貴方達が戦ったヴェシール君。彼の意味が強くて自ら発動することが出来るほどコントロールすることが出来るなら、彼は自在にあのときのような姿になって、戦うことが出来る。だけど、もし失敗したら、また暴走するだけ。」

話を聞き終えると、セイルはヴェシールの背中を見た。あの姿では自分の意思など到底強くない。話をしようと、ヴェシールに近づいた。隣にドンと座り、話を始めた。

「お前はどうかんだ？お前の口から色々聞きたい。」

「俺は？ETIHCS？をやめる。」

その言葉を聞いたとき、一瞬にして耳を疑った。

「何を言ってるんだ？？ETHICS？はそんなことでやめられないぞ。」

「わかるんだ。俺はこのまま？ETHICS？を続けても、セイルやエンジたちに迷惑かけてばっかで、ろくに活躍も出来ない。将来、上官にもなれないだろうし。そんだったら、いつそのことやめて、街で仕事でもしようかなとか思ってたさ。」

セイルは立ち上がり、腹部を思い切り殴り、胸倉を掴んだ。

「どうした？お前はそこまで腐ったか？」

「このままじゃ、俺は足手まといなんだよ！！解るだろ！！」

ヴェシールは鎖に繋がれていない足を使って、セイルを思い切り蹴り飛ばした。セイルは立ち上がり、ヴェシールの体を指差した。

「じゃあよ、その強靱な筋肉は何のためにつけたんだ？」

八年前、そのときはまだ筋肉という筋肉が付いてなく、ひよろひよろの少年だった。都会の学校でヴェシールは毎日のように虐められ、泣かされていた。

ある日の放課後

「お前みたいな雑魚じゃ、何にも守れねえよ。」

けなされ続け、殴られ蹴られてきていた。そこに一人の黒いスーツを着たおじさんが通った。虐めはやめろと大声で叫んで、虐めてきた数名の少年を追い払った。

「ありがとう。」

衣服に付いた砂埃を払い、立ち上がり、殴られた箇所を押さえながら、トボトボと家に帰ろうとしていたところを黒いスーツを着たおじさんが止めた。

「どこへ行くんだい？」

「お家だよ。」

ヴェシールはそう言って、おじさんに背を向けたと思うと、おじ

さんはすでに目の前にいた。

「瞬間移動？ エスパーなの？」

「さあ、どうだろうね。君、？ETHICS？に入らないかい？」
軽くポーズを決めて、指さして言った。

「？ETHICS？って？」

純粹な言葉の意見に、おじさんはガクツと腰を抜かしてしまった。
「それじゃあ、ちょっと見にいかがか？」

おじさんはヘルメットを渡し、二人はバイクに乗って、都会のはずれの方に向かった。そこは立ち入り禁止の策で囲まれていた。二人はその中に入ると、その中では武術や戦闘の訓練をしている少年がたくさんいた。

「ここは何なの？」

「これが？ETHICS？警察や軍隊では対応できない場合に動く組織だよ。ここは訓練生しかいないから、任務に動く人はいないけどね。」

ヴェシールは目をキラキラと輝かせながら、訓練施設の中をおじさんと歩いた。その中の一室で、一人で占拠して使っている少年を見つけた。

「セイル、またお前一人で訓練か？」

セイルはおじさんの言葉に返事をすることもなく、訓練を続けた。
「ちよつと一緒に訓練をして見なさい。」

ヴェシールの背中をポンツと押し、部屋の中に入れられた。セイルは部屋に入られるのを見ると、訓練を中断した。セイルとヴェシールはこのとき初めて出会った。

「こんな弱そうな奴、入れたところで使えるの？」

グサグサとヴェシールの心を突き刺すような一言。

「それは訓練卒業試験に落ちたら、雑魚とでも呼べば良い。けど、今のこの子の能力はお前と一緒に未知数なんだ。何れはお前よりも強くなるかもしれない。文句を言わず、一緒に訓練をするぞ。」

その日、夜になるまでヴェシールはセイルと一緒に休むことなく、

訓練を続けた。終えたその夜、おじさんはヴェシールと一緒にヴェシールの家に向かった。彼と一緒に家の中に入ると、両親に一枚の名刺を渡した。名刺には？ETHICS？とは書いておらず、政府特連合と書いてあった。

「彼を立派な青年にしたいため、彼を入れてあげてください。」

両親とおじさんは暫く話し合い、おじさんからの話を聞き入れ、ヴェシールを頼むことにした。寮生活になるということで大きなカバンに色々と荷物をつめると、二人は流れるように再び出て行った。再び先ほどの施設に戻ると、寮の部屋へ向かった。そこにはまたセイルがいた。二段ベッドの下で雑誌を呼んでいた。

「今日から彼も相室だ。一緒に訓練する仲間なんだし、仲良くしてやってくれ。」

ヴェシールを部屋の中に入れ、荷物をロッカーに適当にしまうと、おじさんは出て行った。初めての空間に棒立ちするヴェシールにセイルは聞いた。

「お前は どうして？ETHICS？に入ったの？」

「お、俺は…」

今日流れるように入れられたけど、何のために入ってか、必死で考えた。

「俺はでかくなって、この腕に強靱な筋肉をつけて、皆を護りたいから。」

それを聞くと、横たわって雑誌を読み出した。それを意気込みとして、これから始まる厳しい訓練を乗り越えてきた。

セイルから言われた一言で、走馬灯のように昔の事を思い出した。蘇ってくる記憶に頭を抱え出した。

「わかったろ。もう二度とやめるって言うなよ。」

セイルはそれだけ言うと、壁を背に座った。

「若いキミたちはそろそろ眠りなさい。」

そういうとヴィナトスは眠気を誘う甘い香がする煙を立てると、セイルとヴェシールは子供のように眠りに付いた。その空間が静かになると、ススーツとコーヒーを飲むと、特別に用意された個室から毛布を数枚持ってきて、三人にかぶせると、その個室で眠りに付いた。

次の日の早朝、セイルたちは任務のために起こされ、いつも朝は沢山の人がいて、ざわざわする食堂での朝食も怖いぐらい静かに食事をした。そこにいたのはセイル、ギルバード、エンジ、ウィンデイの四人が、私服でテーブルで集まって食事をした。食事を終えて、ETHICS?の正装に着替えると、本部の入り口に出た。そこには二台のリムジンが止まっていて、本部中にいる二十人以上の上官が敬礼をして、一列に並んでいた。二台の車の間にはグレゴルがいた。

「ではSPの方ががんばるんじゃないぞ。」

四人にそういうと、ギルバードとウィンデイを前の車へ、セイルとエンジを後ろの車へと案内した。二人が乗り込むと、車はETHICS?本部から出発した。その後暫く時間がたち、フザが目覚めて、食堂に朝ごはんを食べに行こうとすると、部屋の扉に一枚の手紙が貼り付けてあった。

『俺がいない間、ヴェシールがETHICS?をやめないように見張っていてくれ』

文字や文体からしてセイルだなっと思うと、フザは朝から一気に顔が赤く染まり、お願いを聞かされたためにヴェシールの元へ向かった。

第十八節：ヴェシールの過去／出発（後書き）

この一ヶ月、one piece が連載なくて辛かったです。
one piece も再連載することですので、僕もアップすることに決めました。

今回タイトルは、二つあります。

ダブルA面みたいな感じで見てください。

第十九節…集合

セイルたちは、車に乗ってもうすでに二時間が経とうとしていた。車がリムジンだということもあって、疲れがたまることはなかった。だが窓の外に映る風景は都会の風景、森の風景、海の風景と幾度となく、姿を変えていく。ついには砂漠が現れ、その中へとリムジンは入っていった。

「砂漠だぞ。大丈夫なのか？」

エンジが窓の外を眺めて、口からボソツと言った。

「大丈夫だよ。この車は特殊に改造されてるんだ。」

裁きを下す者がエンジの言葉に返事をする、急にタイヤが車から離れるように伸びて、さらにタイヤとホイールが徐々に大きくなっていく。さらに4WDの構造へと変わり、サラサラの砂の上でもスムーズに動くようになった。

「す、凄い。」

エンジは大きくなったタイヤを見て、呆然としてしまった。裁きを下す者はカットされたパイナップルを一つずつパクツパクツと食べていた。隣ではセイルがスースーと静かに眠っている。リムジンは砂漠を進み続け、辺りは地平線となって建物は何も見えなくなってきた。暫く走っていると、前方に水が綺麗に碧いオアシスを見つけた。と思うと、そこにはさらに立派な建物があり、リムジンはその建物を目指して走っていく。建物の中に入ると、リムジンは建物の中に入り、すでに二台止まっているリムジンの横に止まった。エンジはセイルを起こし、三人が車から降りると、まず裁きを下す者を個人室へと連れて行き、エンジとギルバードがそれぞれの見張りとして、扉の前に残った。セイルとウィンディは建物の入り口で見張りをしながら、砂漠を眺めていた。

「ねー凄い綺麗なところだね。ここ。」

ウィンディが入り口付近で、サラサラとしている砂漠の砂を使っ

て遊び出した。

「よくこんなところに立派なもんを立てるよな。」

しかも極秘の会議を行う場所だというのに堂々と立っている。もし戦車やヘリコプターで狙われてしまったら、それで最後かもしれないというのに。すると建物の外からセイルたちが乗ってきたのと同じようなりムジンがやってきた。二人は入り口を空けて、中へ通すと、車の中から、杖をつく老人が出てきた。その後から、派手なサングラスを掛けて、ファーの着いた？ETHICS？のコートを着て、左側の髪の毛を剃ってある男と同一ようなサングラスをかけて、指には宝石の付いた指輪を幾つもして、パッツンの髪型の女が出てきた。

「爺さん。さっさと部屋に入ってくんねえかな。」

「ほいほい。」

老人は裁きを下す者たちに与えられたような部屋に入り、アサフアがその扉の前に立った。派手な男はタバコを吸出し、その様子を見ているセイルたちを睨んだ。目を合わせまいと、ウィンディは目をそらしたが、セイルはタバコの火が付いている部分を刀で斬りおとした。その後綺麗な剣舞で鞘の中に刀を戻した。

「俺はタバコが嫌いだ。吸うなら他へ行け。」

派手な男はサングラスをずらし、裸眼でセイルの顔を見た。

「へえ。てめえがセイル・K・ラディアだな。」

「だったらどうする？」

派手な男は立ち上がり、セイルの顔を睨みつけながら、自分の渴いた唇を舌で舐め回した。

「マラブゼル！喧嘩はやめな。裏行って、タバコ吸ってりゃいいだろ。」

喧嘩の様子に気がついたもう一人の連れが、仲裁に入った。

「うるさいことにならなくて良かったな。」

そう言って、ブーツをカタカタならしながら歩き、建物の裏へと回った。マラブゼルが離れると、ウィンディがすぐセイルの傍に駆

け寄った。

「大丈夫？怪我はない？」

「気にするな。？ETHICS？っていう組織にもああいう輩がいるんだな。お前も気をつけておけよ。」

そう話すと、二人は入り口の壁を背にして地面に座った。その後、もう一台のリムジンが到着し、四人の男女が出てきた。そのうち三人は似たような格好をしていて、両手首に大きなブレスレットを、両足首には同じ形のアンクレットをしていて、鞆を腰に携えていて、数が一本の者もいれば二本の者もいる。中心を歩くものは四本の鞆を携えている。実戦で四本を本当に使うのか不思議でいっぱいだった。その中の一人はどこかで見たことのある顔をしていた。一番後ろにいる四人目の男は袖のない？ETHICS？のコートを着ていて、左腕には刺青で大きな龍が描かれている紅い短髪の男だった。男は入り口でセイルと並んで座るウィンディを見て、急に走って、ウィンディの前で止まった。

「ウィン。僕のこと覚えてるか？」

「えーっと……誰だっけ？」

男はその言葉で呆然として体が固まってしまった。

「僕だよ。キール・ブラハマー。君が小さいときに住んでた街で君の家の隣の家に住んでいるちよつと泣き虫の幼馴染の男の子。」

細かく説明されて、ウィンディはやつとの事でゲイルの事を思い出した。

「そういえば、そんな気がする。」

「そうだよ。そして僕らはそのとき、結婚の約束だったじゃないか？」

キールはそう言うと、ウィンディは即座にセイルと腕を組み、頭をセイルの肩に預けた。

「私は今、セイルが大好きなの！一番愛してるんだからね！！」

突然の失恋にキールはバラバラと崩れる気持ちになり、涙目でセイルを睨んだ。指を指して、何かを言いたかったのだろうが、何も

言えず、涙を拭いながら、その場を離れた。最後に登場した三人が個室に入ると、大きく綺麗な鐘の音が建物中いや砂漠中に鳴り響いた。響くと個室に入ったヴィナトスがまず部屋から出てきて、会議室の大きな扉の中に入った。その後先ほどの老人、それと最後にやってきた三人のうちの二人が中に入り、最後に裁きを下す者が個室から出て、中へと入っていった。するとガチャツと鍵をかける大きな音がした。

「会議が始まったのか？ だけど、G9って言うのに各国の代表なんて誰もこないじゃん。」

エンジが扉の前でばやくと、隣にいた沢山の宝石の指輪を付けた女がエンジに教えた。

「ここに集まるのは、御三家と裁きを下す者の代表それと、世界全連合の長だけ。各国の代表は、別の場所に集まって、ここもモニターを使って会議をするの。そんなことも知らないの？」

「なんでそんな面倒なことを？」

「G9っていうぐらい規模のでかい会議だと、メディアが迫ってくるの。それを避けるために伏せておかなければいけない人たちは別の場所で会議を行うの。メディアにはG5とでも言っているはずだわ。」

エンジが別の？ETHICS？本部から来た女の子にかわれていると、裏でタバコを吸っていたマラブゼルがフラフラとやってきた。「アサファ：そんな男より、セイルはどこだ？」

わからないとジェスチャーで伝えると、マラブゼルは刹那のごとく俊敏に動き、アサファの首を掴んだ。

「そんな対応を俺にするとはな。」

首を段々ときつく締め付けていく。その腕にゲイルが剣の刃を向けた。

「レディーにそんなことするな。」

「お前が、キール・ブラハマーか…」

アサファから手を離し、少し膝を曲げたと思うと、キールを思い

切り後ろ蹴りで飛ばした。蹴り飛ばしで、キールは建物の大きく太い柱にたたきつけられてしまった。キールがブハァッと血を吐くのを見ると、マラブゼルは額を押さえながら、ゲラゲラと笑っていた。「んでだ？セイルはどこだ？」

建物の入り口を見ると、セイルとウィンディが砂漠を見ながら、仲良く話している。

それを見ると、カッと頭に血が上り、ガシガシと威圧ある足音で、セイルに近づこうとすると、マラブゼルの前に少女が立ちはだかった。

「どけ！！」

マラブゼルの怒りに満ちた声にセイルは気づいた。その前にいる少女にも見覚えがある。

「私は御三家の一派？ル家？の者だぞ！ケンカは許さないぞ！！」

「これはこれはお嬢様……。けどな、ケンカじゃなくて、争いだ。」

ル家の少女を払い除け、セイルにどんどん近づいていく。するとル家の少女は不意に何かを投げた。それを投げ終えた途端、マラブゼルの足が何かに絡みつかれて動けなくなってしまった。足元には以前に見た紋章の付いたナイフがあった。

「やはり、あの時の娘か……」

ソシエル合衆国でウィンディがドラッグを飲んだ黒人たちに不意を突かれて殺されそうなときに、突然ながら、どこからか飛んできたナイフによって、救われてお礼を言う事が出来なかった。セイルはマラブゼルの横を通り、その少女に肩膝を屈して、お礼をした。手を差し伸べて、立ち上がらせると、その少女は絡みついたナイフを手元へと引き寄せ、自らの手の中へと戻ってこさせた。

「お前の名前は？」

「セイル・K・ラディアです。お見知りおきを……」

「私はミカエ・ルだ。御三家の一派？ル家？の一人なんだ。」

ナイフを懐へとしまうと、砂埃を払った。

「てめえ、俺を無視するとはな…ぶっ殺してやるよ。」

マラブゼルは握りこぶしをゴゴゴ…と震わせて、振り向いた。

「お前もセイル潰しに名乗りあげか…言っとくけど、ライバルは俺だからな。」

そう言って、ギルバードは大きな鎌を握ってセイルの前に立った。さらにその後ろでは銃を出したエンジンもそれに名乗りをあげて、前に出た。それに続くように蹴られたところを抑えるのをやめて、血をふき取ったキールも並んだ。それを見た途端、カツカツカとマラブゼルは笑い出した。

「全く、俺は人気者だな。じゃあ、一人一人潰してやるよ。」

セイルはミカエをお姫様のように抱え上げて、その場を飛ぶように逃げて、建物の屋根の下に逃げ込んだ。四人は見境がなくなり、銃弾を撃ったり、蹴ったり、斬ったりと容赦なく戦い、決着が見えそうにもなかった。

第十九節：集合（後書き）

十月も後半に入り、秋が深まっていますね。
こんなときは本を読むのが一番。

前置きはさておき、
読みづらい箇所、読んでいてわからないところがあったら
気安くコメントしてください。
修正しますので。

第二十節：ラナカルド戦争（前書き）

今回ラナカルド戦争というワードがあります。

けっこうキーワードで最後の方まで続いていますので、伝わりづらかったら、訂正しますので気軽に言ってください

第二十節…ラナカルド戦争

建物の室内では、外とは違って、砂漠の暑さが無くなるほどの冷たな静けさが漂っていた。五人が座っても、会議はまだ始まらず、まだ誰かを待っていた。ヴィナトスは爪のマニキュアの状態を確認したり、老人は熱いお茶をズズーっと啜っていたり、ル家の者はドッシリと腕を組んで構えていたり、裁きを下す者はこの辺りでしか取れない果物をパクパク食べている。外の扉とは違扉がキーツとゆっくりと開いた。そこには紅と蒼の二つの瞳の色を持つ背の高い男がいた。髪や格好は歌舞伎役者のようで、特に髪の毛はその全てが白く染められていた。その隣には眼鏡をして、男とは打って変わってキチツとした秘書だった。だけどその二人が入ってくると、好き勝手していた五人がピタッと各々の事をやめた。

「国際全連合長フリージア・E・ファシリティ様の到着です。」

秘書がフリージアと呼ぶと、男はゆっくりと前に進み、用意された椅子に腰掛けた。同時に用意されていた大きなモニターが光りだし、その画面には別の場所で行われている各国の代表が集まる会議の映像が流れた。一つの席が空席になっていた。

「まさかサボる代表がいるとはな……まあいい。ではこれよりG9会議を行う。」

モニターの映像も全員目の前に用意された資料を見始めた。見終えると、モニターの映像の代表が一人発言をした。

「今回G9会議が行われたのは他でもなく、あの悲劇と苦痛のラナカルド戦争を再び行うという犯行メッセージが着たことで行うことが決まった。送ってきた者の名、何処からなのかは現在のところ不明。」

資料を読み上げると、モニターで発言していた男は席に座った。その隣の女性が立ち上がって、話し出した。

「現在のところ怪しいと思われるのは二組。以前フリーダム・

タワー？ETHICS？本部の上官一名を襲い、自らを暗躍組織と呼ぶ組織。もう一つはラナカルド戦争において、最後まで正体不明の頭。有力なのはこの二つ。」

モニターに映るG5のみんなが口々にするラナカルド戦争。

ラナカルド戦争とは、三十年前にソロモン王国の首都ラナカルドおよびその周辺を戦場として、行われた戦争のことである。開始時、軍は空襲や大砲で攻撃をしていたのだが、都市ラナカルドの罪もない国民を人質にとられてしまい、罪もない国民を殺してまでも攻撃するのはいかなものかと会議で議題となり、空襲や大砲での攻撃はできなくなった。そこからは白兵戦となり、軍は都市の中央まで進むが、辺りをトラップ、地雷や狙撃班で囲まれて、皆やられてしまった。地の利が弱い分、苦戦していた。空襲以外での空からの攻撃を行おうとするのだが、狙い済まされたような雷が毎度直撃し、墜落されていく。この状況が続き、勝利は無縁に近いと思われたが、御三家と呼ばれる人とは少し違う特殊な戦術を使う家系の者が現れ、人質を殺めることも無く、敵を倒し続ける御三家のおかげで、戦争は形勢逆転に近いものを得た。

すると敵の戦力は急激に弱まり、ついには頭を捕獲、戦争は終わったと思われた。しかし後の調べで、頭だと思われた者は誰かに操られていたということがわかり、頭は未だに行方不明である。御三家はその戦争の報酬に巨万の富と地位を与えられた。その後、その未だ見ぬ頭の姿の鹵獲及び、警察や軍隊でも解決することの出来ない事件のため、国際全連合長のフリージア・E・ファシリティの権限で警察や軍隊とも異なり、活躍をメディアになるべく報道させない組織？ETHICS？を発足させた。

ラナカルド戦争を少しずつ思い出し、フリージアはあることを思いついた。

「もしかすると、頭はあの神の種族ラビリアでは？」

フリージアが突然口にした一言。モニターの各国代表はクスッと笑うものもいた。

「神の種族ラビリアは子孫繁栄がうまくいかず、二百年以上前に滅びたのでは？」

「確かにそう言われている。だがもしこの現代に一人でも生きていたとしたらどうする？」

「それはないだろう。神の種族の瞳の色は紫。今生きる人間にその色は無い。一目でわかるんだぞ。」

「本当にそうなのかね……」

フリージアはふーっと溜息をつきながら、再び資料に目を向けた。すると席に座っていたル家の一人が、埒が明かないと立ち上がった。「私は退席させてもらう。話はここにいるラファエが話を聞く。では……」

鍵を開けて、外へと通じる扉を開けた。外へ出ると、まだまだケンカを続けていた。

「お前ら！五月蠅いぞ！！」

その声にケンカが止まり、そこにいたみんなが振り向いた。出てきたその男にミカエがすぐ話しかけた。

「お兄ちゃん！どうしたの会議は？」

「ラファエに任せてきた。」

ミカエとの話を済ますと、ケンカをしているその場所に足を進めた。そこで四本ある剣の一本を鞘から抜き、四人に刃先を向けた。その剣には鍔が無かった。

「低レベルな実力争いなどする必要は無い。私がお前らまとめて、成敗する。」

すると右手首のブレスレットから剣の柄に何かをカチッと付けた。「いくら御三家と言えど、？ETHICS？でも実力の高いルーキーが相手だぞ。そのプライドがへし折れる前に前言撤回した方が良いぜ。」

「貴様らに負けることなど毛頭無い。」

さらにもう一本の剣を取り出し、それもまたもう片方のブレスレットから延びる何かをカチッと付けた。この言葉を聞き捨てずにはいられず、四人はケンカをやめて、指や足を伸ばして、ストレッチを始めた。

「我が名はウリエ・ル。倒される者の名ぐらい知っておけ。」

そう大声で自己紹介をし終えると、二本の剣を持って、固まるように動かなくなった。

手始めにエンジが銃弾を放った。ウリエは剣を振るだけで、いとも簡単に銃弾を切り捨てた。

第二十一節：VS ウリエ（前書き）

御三家の一角ウリエと？ETHICS？のルーキーたちが戦います。
御三家が各々に所有するタクティクス。

果たしてウリエの戦術とは一体どんなものか？

第二十一節：VS ウリエ

その銃声を開戦の合図として、ギルバードとマラブゼルが機敏に動いて攻撃を仕掛けた。だがその攻撃も簡単に防いだ。

「間合いが甘い。」

防いだ後ろから、キールが飛び掛って剣を振りかざした。逃げようとするのだが、攻撃はもう目の前まで来ている。

「もらった!!」

そう叫びながら、ウリエを斬り捨てたはずだったが、ウリエの姿はそこには無く、一番遠い場所にいるエンジの後ろにいた。

「何が起きた!？」

キールには何が起きたかわからないでいた。

「その答えを見せてやる。これが俺の戦術。ルアータクティクスだ。」

意気込んでそういうと、左手に持っていた剣を三人目掛けて投げた。

「けっ、投げナイフか…なら残りはその鞘に収まってるあと三本だ!!」

残りの三本を投げさせようと、マラブゼルは攻撃を仕掛けるが、なんと投げたはずの一本がウリエの手元に戻ってくる。

「獲物が引っ掛かった。」

投げた剣を手の中に納めると、二本の剣を使って、思い切り斬りおとした。マラブゼルは斬り捨てられ、その衝撃で地面がへこんでしまった。

「なんだっ…」

「一匹完了。」

一人やられてしまったのを見ると、三人は少し怯んでしまった。

「まだ終わってねえよ。」

痛みを堪えながらマラブゼルはゆっくりと起き上がってすぐウリエ

を蹴ろうとするのだが、高く飛ばれて、回避されてしまった。その高さから、ギルバードを狙って、剣を投げた。防ごうと大鎌を振り回していると、何かが大鎌に絡み付き、動きが鈍くなった。見難いがピアノ線のような細い紐がそこにあった。

「なんだこれは……」

「教えてやる。それはこの？リール？と呼ばれる特殊なブレスレットと繋がっているワイヤーだ。それは特殊でそこいらの刃物でも切れぬぞ。」

それを振りほどこうとしていると、リールを手繰って空からウリエが急激な速度で落下してきた。その勢いで、ウリエはギルバードの肩に思い切り踵落としを食らわせた。

「二匹目。」

ワイヤーがゆっくりと？リール？の中に戻ってくる。投げた剣がゆっくりとウリエの手元に戻ってきた。もうウリエは止まることを知らず、戻ってきた直後に再び投げてゲイルとエンジの頬のすぐ隣を通った。それをやられてしまった途端、二人は腰が抜けてしまった。

「残りは不戦敗か……」

剣が手元に戻ると、指先で華麗に回して、鞘の中に戻した。マラブゼルとギルバードは怒りに満ちた目をウリエに向けている。ウリエは辺りを見回していると、唯一戦場に出向かなかったセイルに気がついた。

「君はいいのか？ライバルが寄ってたかって攻めてきたが。」

「俺はここに争いに来たのではないからな。」

「プライドか？負けることを恐れるのか？」

「勘違いするな。お前が負けるから戦わないでやっているだけだ。」
その言葉にウリエが挑発をしていたはずなのに、セイルに挑発されウリエが先に剣に手を付けた。

「気に入った。一度手合わせをしてやる。」

ウリエはセイルを無理やり連れ出し、四人と戦った場所へ出た。

四人をどかすと、二人は剣を構えた。挑発を食らったせいかな、イラついているウリエから攻撃を仕掛けた。先ほどのように投げるのではなく、斬りかかってきた。素早く重い乱れ斬りにセイルはなんとか対応していった。

「基礎はなっているようだな。ならこれでどうだ？」

今度は距離をとって、剣を投げた。風や重力に負けることなく、セイルを狙って真っ直ぐ飛んでくる。真っ向から防ごうとするのだが、その一撃がとても重く、剣が折られるとも思えた。

「重いな…」

なんとか方向をそらすと、セイルも本気になって、ウリエに攻撃を仕掛けた。手元が一本の剣のうちに決着をつけようと思って、斬りかかるのだが、全ての攻撃が見事に防がれてしまった。

「まだ甘いな。」

「なんだと…」

するとセイルの握る刀に異変がおきだした。初めてこれに手を触れたときと同じ感覚がする。だが以前はあった痛みが全く感じられず、力だけが異常に増幅していくのがわかる。そのセイルの異変にウリエは気づいていた。

「その瞳……お前……なぜ…」

手元に戻ろうとする剣を思い切り弾き飛ばし、防いでいた剣をも弾き、無防備になった腹部を思い切り殴った。倒れはしなかったが、その衝撃でズザザザ…と砂埃を舞い上がらせて、後ろへ押されてしまった。ウリエが攻撃を食らったことに挑んだ四人は動揺を隠せずになっていた。

「少し甘く見すぎたようだ。」

ウリエは投げた一本を手元に戻し、足首のリールからワイヤーを引っ張り、鞘に収まっている残り二本の剣の柄の部分に取り付けた。その二本は持つことは無く、鞘から出して地面に落とした。それを見た途端、ミカエの背中にゾーツと鳥肌が立ち、寒気が走った。

「どうしたの？」

鳥肌を立てたことに気づいて、ウィンディが話しかけた。

「お兄ちゃんが…本気だ…」

ミカエはそれだけ言うと、自らの手で口を塞いで、ペタッと座ってしまった。

「覚悟は良いな。」

ウリエは準備を整え終わると、その場で回し蹴りをして、足を振り回した。足のリールと繋がる一本は勢いよくセイルを目掛けて飛んでいく。セイルはそれを容易く弾いたと思うと、空からウリエが左手に持つ剣を投げた。またそれを弾いたと思って、次の行動を映ろうとしたが、剣の刃先にワイヤーが絡み付いていて、思うように動けなかった。動きが鈍くなるのを見ると、もう片方の足の剣を手にし、それを投げつけ、右手に持つ剣も投げた。あとから投げた剣はセイルの体や足に絡みつき、さらに動きは鈍くなった。地面に降り立ったとき、最初に投げた剣が足元に戻ってきていた。

「実際なら首に巻きついたり、利き腕にまきついたりするのだから。一度攻撃が当たったぐらいで自慢などされても困るからな。これぞ決定打となり、俺の勝利だ。」

不利な状況において、セイルはクスクス笑い出した。

「これぐらいで勝ったとでも？」

予想外の言葉が飛び出て、ウリエは最後の剣の刃をセイルに向けた。

「敵と認知すれば、最後にこの剣を投げて、心臓を一刺しするところだぞ。負けを認めろ。」

セイルは刀を両手で握り、刀に絡み付いているワイヤーを押し切るろうとして、力を込めた。

「無理は止せ。これは特殊なワイヤーだ。力技では…」

ウリエは途中で会話をやめて、ワイヤーを慌てて回収した。しかし一歩遅く、刀に絡みついたワイヤーはブチっと大きな音をあげて見事に切れてしまった。

「一本減ったな。」

セイルは不気味に笑った。

「お前など、三本で十分だ。」

ウリエは剣を持っていない手を地面に付けて、その腕を軸にして、三本の剣を思い切り振り回した。それは周辺の砂漠の砂を集めて、砂嵐を巻き起こす竜巻になり、いつしか軸となったウリエは見えなくなった。何かを待つかのように刀を持つ右腕に全ての力を注ぎ、左腕で右腕をサポートした。見えないところからランダムに刃が飛んできて、少しずつ、セイルに傷を負わせていく。もう誰もがセイルに勝ち目はないと思えてきた。さらに砂のせいでちゃんと目を開くことすら出来ない。

「今からお前を屈してやる。」

そう呟くと腕の形は変えないまま、セイルはランダムに回ってくる刃に次々と飛び乗り、竜巻の上の風の弱いところへ出た。竜巻で起きている風の向きと逆になるよう溜めた力を一気に放つように雄叫びを上げながら剣を振った。二つの竜巻は相殺しあい、一瞬無の空間が開いた。セイルは背中に隠し持っていたウリエの剣を思い切り投げた。風も無く、重力に従って投げた剣は凄い勢いで落ちていく。しかもそれは狙っていたのか偶然なのか解らないが、残りの剣のワイヤーを全て断ち切っていた。地面に降り立ち、背中からナイフを取り出し、ウリエの腹部に当てた。

「相手が無謀に強かろうが、俺は目の前のやつを倒すことだけを考えて挑む。わかったか……」

刀とナイフを鞘に戻すと、柱を背にして座った。ウリエの膝は崩れ、バタツと倒れた。戦いが終わるのを見ると、ミカエはウリエに、ウインディはセイルに近寄った。

「まさかな……本当に負けるとは思ってもいなかった。」

ウリエは青い空を眺めて、ミカエにぼやいた

第二十二節：事件（前書き）

御三家ウリエとの戦いは終わり、ひと段落。
ですが、ゆつくりと世界は確実に動き出しています。

第二十二節…事件

ほぼ同時にだが、建物の中でG9の会議を終えて、中から御三家と裁きを下す者が出てきた。ル家以外の御三家は特別の個室へと戻っていった。ル家はウリエの腕を肩に回し、二人掛かりで部屋に運んだ。その後、裁きを下す者はセイルとウィンディを招いた。招かれた二人は会議が行われた部屋へと入っていった。そこでまた扉が閉められた。

「勝者のセイル君には、見せてあげようと思って。」

そう言って、部屋の奥に手を伸ばした。そこには歌舞伎役者のような長い髪を持つフリージアとその秘書がいた。

「私の名はフリージア・E・ファシリティ。ご存知かな？そなたが御三家に勝ったのか。」

フリージアは腰掛けていた椅子から立ち上がり、長い裾の服を引きずりながら、セイルに握手を求めた。セイルは受け答えて、フリージアの手に触れた瞬間、バチバチッと強い静電気が走った。思わず、手を遠ざけてしまった。

「静電気が…悪いの。だが勝利は光栄なものだぞ。その勝利を称えて、君とフィアンセの君に指輪をプレゼントしよう。」

フィアンセといわれて、ウィンディは表情を一気にデレッと赤くさせた。秘書に綺麗な箱を持ってこさせて、箱を開けると中にはとても豪華な指輪が、付いている宝石は見たことも無い宝石だった。

「それは？ドラゴンズ・アイ？と呼ばれる宝石だ。同じカタチで見つかるのは一組しか存在しない。だから竜の眼と名づけられた。それにその大きさのものは最近見つかったモノだから、希少価値はとても高い。大事にして欲しい。」

ウィンディはフリージアの言葉に上機嫌となっていて、指輪を何の疑いも無く手に取り、それをセイルに渡した。

「ねえ、指にはめてよ。」

そう言つて左手を開き、薬指をセイルに向けた。右腕は力を使い果たして、細かいことが上手くできないので、片腕だけでゆっくりとウインディの薬指に指輪をはめた。ウインディもセイルに同じことをして指輪をはめた。お揃いの指輪をはめて、疑似結婚式的なことができてウインディはさらに機嫌を良くした。

「では私はこれで失礼する。」

見届けたフリージアはそういうと、秘書が開けた別の扉から出て行った。裁きを下す者は再び扉を開けて、外にいる？ETHICS？全員をこの部屋に召集した。

「そうだ。一つ、実に残念な知らせがある。」

そういうながら、速達の電報で送られた一枚の新聞を机の上に広げた。そこにはあまりにも信じがたい事態が描かれていた。

そこには秘密主義であるはずの？ETHICS？のことが大まかに記載されていた。内容はこうである。

あるマフィアの違法ドラッグ売買を停止させ捕獲する任務を与えられた？ETHICS？の小隊が、何者かの手によって次々と惨殺されてしまっている。？ETHICS？という組織に所属していることがわかった理由として、殺されてしまった一人の手元に？ETHICS？の手帳を持っていてそれが確証となった。死亡者は四名。さらに死体とは関係の無い右腕が落ちていて、生存者がいるようですが、その姿は確認できず。死体の殺害方法としては刺殺の割合が高く、小隊にいた二人の女性の殺害方法は四億の懸賞金が掛かっているJTRの殺害と思われます。男性の殺害方法については、捜索中。メディアは？ETHICS？の施設を捜索しています。

裁きを下すものは新聞をとじた。チラッと見たその一面にはソシエル合衆国大統領暗殺されると大きく書かれていた。

裁きを下す者は新聞の事を伝え終わると、連絡したヘリコプターに一人乗り、そこから飛び立っていった。他の人らは読んだ感想を

言う間もなく、ここをすぐ去らなければいけなかった。御三家は一人ずつ、個室から出て高級車に乗り込んだ。まずは老人とアサファが車に乗り込んだ。

「セイル。てめえは俺がぶっ殺すからな。」

マラブゼルは吸ってたタバコを地面に叩きつけて、火元を磨り潰した。サングラスをかけて、苛々しながら、車に乗り込んだ。三人が乗り込むと、高級車は砂漠の中へと入っていった。続いてル家の三人とキールの番。

「君には教えられた。これから精進しよう。」

セイルにそういうと、三人は車の中へと入っていった。

「ウィン！！僕は君の事を諦めてないからね！！今度会いに行くからね！！」

そう情を込めて言うと、キールは涙を惜しみながら、車に入ってしまった。ウィンディは後ろを向いて耳を塞いでいたので、声はよく聞こえなかった。ブーンとすぐに出て行った。最後にセイルたちが車に乗ると、二台並んで建物から出て行った。エンジは後ろの窓からその建物を眺めていると、その建物はゆっくりと砂の中へと沈んでいった。

空はすっかり暗くなり、？ETHICS？本部へ戻り、ヴィナトスはセイルに何かの粉が詰まった小さな袋を渡すと、折り返すように自分の馬車に乗り、それで家へと戻っていった。本部内は、新聞で見た事件で話が持ちきりだった。セイルたちは任務の間置いてしまった二人の下へ向かった。ヴェシールがいた窓の無い部屋にもフザの部屋にもヴェシールの部屋にも二人はいなかった。二人を探していると、エンジは医務室で右腕がない男を見つけた。

「お前だったのか。あの新聞に載ってた…」

エンジの声を聞くと、男は椅子を回して、エンジの方を向いた。

「エンジ…な、仲間がよ…」

男は包帯で巻かれている右の肩を抑えて、ボロボロと涙を流した。その男はこの本部へ来る前、エンジと共に支部の訓練所で一緒に汗を流して訓練をしていたデルフィと呼ばれる男だ。

「相手はどんな奴だったんだ？」

「顔は覚えてる。だけど…思い出したくは無い。」

エンジはデルフィを無理やり引き連れて、本部にある懸賞金の張り紙が大量に張られている掲示板に向かった。

「この中にあるか？」

「ある…」

声は強張って震えていた。

「どいつなんだ？」

そう問い詰めると、デルフィは恐る恐る張り紙の掲示板を見た。そして犯人の写る張り紙を一瞬だけ見ると、ブルブル震えながら、指をさした。指した方向には、新聞にも書かれていた通り、J T Rがあつた。ただJ T Rは姿をろくに見たことのある人はいないため、想像で描かれたイラストとなっている。その姿はシルクハットに不気味に笑う仮面をしていて、体はマントで隠されているという姿。力を振り絞り、デルフィはもう一つ選んだ。それはエンジたちが過去に戦ったことのあるジュダールだった。その二枚の張り紙をはがして、エンジはじつくりと眺めた。

「この二人がタッグを組んでるのか…」

「ああ。それで俺の腕はこの男に斬られた。」

「お前はこれからどうするんだ？」

「わからない。だけど？ E T H I C S ? の任務を公にしたことで裁きを受けることになってる。多分俺は解雇されると思う。」

それを聞くと、どうやって言ってやれば良いのかその言葉が見つからなかった。その後デルフィは部屋に戻り、籠るようになった。エンジはセイルたちと合流して、食事を取ることにした。それとデルフィの事情も話した。

「そうなんだ。助けてあげたいけど、二人が今何処にいるかわから

ないし。」

ウィンディはハンバーガーを一口ずつ食べながら話を聞いている。「他人よりも自分らのことだ。ヴェシールとフザがないんだぞ。」

セイルはコーヒーを飲み、食堂の天井を見た。天井はガラス張りになっていて、そこから空が見えた。空は厚い雲が覆って、今にも雨が降りそうだった。その食事をしている場に代理上官のグレカルがやってきた。

「君たちには明日新たな任務が与えられる。疲れているだろ、もう眠りなさい。」

グレカルに無理やり食堂を追い出され、三人はそれぞれの部屋に戻った。セイルはベッドに横たわると、テレビを点けた。テレビのニュースでは新聞に載っていた事件を中心に番組が成り立っていた。？ETHICS？という組織の名前は伏せられ、やられた二人も警察として扱われた。凶悪犯としてJTRの名前が上がったり、マフィアの合法ドラッグが見つかったことが大騒ぎとなり、メディアもその話題で持ちきりだった。映像には国民の声も映っていた。

本当にそんなのがいたら？怖くて？街を歩けないよ。

常に？殺す？ことしか考えてないんでしょ。

もしここが戦場になってしまったら、逃げ道はないし、もう？死ぬ？しかないんじゃないか。

これ以上話を聞くのがいやになり、セイルはテレビの電源を切った。アモンとウアラクは動物の姿となり、ソファアーに寝転がった。ソファアーに横たわるアモンの首の皮を掴み持ち上げた。

「どうしたんすか？」

「あの異様な力。お前が何かやったのか？」

「すいません。けどこの力を秘めていることを知ってもらうにはあの相手しかいないかと思ひまして！！」

アモンはぺこぺこ頭を下げた。それを見ると、アモンをソファ

―の上に戻し、布団の中に潜った。

「秘めているだろ？」

「貴方は我々七十二柱を扱えるものなんです。七十二柱は貴方の力を解放することの出来る存在なのです。」

それを聞くと、眠りに付いた。アモンとウアラクはフーツと息をついて、少し意味深な話をして、そのまま二人も眠った。

第二十二節：事件（後書き）

ほんとうは12月1日に更新しようと思っていたのですが、すっかり忘れてました。

先月は今まで以上の人が読んでくれて、とても光栄でした。

一度でも読んでいた方々にはこれからも読み続けて欲しいと願っています。

第二十三節：紫色の瞳

次の日の朝、外は雨が降っていた。少し肌寒かった。セイルは身支度を済まし、刀と銃を持つと、部屋の外に出て、朝食を食べに食堂へ向かった。その途中にあるいつものたくさんの依頼書が張られているはずの掲示板がなぜか隙間だらけだった。メディアのせいで、依頼してくる人もしづらくなって、減ってきたのだろう。すでにウィンディとエンジ、それに昨日見つからなかったヴェシールとフザがいた。

「ヴェシール。昨日はどこへ行ってた？」

「少し買いもんだ。フザにも付き合ってもらったし。」

それを聞くと、席に座り、朝食を食べ始めた。三十分ほどで朝食を済まし、五人はグレカルの元へ向かった。

「本日、君たちには潜入スパイをしてきて欲しい。」

「スパイ…どこにだ？」

「三人は昨日G9の会議にSPとして参加してもらった。今回は敵のそういった会議に出て欲しい。そこであらゆる情報を得て欲しいのだ。」

グレカルの後ろに大きな袋を抱えた二人の上官が出てきた。

「そんなところでスパイをしたら、一網打尽されるだけだぞ。」

「わかっておるよ。以前、君たちはラークという犯罪者を倒したよね。女の子のどちらかが、ラークに変装して潜入して欲しい。彼女は部下をチョコチョコ変えるから、多少メイクして、二人をサポート役とする。残りの二人は、外で待機という形で。」

グレカルの後ろに立つ二人はセイルたちに荷物を渡すと、どこかへ向かった。セイルたちも任務を受け入れ、車に乗り込んだ。

「で、どうするんだ？誰がスパイする？」

運転席に座るヴェシールの話にウィンディが手を挙げた。

「私がラークに変装する！！だって見たことあるのは私とセイルだ

け出し。」

セイルは頷き、その後二人を指差した。

「サポートにヴェシールとエンジをつける。」

それだけ言うと、セイルは毛布を取って、眠りに付いた。車に乗ると、絶対といって良いほど、セイルはすぐ眠ってしまう。

「それじゃあ、メイクするから。」

渡された袋からメイク道具を取り出し、その道具をフザに渡した。フザはラークの写真を見ながらメイクをした。雨の中車は発進した。エンジは後ろで地図とコンパスを見ながら、進む方向を指示した。雨はだんだんと強くなり視界が悪くなる中、車はフリーダムタワーの傍を通った。後部座席に座る三人は今まで近くで見たことが無かったタワーの大きさに唖然としていた。タワーを通り過ぎ、森の中へと入り、道なき道を何時間も走っていると、晴れていれば見晴らしの良い崖の上に出た。そこで車を止めて、双眼鏡で辺りを見回した。

「あ、あれだ！」

崖の下に広がる草原。別の崖に洞穴があった。その前には人相の悪い連中の沢山の車が止まっている。草原に下りれる坂を下って、坂を下りると車を再び止めた。ヴェシールがハンドルから手を離し、後部座席を覗いた。

「車は此処までだ。ウィンディ、準備はできたか？」

ウィンディはうんと頷いた。フザのメイクは上出来で、写真と見比べても顔は同じ人としてしか見れない。その後金髪の同じ長さの髪型の鬘をかぶせて、エンジとヴェシールにも程よいメイクを済ますと、ヴェシールは大きな黒い傘を差して、ウィンディが雨に当たらぬよう車から降ろした。三人はそのまま洞穴へと真っ直ぐ向かった。車の存在がバレぬようにフザがハンドルを握って運転をして、車を崖の上に広がる森の中へと隠した。

「あとは待つだけか。」

フーツとフザは溜息をついた。ヴェシールだけイアーシーバを取

り付け、いつでも通信が取れるようにはしてある。連絡が着たら、いつでも逃げれるように準備をすれば良いだけ。シートベルトを外して、助手席で眠るセイルの肩にそっと頭を乗せて、幸せとも呼べる興奮を抑えながら、その幸せに浸れていった。

三人は洞穴の前に到着すると、気合を入れて、洞穴の中へと入っていった。

「ちょっと待て。」

洞穴の前で木の椅子に座っていた男に止められた。背筋がビクツとなるのを抑えて、振り向いた。

「何だ？」

「お前、名前は？」

少し喉を鳴らして、出す声を整えた。

「あたしは：ラク・B・ユッドだ。」

男は手に持っている資料を確認すると、ペンで丸を書いて、三人を洞穴の中へと通した。長い坑道が続き、だだっ広いところへ出た。そこには髭面で上半身が裸の男や頭にバンダナを巻いた男、身軽な格好をしている女の人がたくさんいた。洞穴には海からの入り口があつて、そこから来た帆船も数隻止まっていた。

「なんかすごいところだね。」

「そうだな。だけど無碍に喋るな。」

「バレたら大変だもんね。」

ウィンディは口にチャックのジェスチャーを見せて、洞穴の中の人たちに混じっていった。洞窟の中は雰囲気の良い人間で溢れていた。備えられているバーで酒を飲んでいるもの、ビリヤードやダーツを楽しんでいるもの、全員何か来るのを待っていた。歩いていると嫌でも声が聞こえてくる。聞こえてくる会話はどれもくだらない。この前、どいつを殺したかの、やったかの、ほかは女と金の話ばかりだ。

「やっぱすごいな。あの船に乗ってるやつは懸賞金が確か付いてた

ぜ。」

そういつて、エンジはその船に乗る男を見ていた。その男は有名な海賊の船長で、懸賞金は四千万リクルもついている。

「お前、指を下せ。」

ヴェシールが言ったときにはすでに遅く、船長は船から降りて、ギロツとした目を大きくしながら、エンジに近づいていった。

「てめえみたいな輩が俺様に指差すとはどういうことだ!!」

サーベルとピストルを持って、エンジに迫ってきた。ケンカがおきそうになると、ウィンディが二人の間に立って、ケンカを仲裁した。船長はあらゆる暴言をはいて、吐ききると、地べたに唾を吐いて船へと戻っていった。

「気をつけなきゃ、ダメだよ。ここじゃ些細なことでも、暴動になるんだからね。」

力ない返事をして、しゅんと落ち込んでしまった。騒々しく動き回っていた輩は海の入り口からやってきた小船を見て、騒ぎをやめた。その小船に乗っているのは長い髪をオールバックにして、腰の辺りまで髪は伸びている。だが女性ではなく、一人の背の高い男だった。小船から降りて、指先で一枚のコインを回しながら、たくさんの悪党の前を通った。顔には龍の鼻先をモチーフにした仮面を被っていた。洞穴全体を見回せる小高いところに立つと、指先でまわしていたコインをガシツと手の平に納めた。

「よく集まった……」

その男の第一声を聞くと、集まった悪党は一斉に雄叫びを上げた。その雄叫びを抑えると、手に握ったコインを親指の上に起き、高く弾きあげた。

「新聞にも書いてあったよう、ジョーカーとジュダールが？ E T H I C S ? を殺した。このことをきっかけに世界は大きく変わろうとしている。この期に全てを変えるのだ。世界政府というものが今日まで大事に抱えてきた誇りや意地、威信を全て打ち砕く時だ。」

覇気のある言葉に生唾を飲み込み、雄叫びを少し遅れてあげた。

「そして邪魔となる警察、軍隊、？ETHICS？。特に？ETHICS？に関しては、殺した奴に賞金をやろう。上官をやった場合は、1000万リクル、小隊のリーダーは500万リクル。その他は100万リクルをやる。そしてセイル・K・ラディアを鹵獲した者は3000万リクルをやる。」

セイルに掛かった金額にオーとどよめきが走った。三人もその言葉に耳を疑った。

「そのセイルってやつはどうしてそんな破格を？」

その質問をした男は突然ズバツと首が切れた。何事かと騒いでいると、そこには大きな剣を持ったジュダールがいた。その斬られたザマを見て、ゲラゲラと笑いが起きた。

「強いからに決まってるだろう。馬鹿じゃねえか。だけどよ、鹵獲ってどういうことだ？」

着られた男の隣に立っていた男が仮面の男に尋ねた。

「色々と理由がある。近い情報だと、奴は御三家の一人ウリエ・ルを負かした男だ。」

たった今の男の発言をウインディは不審に思った。ウリエを倒したことは、G9のあの場にいた人しか知ることの無い情報。不審に思いながらも、この場は黙っていた。

「貴様らに？ゼタ？を100万リクルで売ってやる。？ETHICS？を殺せる奴は、買っておいたほうが得だぞ。」

それを見せられると、チームで集まり懐から集められるだけの金を集めて、それに到達したチームは？ゼタ？を購入していった。？ゼタ？を見せられても、目の色一つ変えないウインディたちを男は見た。男は回りの二人を見て、三人の全体を見ると、何かを見つけた。弾き上げたコインが手元に戻ってきて、それを後ろの海の中に放り投げた。

「金の無い奴らに朗報だ。そこにいるラク・B・ユッドいや？ETHICS？を討ち取った者に早速100万リクルか？ゼタ？をくれてやる。」

必死こいて金をかき集めていたもの、なんとかして？ゼタ？を購入したものは、其れを聞くと、各々武器を取り出し、一斉に襲い掛かった。

「ねえ、どうしてバレたの！」

「わかるかよ。」

「とにかく逃げるぜ！！」

ヴェシールは隠し持っていた煙幕を使って、三人は洞穴から逃げ出した。ジュダールは皆が洞穴から出て行く中、洞穴に残り、男に近づいていった。

「俺には金をくれないのか？ETHICS？を二人やったんだぜ。」

「我を誰だと思っている？」

小高いところをヒョイッと飛び降り、自分の小船へと戻っていた。ジュダールも一緒になって付いていくが、男は金を渡す気配は一切感じられない。それを見て、ジュダールは男に大剣の刃を向けた。

「ジョーカーと共に殺したんだぞ。俺にだって実力はあるんだ。今、此処で殺すぞ。」

「では何故、婦女連続殺人犯が今もなお、一度も捕まることなく、生き続けられると思う？」

仮面の男の意味深な発言に動揺したが、ジュダールはどんなことが起きても対応できるよう剣を構えた。

「それも実力だ！」

「違う。全ては我にあり。」

竜の仮面を外した。その顔を見て、ジュダールは自分の目を疑った。

「我は全世界の主格だ。」

「む、紫色の瞳……ま、まさかお前は……神の種族……」

ジュダールはその瞳を見て、腰が砕けそうになった。男はジュダールの剣を人差し指と親指で摘んだ。それに気づいて、離そうとす

るがビクともしない。空いている左手で男の頭を掴んだ。さらに後ろに女性が現れた。その女性の殺気を感じると、ジュダールは話しかけた。

「ジョーカー。助けてくれ！」

「偽りの言う事など聞けぬ。」

ジュダールは今の一言を聞いて、生唾をゴクリと飲み込んだ。右手に持つ鎌はギルバードのよりもいくらか大きな鎌を手にしていた。それをスーッと近づけて、ジュダールの首元に当てた。

「ではやれ。」

その一言を聞くと、何の迷いもなく、スパッとジュダールの首を斬った。首を斬られたジュダールの体はバタッと倒れた。

「ジョーカー・ザ・リッパーよ。暫くは身を潜めて置け。要があればすぐ呼ぶ。」

それを聞き入れると、忍者のように飛んでその場を去っていった。もう一人別の男を呼び、ジュダールの首と体を箱に詰めさせて、海に流した。

「ではすぐにここを去れ。」

紫色の瞳の男は再び龍の仮面を付けて、小船に乗り、洞穴を出て行った。

第二十三節：紫色の瞳（後書き）

クリスマス・イブに寂しくも更新です。

第二十四節：ETHICS VS 賊（前書き）

逃げ出したウィンディたちはどうなるのか？
外にいるはずのセイルたちは気づくのか？

今回はちょっと短めです。

第二十四節：ETHICS VS 賊

洞穴の外では、ウィンディたちがたくさん山の賊や海賊、盗賊らと悪戦苦闘していた。手元には刃の短いナイフしかなく、ほかの使い慣れた武器は全て車においてきてある。ヴェシールがイアーシーバで車で待機してるはずのセイルとフザにいくら連絡しても、通信は全く出来なかった。

「おらおら、どうした？ETHICS?!」

さすがは名のある連中と言った具合で、簡単には負けてくれない。さらに天候が雨と言う事もあり、少し視界が悪かった。

「フザ！応援を!!」

車の中で至福の時間を過ごしていたフザがイアーシーバの連絡にようやく気づき、眠っていたセイルを起こそうとしたのだが、セイルの寝顔に胸がキュンときてしまい、起こすことが出来なかった。だが援護をしなければと、ライフルを手にして、高い位置からスコップで相手を狙った。下に広がるのが木があまり生えていない草原と言う事もあり、相手は隠れも出来ないのです、次々と狙いを定めて、撃ち放った。敵が倒れていくのを見ると、ウィンディたちは再び逃げ出した。

「車は何処に止めてあるの!!」

「山の上だ！銃撃がそこから振ってきたんだし。」

三人が山道を登りはじめると、敵は全く襲ってこなくなった。また追ってくるかもしれないので、そのまま登り続けると、山の上に馬に乗った数名の山賊が現れた。

「てめえら!! 山賊を馬鹿にすんじゃねえぞ。地の利が違うんだ地の利が。」

その隣には自分達の車があった。車の中には眠っているセイルとそのセイルにしがみつくフザがいた。

「車を落としてやれ。」

体格の良い二人が、車を後ろから押して、坂道を下らせた。車はブレーキをすることなく、スピードを増して、どんどん下っていく。「ブレーキを踏め!!」

エンジの声が聞こえたのか、車内でフザは止めようと動き出した。だがフザは足元からゴソゴソと何かを取り出した。それは取り外されたブレーキのレバーだった。

「ブレーキはすでに壊してあんよ。」

馬に乗った山賊たちは、車の後に続いて山を降りた。止まることを知らない車は、坂道に従って、どんどん速度を上げていく。このままではどこかにぶつかって、車が壊れてしまうかもしれない。オイルが漏れて爆発してしまうかもしれない。そう考えたヴェシールは袖を捲り上げて、気合を入れた。

「少しどいてろ。止めてみせるぜ。」

「ちょっと!! そんなことしたら死んじゃうよ!」

ウィンディがヴェシールの腕を引っ張り、そこから退かそうとするのだが、それを振り払い、両手を広げて構えた。それを見たエンジはウィンディの腕を掴んだ。

「ウィンディ! 避けるぞ! あいつは車を止められる!」

そう言っただけでエンジはウィンディを車から遠ざけた。車がスピードをやってくる恐怖がどんどん迫ってきて、生唾をぐくりと飲み込んだ。ヴェシールの目に炎のような熱さが走ったとき、ヴェシールに変化が起きた。あの時、薬を注入されたときのように、体が大きくなっていく。だが以前よりは小さく、人間らしい姿をしている。その姿のヴェシールにとって、車は少し大きめなラジコンに見えるかもしれない。ヴェシールは降りてきた車とぶつかった。普通の大ききの人間ならひとたまりも無い衝撃をヴェシールは見事に抑えた。そのぶつかった衝撃でセイルは目覚めた。あわててフザとセイルが車から下りるのを見ると、ヴェシールは車を持ち上げ、馬に乗ってやってくる山賊に放り投げた。山賊たちは悲鳴を上げながら、その車に潰されてしまった。二人が助かったことにウィンディとエンジ

が集まろうとすると、セイルが止めた。

「離れてろ！」

フザはセイルの言葉に従い、ウィンディの近くに寄った。目の前の大きなヴェシールは頭を抱えて、苦しんでいる。

「まだ完全にコントロールはできないみたいだな。」

セイルは腰に巻いてあるベルトに括り付けているヴィナトスからもらった小さな袋を取り出した。ヴェシールの膝を使って顔に届くまで飛びあがる、顔に向かって、一掴みの粉を振りまいた。この粉には催眠効果があるらしくそれを吸うと、ヴェシールはばたつと倒れて眠ってしまった。

「よくこうなることがわかったもんだな。」

セイルがこの粉をくれたヴィナトスに感心していると坂の下には、金に目がくらんだ海賊や山賊たちがうじゃうじゃいた。

「あれがセイル・K・ラディアじゃねえか？」

「あいつを捕まえりゃいいんだよな。」

先ほどよりも、息を荒くしてセイルを狙った。

「行くぞ。フザはここでヴェシールを護りながら、狙撃を。俺とウィンディで斬りこむ。エンジは一緒に来て追撃を。」

セイルはそう作戦を告げると、刀と銃を取り出して突撃した。ウィンディとエンジも其れに続いた。

「先頭のあいつは一番の目玉だぜ！！」

「あいつを狩れ！！」

海賊や山賊も負けじと突撃した。

雨は静かに止み雨雲が晴れようとしている頃、戦いはセイルたちの快勝だった。多少の懸賞金を持つぐらいではウリエを負かしたセイルの相手にはならず、呆気なく負けてしまっていた。生き残った数名の賊は腰を抜かして、負けを認めて逃げていった。

戦いを終えた頃には、ヴェシールの姿は元に戻っていて、意識も取り戻していた。車は壊れてしまったので、五人は洞穴の出来事を

話しながら、とぼとぼ歩きながら、本部へ向かって歩いていった。
本部が見えた頃には空は再び暗くなるうとしていた。

本部へ着くと、なんだかいつもより騒々しかった。

セイルたちよりも年上の上官たちが、数枚の資料を持って、右往左往している。セイルたちはとりあえず、報告書を書き上げると、グレカルに提出した。提出すると、さっきまで右往左往していた上官たちが一斉にセイルたちを集った。

「君たち、この任務を頼む！」

「お願いだ！」

何が起こったのかわからず、全員キョトンとしていた。

第二十四節：ETHICS VS 賊（後書き）

新年明けましておめでとうございます。

2011年初更新です。

毎日一回でも読んでくださる方がいるのでがんばって更新します。
今年も応援お願いします。

第二十五節：豪華客船レストニック（前書き）

新展開です。

読みづらいところあったら、感想として書いて下さいね。

第二十五節：豪華客船レストニック

事情を聞くと、実に難易度の高いミッションらしい。自分達が行けば良いのにと、思いながらもセイルは資料を見た。その資料には、大きく豪華客船の写真が載っていた。次には文章があった。

「我々はテロ組織？ 烏？ だ。この豪華客船が、海の中央に出たら開始する。止めたければ、我々全員を殺してみろ。」

「これはまだ世界には出ていない犯行声明だ。軍隊からこれが回ってきた。さらにビデオメッセージが船に送られてきたというんだ。」

「何故軍隊が動かない？」

「軍隊だと見た目やら態度で、客が全然楽しめないというのだ。」

「出航を中止すれば？」

「もうすでに出航しているのだ。夜明けには、海の中央に出ようとしている。今すぐに止めに向かってくれ。」

冷静に対処しているセイルの横で我慢しきれなくなった疲れているエンジンが張り合って、

文句を飛ばした。

「ギルバードのどこは？ 他の小隊だっていいでしょ。」

「彼らはすでに別の任務でいない。それにほとんどの者がいないのだ。」

「あんたたちが出れば良いだろ。」

「私たちには別件があるのだ。」

「別件とは？」

「メディアにさらされてしまった我らの情報を隠滅することだ。」

「もう遅いんじゃない？」

「可能な限りを尽くす。早く行け！！」

エンジンの抵抗も空しく、五人は休む間もなく、中庭に用意されたヘリコプターに無理やり乗せられ、飛び立たれてしまった。ヘリコプターの中で一休みをしていると、巨大な豪華客船が見えてきた。

期ヘリコプターは客船の上に一時停止、縄梯子で五人を下した。下し終わると、ヘリコプターはすぐに去っていった。船の上に下りると、船員が五人に恐る恐る寄ってきた。

「テロ組織を撃退してくれる方々ですか？」

「そうだよ。ねえ、それよりさ、先に船室とか連れてってくれない？もう疲れちゃってさ。あと着替えとかあるとうれしいんだけど。」

ウィンディが船員にいつもの調子で話しかけた。余りにも柔らかすぎる言葉に船員は一瞬言葉を失ってしまった。だけど船員達は言われたとおりに五人に三部屋を用意した。五人は少しの間でシャワーや着替えを済ますと、豪華客船の一室を満喫していた。セイルとヴェシールは部屋から出て、船長に会いに操舵室へ向かった。操舵室の扉をノックし、中に入った。

「救いにきてくださって、有難うございます。」

船長は被っている帽子を取り、深々と頭を下げた。

「そんなことはいい。敵からのビデオメッセージは？」

船長は言われて思い出し、クルーにそのビデオを持ってこさせて、セイルたちに渡した。それを受け取り、一礼すると、他の三人を集めて一つの部屋でビデオを見ることにした。テープを入れて、再生させると、大きな？鳥？という文字を壁に貼り付けている映像が映し出された。

？これを見ているのは警察かな？軍隊かな？いや……きつと？ET H I C S？だろうな。？

映像に映らないところから声が聞こえてくる。

？それじゃこれから本題だ。今からゲームをしよう。その豪華客船？レストニック？にはすでに三名の部下を送ってある。その三人全員を夜明けに到着する海の中央までに倒すことができたならば、君達の勝ちだ。全員を殺すことが出来なければ、船を沈める。時間を稼ごうと、船を減速させたり、舵を動かしたとしても、海流がそれを妨げるからな。ではゲームスタートだ。まずはいろいろ船内を歩くと良い。？

ビデオはそこで終わり、ザーツという砂嵐が流れた。

「レストニックか。この船は…。」

エンジはボソツと呟いた。映像を見終えると、テレビを消し、五人は各自の部屋に戻り、金持ちの客人に見えるようなきちっとしたスーツや華々しいドレスを着て、部屋を出た。

「お前らは二人一組で探せ。」

そう言ってセイルは沢山の人の中へと紛れていった。そのあと、エンジとウィンディ、ヴェシールとフザの二手に分かれて探すことにした。この豪華客船？レストニック？は巷でも動く大地とも呼ばれる船で、建物は七階建てにもなっていて、テニスコートやプールは当たり前用に付いている。他にも図書施設や映画施設などがあり、これだけのものを見て回るには、二日は掛かってしまう。エンジとフザ船の中に備えられた一流レストランに向かうと、綺麗な音色が聞こえてきた。レストランの中に入ると、店内の皆がご飯を食べながら、音楽に酔いしれている。なぜかという、音楽団の中にはイケメンが勢ぞろいだからだ。それにその中でもある一人にフザは吸い込まれてしまった。

「凄いかっこいい人がいる…。」

フザが目を大きく開いて、心臓をドキドキさせていた。

「確かにあのヴァイオリニストはカッコイイな。」

男から見ても、カッコイイと思える男は音楽団の中で一際、目立っている。彼らの前にはわざわざテーブルを動かして、間近で見える距離に近づいて、そこで彼を見ながらお茶を飲んでいる。フザがボーっと見つめていると、ヴァイオリニストはフザに気づいたのか、パチンとウィンクをした。それを見た途端、頭から湯気が出てくるようなくらいの恥ずかしさが一気に上がってきた。

「そんなことより、ここにはあれっぽいのはいるか？」

ヴェシールに肩を叩かれ、フザは本題を思い出した。

「ここにはいなさそうだね。つ、次に行こう。」

フザはせこせここと、ヴェシールを押しながら一流レストランを出

て行った。

一方エンジとウィンディは六階の図書施設を覗いた。

エンジは人よりも本を探すのに夢中になっていた。

「ちよつとなにやってんの？」

「悪い。ちよつと探し物を…」

エンジはバーツと見ながら、本を探したが目的のものはここになかった。

「此処にもないか」

「ここはいなさそうだから。上に行くよ。」

そういつて七階の屋上のテニスコートの前に着ていた。夜遅いからテニスをやっている人はいなかった。だが沢山の男女のカップルがそこでイチャイチャしていた。

「ウィンディ。俺たちもこんな感じで潜入しようか？」

エンジが頬を少し赤らめながら話す、ウィンディは話を聞かず、イチャイチャしているカップルを一つずつジロジロと凝視している。ちよつと期待した展開が実現できず、溜息をついていると、一人の肌の白い女性が話しかけてきた。

「お一人ですか？」

「そうですけど…」

「ご一緒してくれませんか？」

思わぬ展開にエンジは鼻の下を少し伸ばしてしまった。それはいけないと、元に戻し、ウィンディから離れたところのベンチに座った。

「あの、お名前は？」

「メージェです。お名前は？」

「俺、エンジって言います。」

お互いに名前を言い終わると、話題が無くなってしまい、沈黙の状態になってしまった。だけどエンジの胸のうちは心臓がバクバクと動いて、この時間がいつまでも止まってほしいと思っていた。す

るとウィンディがプンスカと怒って、エンジの前に現れた。

「何やってんの！早く探さないとダメでしょ！」

エンジの手を引っ張り、ベンチから離れようとする、急にメー
ジェが声をかけてきた。

「あの…何を探しているかわかりませんが…私もお手伝いしまし
うか？」

「是非！」

エンジはメージェの手をとり、紳士のようになってベンチから立
たせた。

「ちよつとダメだよ…他人に？烏？探しを手伝ってもらうのは…」

「大丈夫だって。少ない人数で探すより、大勢で探したほうが早く
見つかるだろ。」

エンジはメージェの顔を見てはデレデレと顔をにやけさせていた。
そんな姿のエンジを見て、セイルと一緒に良かったと残念がついてい
る。

その頃一人で行動しているセイルはというと、自分の部屋に戻って、
ウアラクの乗る龍の能力を使っていた。

「何か解るか？」

「ダメです。近くにはいないみたいです。」

それを聞くと、ウアラクを武器の姿に戻し、部屋を出た。普通の
乗客に紛れて、船内へと足を進めると、三流乗船者がたくさんいる
酒場に入った。軽やかな音楽が流れて、みんなは好き勝手に踊って
いた。バーカウンターに座って、酒を頼んだ。酒が出てくると、す
ぐさまグビツと一気に飲んだ。あと何時間で夜明けになってしまう
かと時計を見ると、タイムリミットまでは三時間を切っていた。

「このままじゃダメだ…」

残り三時間だと、千人近く乗っている乗客をすべて見るのは到底
無理。良い案が浮かぶように甲板へ向かおうとすると、奇妙な生き
物を見つけた。蛙の頭、猫の頭があり、さらに人の頭まで持ってい

る蜘蛛のような生き物を見つけた。見つければ一騒ぎの生き物だが、乗客は何事もなく酒や踊りで楽しんでいる。セイルはそれを凝視している、カサカサと甲板の方へ逃げていく。それを見失わぬよう追っていると、甲板に出て船の先端の方へ向かっていった。そこには人の姿があった。奇妙な生き物はその人へと近寄っていく。セイルも近づいてその人の姿を見た。こんな夜中なのにサングラスをかけて、背中に剣を背負い、腰には二丁の銃を備えていた。

「待っていたぞ。セイル・K・ラディア。」

セイルの名前を言うと、サングラスを海に投げ捨てた。顔を見ると、綺麗で黒く長い髪を持った女性だった。年齢はセイルと同じか一つ上くらい。

「それじゃあ、お前が？ 烏？ か？」

「これは任務だ。ついでに面白いものを見せてやる。」

そういうと、背負っていた剣は先ほど見た奇妙な蜘蛛となり、備えていた銃は鎧を着けたハトとカラスに、右手につけていた箆手が、弓を持つ男になった。さらに海から波に乗って人魚が甲板に飛び乗ってきた。

「わかるだろ？ みんな、お前の持つアモンとウアラクと同じ仲間。」
セイルは自分の目も耳も疑った。何故この女性がアモンやウアラクの事を知るのか、それに同じものを持つことが出来るのか。

「ミシエルドのように無理やりコントロールしているのではない。お前と同じように扱っている。」

この前戦ったばかりのミシエルドの名前まで出てきた。何故任務を達成したばかりの情報が流れているのか、無理やりコントロールをしていないということは、つまり同じことが出来る人間が二人以上いるということなのか。

「何を言おうが、俺はお前を殺すぞ。」

「それは私とて同じ。それに頂くよ、その二品。」

「こいつらを奪ったところでなんになる？」

「知らないなら、結構。ただ奪うまで。」

人魚は海に戻り、変身させた生き物達を再び武器の姿に変えて、剣を構えた。話に答えが見えず、不に落ちないまま、セイルも刀を構えた。

「折角なんだ。名前ぐらい教えろ。」

「エアーキー・J・メルシア。」

名前だけ言うと、いきなり斬りかかってきた。それを弾き返し、斬りかえそうとするのだが、相手はそれを箆手で防いだ。

「なかなかの強者だ。」

すると後ろの建物の屋上のほうから大きな爆発音が聞こえた。

「安心しろ。開戦の合図だ。」

箆手で弾くと、剣を横に振った。

「ほう。」

セイルは避けたと思っていたが、思ったよりリーチが長く、腹部の服が切れてしまった。

第二十五節：豪華客船レストニック（後書き）

毎月一日に更新しようと思うのですが、いろいろと忙しくて、うまくできてません。

なるべくその前後には更新したいと考えてますので、ぜひ読み続けてください

第二十六節：シャンベイン家（前書き）

あるキャラの過去が少し明らかに。。

第二十六節：シャンベイン家

エンジたちはさきほどの大きな爆発を目の前で見た。乗客たちはなにかのイベントが始まると思ったのか、慌てることもなく船内へと下りていった。

「皆行くなら、ここはいいな。次に行こうか。」

メージェにそう言った途端、頬を思い切り殴られてしまった。何事かと思ってウィンディはナイフを構えて、エンジをゆっくり起こした。メージェは徐にドレスを脱ぎ出し、ダイバースーツのようなピツタリとした動きやすいスーツ姿になった。エンジはその瞬間もデレッツとしていたので、あきれて起こしていた手を離してしまった。

「もしかして？ 烏？の一人なの？」

「そうですね。ウィンディ・シャンベイン様。シャンベイン家の者がなんでこんなところにいるんですか？ 可笑しくないですか？」

メージェの言葉にドキッと胸を揺らされた。

「私の何を知ってるっていうの？」

ナイフで攻撃をするが、意図も容易くよけられてしまった。

「なんでも知ってますよ。セイルに恋をしていること、どうして？ ETHICS？ に入ったのか、何故家出したのかも。」

ウィンディの顔はだんだんと険しくなり、攻撃のキレが上がってきた。

「あらら、怒っちゃいましたか？」

メージェは相手を怒らすような口調を使いながら、見事なまでに攻撃を全て避けていく。その身のこなしは？ ETHICS？ 同等のものだった。メージェはウィンディが乱れ突きをしているのを避けながら、素手で攻撃し、ダメージを与えた。それは溝に入り、ウィンディはプハッと血を吐いてしまった。

「シャンベイン家のご令嬢様。怪我をさせてすいませんね。奴隷商の金持ちが…」

嫌味を込めて言う口調にウィンディは我を忘れて、怒りを露にした。我武者羅にナイフを振り回し、メージェに攻撃をし続けた。

「ウィンディ！！落ち着け！！」

エンジがいくら声をかけても、自らをとめようとはしない。銃を取り出し、ヒョイヒョイと動き続けるメージェに狙いを定めようとするが、余りに動きが早すぎて、撃つとウィンディにも当たりそうで仕方がない。どうしようかと悩んでいると、足元から赤い炎が迫ってきていた。

「まさか火事！？」

そのことにウィンディはまだ気づいていない。

「残念なご令嬢。」

そう言っ、腹部に思い切り蹴りを入れた。またグツと血を吐くが、ウィンディはメージェの足を必死に掴んでいた。

「離さない！！」

言葉を無視して、ウィンディは手に持つナイフをメージェの大腿部に思い切り突き刺した。

「お返し！」

「この！！」

怪我をしていないもう片方の足で、再び腹をけろうとすると、エンジが銃弾を放ち、右肩を貫通した。

「もうやめろ。テロ組織？鳥？の一員のお前をETHICS本部に連行する。」

肩を撃たれ、大腿部をやられて諦めたのか、膝をつき、その場に座った。そのまま黙って水平線を眺めていた。

「ウィンディ、大丈夫か？早くここから逃げるぞ。」

エンジは銃をしまうと、ウィンディの傍に駆け寄って、ウィンディを優しく起こした。

「大丈夫。これくらいなんてことないから。」

エンジは看護をしていると、メージェは不意にフツと笑い出した。「タイムアップみたいです。」

その言葉を聞き、エンジはメージェの見る方を見た。船から大分遠いところから黒い戦闘機が飛んできた。

「なんだあれは？」

「我らのリーダーがやってきましたよ。」

エンジはやってくる黒い戦闘機に銃口を向けた。

「誰だかわかんないけど、俺が倒してやるよ。それより早くここから下りるぞ。」

エンジはメージェを担ぎ、ウィンディはおなかを押さえながら、建物の屋上から離れようと下へと通ずる扉を開けるが、もう火はそこまで迫っており、どうすることもできなかった。どうすればと考えていると、急にメージェが動き出し、エンジンから離れた。

「下へ連れてってあげるよ。」

そういつて、エンジの背中に回りこみ、延髄に手刀を食らわせて、フラついたところを見ると、懇親の一撃と言わんばかりの蹴りを食らわせて、エンジを策の外へと飛ばした。

「何するの！！」

ウィンディはなんとかしようと手を伸ばすが、全く届かず、エンジは七階も下の甲板へと真っ逆さまに落ちていった。

「アナタは私と一緒に行きましょうか？ ウィンディ・シャンベイン様。」

何かを湿らせたハンカチをウィンディの口に当て、それを吸わせた。それを吸うと、ウィンディは一気に全身の力が抜けて、体をメージェに預けた。メージェはウィンディを落とさぬようしっかりと抱えながら、船に近づいてくる黒い戦闘機が垂らしたロープを掴んで船の屋上から離れた。ロープは自動的に巻き上げられて、メージェは戦闘機の中へと入っていった。

「シャンベイン家のご令嬢はちゃんというだろうな？」

「大丈夫ですよ。リーダー、さっさと破壊しちゃってください。」
「なら始めようか……」

黒い戦闘機は一度船から大きく離れて、大きく旋回してきた。

第二十六節：シャンベイン家（後書き）

久々の更新です。

楽しんで読んでください

第二十七節：パニック（前書き）

今回はヴェシール・フザVS烏です。
ごゆっくりお読み下さい。。

第二十七節：パニック

ウィンディたちの争いとはほぼ同時期に船内では：

一流レストランを出て、広いエントランスに出ると、大きな爆発音が聞こえた。船内がざわめく中、レストランからサックスを持った男が歩いて出てきた。その男はフザの肩をポンポンと叩き、フザが振り向いたところを殴りかかろうとしたが、ヴェシールが腕を掴み、未然に防いだ。そして気がついた。

「テロ組織？ 烏？ とはお前みたいだな。」

「だったら、どうするんだい？」

そう言いながら、先ほどレストランで吹いていたサックスを持つと、それで男の手首を握るヴェシールの腕を殴った。ヴェシールの手が離れて、男の手が自由になった。サックスを背中の方へ回し、腰辺りからタクトのようなものを取り出し、フザに攻撃を仕掛けた。しゃがんでそれを避けた。その攻撃は柱に突き刺さり、数秒もたたないうちにその刺さった箇所はどんどん腐食して、ボロボロと崩れていった。近くにいた乗客たちは、急にパニックになって騒ぎ出した。

「このタクトの先には毒がついてんだよ。少しでもチクツとすれば、お陀仏だぜ。」

そう言って再び、船の柱にタクトの先を当てると、シューっと、壁が煙を上げて溶けていく。其れを見ると、うまく動くことができずにいた。

「フザ！ お前は乗客たちをレストランや部屋の中に連れて行け。」

そうしてヴェシールは壁に飾られている豪華な姿の槍を手にして構えた。パニックを起こして逃げ回る乗客を振り払いながら、ヴェシールは攻撃を仕掛けた。威力のある一撃をサックスを持った男は軽々と避けた。

「まったく馬鹿力だな。このサクス様を甘く見るな！」

タクトを槍の柄に当て、槍の真ん中を溶かし、真っ二つにした。そのまま真っ直ぐ攻撃を続けようとするが、ヴェシールは折れた片方で思い切り頭を殴り倒した。

「危険な奴だ。」

両手に持つ槍を捨て、タクトを蹴り飛ばし、サックスの手から遠ざけて、取り押さえようとするが、外からキャーキャーと逃げてきた乗客たちに押されてしまい、押さえることができなかった。その隙に起き上がられてしまった。サックスは息を荒げ、頭から血を流しながらも起き上がり、背中に回したサックスをまた戻し、口を付けた。「こいつの力を見せてやるよ。」

そう言って、サックスに謎の液体の入ったボトルを取り付けて、思い切り吹いた。するとサックスの口からゴーツと言う音と共に炎が吹き出た。それは乗客の服に燃えてしまい、燃やされてしまった乗客から一気に人は距離を取り、自分にも燃え移らぬよう必死にレストランの中へ入ろうとしていた。燃えてしまった人は床に転がり、火を消そうとしていた。

「酷い、関係のない人まで。」

ヴェシールは着ていたジャケットを慌てて脱ぎ、何度も炎をはたき、やっとのことで消すことができた。

「さすがのテロ組織だな。だが俺たちも負けてられないぜ。」

そういつて素早くしゃがむとヴェシールの影にいたフザがライフルを構えていた。ズドーンと銃弾を放ち、弾はサックスの右頬を掠めた。血がタラーツと流れるのを感じ、サックスは頬の血を手に取り、紅く染まる指先を眺めた。その手はプルプルと震え出し、そのまま拳をつくった。

「このアマー!!」

サックスは怒りに駆り、再びサックスで炎を吹き荒らした。それは建物の壁に燃え移り、建物全体は大きな火事となってしまった。また乗客はパニックで外へ逃げよう逃げようと狭い窓から建物の外へと出て行く。

「いい加減にしろ!!」

ヴェシールはサックスの吹く火炎を避けて、サックスを奪い取ろうとするが、かなりの熱を帯びていて、奪い取ることが出来なかった。「熱伝導ですげえ熱くなってるだろう。こいつは特殊で俺が持つとは何にも問題ないが、てめえらには触れやしねえ。それに面白いことをしてやる。」

楽曲を奏でるように音色を出すと、炎は生き物のようにまるで龍のように動き出し、その龍のように動く炎はヴェシールを頭から一思いに飲み込んだ。ゴォォと鳴る炎は振りほどこうとするヴェシールをいつまでも逃さず、燃やし続けた。

「もうそれ以上はやめて!!」

フザは炎の中で苦しむヴェシールを見ていられず、思い切り目を閉じていた。それでもヴェシールを救うために、目を開いて、ライフルを構え、再び放った。その銃弾は炎を吹き出すサックスに直撃した。その衝撃でサックスは爆発し、粉々になった。サックスが壊れると、炎は途切れて、ヴェシールはコゲた姿を現れた。遠くからじゃ生きているかどうかは全く解らない。

「またジャマしやがって……」

すると船に突然大きな揺れが起きた。何事かとサックスが窓の外を見ると、外はもう明るくなってきた。

「タイムアップだ…? E T H I C S ? てめえらの負けだ。」

そう言い残し、サックスが出て行こうとすると、誰かがサックスの腹部をスパスパと切り裂いた。サックスはそれを食らうと、ドタッと倒れた。

「好き放題暴れておいて、帰るのか。好い気なもんだね。」

その人は昨夜レストランのオーケストラの一人として、ヴァイオリンを弾いていた人だった。

「早く貴方も逃げなさい。もうこの船はテロ組織により破壊される。」

剣のようなものを楽器のケースにしまいながら、フザに告げると、

死にそうなくらいにコゲているが、息があるヴェシールの腕を肩に回して、立ち上がると一緒に建物から出て行こうとした。

「まったく：邪魔しやがって。」

ぼやきながらサクスはフラッと立ち上がり、隙だらけなことにニヤッと笑い、二人を背後から攻撃しようと飛び掛るが、ズドンとフザが放った銃弾を足に食らって、バタッと倒れた。

「助かった。早く出るぞ。」

「何したって、もう終わりだよ：船は沈むんだから。」

弱弱しい声を出しながら、床を這い蹲った。

「私達は諦めないから。」

そうサクスに宣言するとフザは二人を追いかけて、三人が外に出ると建物は大きな音を立てて崩れていった。空には大きな鳥のような黒い戦闘機が空を旋回して、船にバルカンや爆弾で攻撃をしていた。足元を見ると、息を絶ってしまっている乗客たちが沢山いる。空からの攻撃にキャーキャー喚きながら必死に逃げている。

「惨い。」

「本当に惨いですね。ところであなたのお名前は？」

「私か？私はリニス・A・レインだ。貴方は？」

「わ、私はフザ・クレイアです。」

「フザ、早く此处を去るぞ。後ろへ行けば、救命船があるはずだ。」

三人は倒れている人を踏まぬよう急いで、船の後ろへ後ろへと向かった。空から爆弾が飛んできて、船は爆撃を次々と食らって、船には次々と穴が開き、乗客は吹っ飛ばされていく。

黒い戦闘機は優雅に舞いながら、攻撃をし続けている。

「パニックはとても良い。自分の命を守るただけに、今まで大切にしていたモノも交友関係も全て捨てて必死に逃げる。実に面白いものだ。」

「酷い人。でも好きだから私はリーダーに着いていきますよ。」

メージェは戦闘機内部のパイプにウインディを縛りつけ、暴れなように足首も縄で縛った。黙らせるように口にギャグを噛ませた。

其れを済ますと、助手席に座り、シートベルトをした。

「さあどンドン破壊しようか…。」

飛行機は旋回して、爆弾を再び放った。

第二十七節：パニック（後書き）

久しぶりの更新です。

3月中に更新をしようと思いましたが、東北地方沖太平洋沖地震の影響でしなないでいました。

震災者の皆様。まだ復興には時間がかかると思います。ですが日本は根がとても強い国です。

絶望を浴びたと思いますが、希望だって必ずあります。

世界を、日本を、友達を、人を信じてください。

私からは節電や募金という形でしか協力することができませんが完全復興することを心から祈っています。

第二十八節：野望（前書き）

セイルVSエアーカーです。

第二十八節：野望

船の甲板で戦うセイルとエアーカーは：

人の戦いとは思えないぐらいのアクロバティックな戦いが繰り広げられ、二人は攻撃を繰り返すが、

避けては避け返し、防いでは防ぎ返しを繰り返し、決着が着くようには見えなかった。

セイルにとってここまで張り合える相手とは戦ったことがなかった。自分と同等、もしくはそれ以上の実力がある。

「手強い奴だ。」

「戦場が荒れてきた。早く勝負を終わらせよう。」

エアーカーは一丁の銃を取り出し、銃弾を放った。

その銃弾は炎を纏って、ぶれること無く真っ直ぐこっちに向かってくる。

セイルはその炎の銃弾を切り裂き、床に落とした。

「銃撃もできるとは、結構万能な奴だな。」

「喋る暇があるのか？」

セイルの様子を見て、エアーカーは炎の銃弾が出る銃で乱射した。それを刃の広い部分で弾きながら、セイルも負けじと、銃に変化しているウアラクを取り出し、二口の銃口から銃弾を放った。

「キサマこそ、銃撃は使えるのか？」

そこで銃撃戦が始まった。エアーカーの炎の銃弾という特殊な銃弾はセイルに当たらなくとも船に当たっては、燃やしていった。

一方セイルの銃は特殊な能力はないものの、一度に二発放てるぶん、現在の戦闘で有利であった。

それを補おうとエアーカーは一瞬、もう一丁の銃を掴むため、銃を備えられている腰を見た。

銃を掴み、二丁の銃を構えてたところで、目の前にセイルがいないことを知り、ピタリと動きを止めた。

「残念だったな。」

セイルはエアーカーが自分を見てなかった一瞬の隙を突いて、ジャンプして後ろに回りこみ、エアーカーの後頭部にウアラクの銃口を押し付けている。

観念したのか、エアーカーは構えた二丁の銃を床に落とし、ゆっくりと両手を上げた。

「お前らみたいな組織は何故こんなことを繰り返す？」

エアーカーは何も言うことなく首をかしげた。

「馬鹿にするのは、いい加減にしたらどうだ？」

ふざけた態度を見せるエアーカーに腹が立ち、後頭部に押し付けている銃をさらに押し付けた。

「なら、聞きたいんだけど。あなたは？ETHICS？に入って何がしたかったの？」

殺し？金稼ぎ？それとも権力を利用して好き勝手遊びたいだけ？」

セイルはエアーカーの並べる語句に鼻で笑った。

「お前なんかじゃ、俺の野望を考えることは出来ないな。」

船上は爆撃をくらって、至る箇所が穴ぼこだらけであったり、漏れたガスや油で火災や爆発が起きていたりしていた。

そんな中、冷静に二人は話をしていった。すると二人の間に急に爆弾が落ちてきて、其れを見ると、二人は一斉に離れた。

船上にはさきほどの爆弾によって生まれた煙によって、視界はとても悪かった。

「あいつ、何処へ？」

セイルが視界の悪い中、搜索していると、右腕をズバツと斬られて、大きな怪我を負わされてしまった。

「この視界の中でどうやって？」

いくら眼を凝らしても、煙が厚すぎて人影すら見えない。その上、呼吸も困難だ。

セイルは口元に掌を当て、煙をなるべく直接吸わないようにした。次の瞬間、炎の銃弾が煙の中を突きぬけ、セイルの左足を掠めて、

足を崩してしまった。

「確実に俺の事が見えてる。なら……」

セイルはズキズキとする右腕の痛みを堪えながら刀を強く握り、もう片方の腕で握っている腕を強く掴んだ。

「お前を煙ごと、吹き飛ばしてやる。」

その瞬間、瞳の色はスツと紅色に変わり、腕の筋肉が二倍に膨れ大きくなった。

その力で刀を思い切り振り回すと、竜巻のような斬撃の突風が生まれ、蔓延していた煙は一気に吹き飛んでなくなり、ガスマスクをしているエアーカーの姿を発見した。

ところがエアーカーは突風に吹き飛ばされず、斬撃でガスマスクが取れ、服が破れようが必死に耐えていた。そのエアーカーの瞳の色が先ほどとは違う、今のセイルと同じ紅色になっていた。

そして剣の刃先をセイルに向けて、力を溜めて構えていた。

「ありがとう。」

その言葉より先にエアーカーの体が稲妻のように動き出し、セイルの腹部を突き刺した。

さらにそのあと、稲妻のようにやってきた時の衝撃がさらに襲った。その痛みは内臓を吐き出させるぐらい辛いもので、口から腹部から大量の出血をし、力を失ってしまい、手に持っていた刀をスルツと抜けて落としてしまった。

エアーカーは突き刺したセイルをそのまま刀でゆっくりと持ち上げ、船の策の外に体を出した。

「意識があるなら最後に一つだけ。アナタは一体何がしたいの？」

返事がない。そう思って、海に落とそうとすると、ピクツと突然動き出し、セイルに突き刺さる刃を掴んだ。掴むと掌が切れて、血が流れるが、そんな痛みなど今のセイルには届かなかった。死にそうな眼を開いてエアーカーを睨み付けながら、不気味な笑みを零し、ゆっくりと口を開いた。

「ああ、教えてやろう。お前が微塵にも感じたことのない野望だ。」

全て…の武力の…解体…争い…の根絶…世界が…創りだしたのではなく…

自分達で…見つけ…る…真…実の…自由…正義…平和だ…。

この野望が…あるか…ら…俺はな…そう易々と…死ねないんだ…！」

言葉を途切れ途切れに苦しそうに言い終え、セイルは全身から力が抜けてしまった。

だがエアーカーの顔を見ようとするその目は生にしがみ付こうとしていた。セイルの言い放つ重い野望をこの耳で聞き、エアーカーは鼻で笑った。

「教えてくれて有難う。でもその野望は儂くも散ったわね。」

刀の刃先を下に向け、セイルは突き刺さった部分をすべっていき、重力に従って、海へと放り落ちた。

エアーカーはそれを見届けると、セイルの落とした刀と銃を回収し、空を舞う飛行機に明るい輝きを放つライトを手を持ち、振った。

それに気がついた飛行機はロープを下ろし、エアーカーを回収すると、その場から一度大きく旋回した。

第二十八節：野望（後書き）

今回も定期的に更新できず、すいません。

毎月1日には一度は更新したいと考えているんですが…
何かと忙しくて…

来月はちゃんと1日にできるようにします。

今月はもう一つ更新できるようにします。

この目標に向かって、忙しくても頑張りたいと思います。

駄文と感じてしまうかもしれませんが、

訂正して欲しい箇所、読みづらい箇所あったら

随時報告してください。勿論、全ての話で報告待ってますので。、。

第二十九節…その後…

ヴェシールたちは全力で船中を駆け抜けて、救命船を探した。

途中、空から落ちてきたエンジを拾い、四人で救命船のある場所へ到着した。

「まだ一隻有るぞ。」

ヴェシールの声を聞き、すぐに全員で救命船に乗り込み、

すぐに海へ下ろそうとするのだが、それを一度フザが止めた。

「ねえ、セイルは？ ウィンディは？」

「ウィンディは攫われた…」

船の壁にもたれかかり、力なく話した。

「セイルは強いから大丈夫だよ。」

ヴェシールの説得に無理やり納得させられ、四人で救命船に乗ることになった。

救命船を下ろし、必死に漕いで、豪華客船？ レストニック？ から離れた。すると黒い飛行機は最後に強力なミサイルを船の中心に撃ち込み、豪華客船を大きく真つ二つに割った。

割れたところから海水がドバドバと入り、巨大な豪華客船はゆっくりと海の中へと沈んでいった。

助かったのは乗客五千人中、救命船に何とか乗れた四人、数名のクルー、数十名の乗客だけだった。

その後警察や軍隊のヘリがやってきて救命船に乗っていたヴェシールたちを救助した。

ヴェシールとエンジは？ E T H I C S？ 本部に戻るとすぐに緊急の手当てが行われた。

フザは軽傷だったため、一人で上官たちに挨拶に行き、その後すぐに裁きを下す者に呼び出された。

裁きを下す者はその事件で持ちきりの新聞を何紙も読んでいた。

「ご苦労。この任務は優秀な君たちでもさすがに荷が重かったようだね。」

フザは顔も上げること何も言う事もできず、ただ歯を食いしばった。

「暫く休みなさい。それと休み明けの任務からリニス・A・レインが君たちと任務をこなすことになった。報告は以上。今日はもう帰って良いよ。」

初の任務失敗におどおどとしていたフザは意を決して、声に出した。

「あの、セイルとウインディはどうなるんですか？」

「任務に犠牲は付きものだ。」

「ですが…」

「もう五月蠅いから、そいつを追い出してくれ。」

秘書にそう指示すると、フザを無理やり部屋の外へと連れ出した。フザは一人放心状態になり、部屋に戻ったら、食事をすることもなく部屋にこもった。

JUSTICE TOWERの近くにある大都市オストウィブルのある建物の地下…

その大きな地下部屋には二人の者と大画面のモニターがあった。

大画面のモニターは何か映像を映していた。内容はレストニック船内で起きていた戦いだった。

其れを見ながら、二人は硝子の駒のチェスのようなゲームをしていた。

「この予想は、どちらもしてなかったな。」

「そうですね。ただ、こちらの駒が多少、違ったようです。あんな女はリストにいません。」

真っ白な髪の子と紫色の瞳の男はお互い、次の手を悩んでいた。そして紫色の瞳の男がナイトを動かし、一体のポーンを倒した。

「まだ三分の一が終わったばかりだ。ハーフタイムで一旦休憩でもしよう。キサマもさぞかし疲れたろう。」

もう一人の真っ白な髪の方は、ビショップでナイトを追って倒した。

それを見て、真っ白な髪の方がふと呟いた。

「ゲーム進行、三分の一であなただのチームの優秀なナイトが死んだ。」

続けて紫の瞳の男がそのビショップをポーンで倒した。

「そのように見えるな。チェスではやられれば、死にっぱなしの兵だが、このゲームは個人の死を賭けるものではない。生きていれば再び戦場に舞い戻ってくるさ。不死鳥のようにな。」

紫の瞳の者が一つ駒を動かすと、真っ白な髪の方は先ほど倒したばかりのナイトを盤の右隅に設置した。

「ホント、此のルール。素晴らしいと思いますよ。倒した駒を味方につける。」

その手を見て悩んでいると、紫色の瞳の男は立ち上がり、地下室を出て行こうとした。

「あれ、逃げるんですか？」

「しばらく予想したことは起きない。これより二十日間休戦とする。」

「勝手ですね。まあいいですけど。」

「私は急いでいるんで早く決着を着けたいと思っている。」

「まあ、予想を待ちましょう。それにしてもあなたは本当に生にしがみ付いていますね。そんな好きですか？このくだらない世界が。」

二人は靴音をカタツカタツと鳴らしながら、外へ出る階段をゆっくり上がっていった。

点きっぱなしのモニターには、エアーキーに突き刺されたセイルの映像が流れていた。

「飢餓、テロ、紛争。他にもあるが、問題だらけ、いや問題しかな

い世界だ。

其れを正すことの出来るのは神となる私しかない。なんとしても勝たなくてはいけないのだ。世界のために……」

紫の瞳が異様に輝いて見えた。真っ白な髪の子はその様子を伺いながら、喋り出した。

「それならもう、いつその事、この世界を破壊しても良いと思いますが。」

まあ私の場合は生より力が欲しいですからね。だからアナタに勝負を挑んでるんです。」

二人は地下室を出ると、人ごみの中へと溶け込むと、それぞれ別の方向へと進んでいった。

豪華客船？レストニック？の任務から十日後：

三人はとりあえず、体調を取り戻し、任務も受けれるようになった。
「僕らは四人しかいない。まだ病み上がり的なところがあるから、簡単な任務を行うよ。良いね？」

リニスは三人に指示し、新たな任務を受け取って、本部を出て行くこうとすると、入り口にとっても懐かしい人がいた。

「よお！お前ら、元気にしてたか？」

「ロード上官？」

「まさか……」

三人に突然現れたことに仰天し、空白の時間が流れた。

「そのまさかだ。」

ロードの姿をはっきりと確認すると、三人はロードの胸に飛びついた。そのときにフザは出会えたあまりに感動して泣いてしまった。エンジはここまでやってきた任務の経緯を話したり、ヴェシーはもっと俺を強くしてくれと訓練を頼んだりしていた。

「何処行っちゃった？ロード・ゲール。」

三人以外の声がロードを呼んだ。後ろを振り向くと、三人の上官

代行をしていたグレカルが腰に手を当ててやってきた。

「裁きを下す者から直々に任務を与えられていたもので。突然いなくなつて申し訳ない。」

「なら長期任務お疲れじゃつたの。」

そういつて、グレカルはロードに背を向けて、建物の中へと入つていった。

「お前ら、そういえばセイルとウィンディはどうした？」

「実は…」

十日前の任務の情報を三人は話した。其れを聞くと、ロードは氣を落としたが、裁きを下す者に呼び出され、その表情を隠して、すぐに向かった。

「ロード・ゲール上官。次の任務は、私から宣告する。君の小隊はしばらくの間、フリーダム・タワーの警備に当たってもらう。」

「そうですか。でも二人欠けているのですが…。」

「だから言っているんだよ。我々はあの小隊に重い任務を与えすぎたところもある。暫くは力を蓄えてもらいたいからね。君にだけ言うが、今まで相手はテロ予告だけで何も行動してこなかったが、次期に巨大テロ組織がタワーを崩してくるはずだ。それと君には小隊が任務中の間、ファシリティへ入ってもらうよ。」

「何故ですか？」

「己に問え。」

裁きを下す者の目つきはいつもと違っていた。指を二回鳴らすと、普段の？ETHICS？のコートとは違う色のコートを来ている人らが四人やってきた。

「こいつらは…」

「咄嗟に逃げるかもしれないからね。彼らは君より上位の位にあるBE-9の四人だ。では連行してくれ。」

四人はロードを連れて、ファシリティの監獄へと連れて行った。リニスたち四人も与えられた任務へと出ていった。

第二十九節：その後…（後書き）

自分で書き分けている部分で今回が最初の部分でラストになります。

ですが物語はまだ1／3しか終わってません。
のんびりと更新していきますが、これからも応援をお願いします。

第三十節：希望の星（前書き）

このお話から第二章という形で始まります！

第三十節…希望の星

爆撃で崩れ行く船の甲板の先端、
ガスマスクをつけた者がセイルの腹を串刺しにして宙に浮かせていた。

「さようなら、？ E T H I C S ？ の希望の星。」
海へと落ちていくセイルにそう告げると、刃に付いた血をふき取り、
組織の黒い飛行機に乗って船を脱出した。

微かな意識でセイルは右手でナイフを取り出し、生きるという本能
を表すかのように船に突き刺した。
しかし勢いは突然止まることなく、ガガガ…と船の壁を裂きながら、
ゆっくりとだが勢いをなくし、なんとか止まることができた。

生きてる……

まだ生きてる……

セイルは少しずつ意識を取り戻し、苦しい体勢のまま、なんとか必
死に船にしがみついていた。

「そろそろ沈めるか。」

鼻唄を唄いながら、ヨラバはハンドルを大きく右に回した。

黒い飛行機は一度遠のいたと思うと、大きく旋回し、船の中心目掛
けてミサイルの照準を合わせた。

何の戸惑いもなく、ヨラバはミサイルを放ち、バシューツと放たれ
たミサイルは海と船底の境目に当たり、その爆風はセイルにも降り
注ぎ、必死に壁に突き刺したナイフの柄を握っていた。

ヨラバによる無数のミサイル攻撃で船は半分に割れ、ゆっくりと沈
もうとしていた。

刀を突き刺してぶら下がるセイルは、どこかに助かるものはないかと、あちこち見ていると、爆撃によって開いたと思われる穴を見つけた。船が少しずつだが沈んでいくとする。

貫かれた腹部を抑えながら、船の壁を蹴り飛び、なんとか穴のあいだにいる船の壁に手をかけた。

船内の床はもうすでに浸水していて、水浸しとなっていた。扉が開いていたため、移動に困ることはなかった。

腹部から流れ続ける血を必死に抑えながら、部屋から部屋へと歩き回り、なんとか包帯を見つけ、それをきつく腹に巻いた。

その間にも、海水はどんどん入ってきて、船体はゆっくりと上がって、海と垂直になった。

その時、重力の影響で壁に叩きつけられてしまった。一緒になって壁に叩き付けられたトランクは蓋が開き、中には綺麗なクッションが敷かれ、そのクッションに大事に守られているものは世にも珍しい大きく朱い卵があった。

セイルは包帯を巻き終えると、木製の机の脚を折り、机の脚を持って、近くにある大きめの窓を叩き割り、脚のなくなった机を抱えて、出て行こうとしたのだが、トランクに納められた朱い卵に惹かれてしまい、そのトランクも手に取り、割った窓から海に飛び込んだ。

出て行くと船はゆっくりと海底に向かって沈んでいる。

流れに巻き込まれぬよう、痛みを堪えながらパドリングを続けて逃げようとするが、大きな傷を抱えては上手いこと泳ぐことも出来ず、流れに巻き込まれてしまい、セイルは船と一緒に海の中へと沈んでしまった。そのうち意識も失い、呼吸もすることができず、もう死ぬ寸前だった。そんなハプニングが起きても、朱い卵の入ったトランクだけはなぜか離さずにいた。

海底の暗闇へと連れていかれる中で、手元の朱い卵が動き出した。

ソナタはまだ死んではいけない：

まだ果たさなくてはいけないことがあるから：

心に轟く謎の声。

するとトランクの隙間から光が零れ、鍵が掛かっていたはずのトランクが開き、朱い卵がセイルの前に浮かんで、海底の闇に負けない太陽のような輝きを放っていた。

すると朱い卵にひびが入り中から美しく朱き鳥が現れ、セイルを引っ張って海上へと向かった。

その時セイルは気持ちがいい夢を見ていた。

温かく柔らかな大きな背中の上に乗る、気持ちよく眠りながら、天高くへと舞い上がっていく夢を見ていた。

ザザーッと波の音が聞こえる。

心地よい風が吹いている。

ここは…と思いながら、ゆっくりと立ち上がった。ずいぶん人気がない砂浜だった。怪我をした腹部を触ってみると、衣服に傷は残っているが、刺されたはずの腹部の傷ななぜか完全に癒えていた。

「どういうことだ…俺は生きている？」

そう呟きながら、立ち上がって歩き出そうと、傷は癒えているとしても、大量の出欠をしたせいで貧血となりフラフラとして、目眩も起きている。バタッと倒れてしまい、歩くことができず、その場

に倒れ、仰向けになった。

第三十節：希望の星（後書き）

2ヶ月ぶりの更新です。待ってた人はいるかな……。今回はセイル目線で爆撃テロの脱出を描いてます。

前書きにも書きましたが、ここから第二章になります。これからも続きますので、応援お願いします。

第三十一節：フォレスター

眠っているとチクチクとした針の痛みが眠りを妨げてくる。手で払ってもしつこく突いてくる。それに腹を立てて「邪魔をするな」と吠えて、フラッと立ち上がった。

相手の姿を確認すると、相手は腰周りに、布を巻き付けているだけの黒い肌の民族だ。たぶんこの辺りの原住民だろう。手には石の槍を持っていて、セイルを警戒して構えている。この場を逃れようと体制を低くして、素早く動き出そうとしたが、体に痺れを感じ、砂浜にまた倒れてしまった。たぶん槍に痺れる毒を塗ってあったと思われる。民族はセイルの動きが止まったのを見ると、太い蔓でぐるぐる巻きにして縛られると、民族はセイルを担いで砂浜からワッセワッセと掛け声を出しながら、広々とした草原を通り、森の中へと入っていった。

虚ろに開く目に映るのは森の中にたくさんの家が立ち並び、たくさんの原住民が住んでいた。セイルを運ぶ男たちは、円になって並ぶ家の真ん中にある家へと連れて行った。

だが疲れが出たのか、セイルは再び眠りについてしまった。

目が覚めると、そこには真っ白な肌をした二人の少女がいた。

「ここはどこだ？」

二人の少女はセイルが起きるのを見ると、父親のような人にそれを伝えに行った。それを聞くと、村長は自分の行っていた作業をやめて、セイルをゆっくりと起こした。

「よくお眠りでしたね。」

一人の少女が、コップに入った水を渡した。セイルはそれを受け取り、グビグビっと飲み干した。続けてもう一人の少女が渡した水も受け取り、それも一気に飲み干した。

「ありがとう。ここはどこなんだ？」

「ここはグランネード大陸にあるフォレスターの村です。」

グランネード大陸。セイルたちがいつも暮らしている大陸の南に位置する大陸である。フォレスターとは都市から離れて暮らし、基本的に狩猟採集を主にして生活をしている先住民のことを指す言葉である。

「誰であつても助けてくれたのはありがたい。」

セイルは深々と頭を下げて、御礼をした。

「しかし随分寝ていましたね。あれから十日ぐらいですかね。一体何をしていたんですか？」

「そんなに寝ていたのか……実は大きな仕事をしていてね。つい意識を失ってしまったんだ。よく俺が倒れていることを見つけてくれた。感謝する。」

「いやいや気がついたのはこの子たちなんだよ。」

そういつて、村長と思える人は白色の肌をした二人の少女をセイルの前に出した。

「アナタから向かつて、左にいるのがラー、右の子はムーと言つて、この村の偉大な三姉妹の双子ちゃんなんですよ。」

「偉大な三姉妹？」

「そう。この子達はたくさん未来を見ることが出来る。アナタがあの海岸に流れ着いてくることも見えていた。」

セイルはありがとうと一人一人に言いながら、二人の頭を優しく撫でた。二人はようやく慣れたのか、セイルに甘えるようになった。

「三姉妹と言っていたが、もう一人はいないのか？」

「ええ。一番上の長女は、このフォレスターとしての生活を嫌っておりまして……家出というかなんというかなんですが……さ、そんな暗い話はさておき、本日は復活パーティーを開きましょう。村中の人々が心配してくれていたんですよ。」

村長がそういうと、二人は動き出し、テクテクと走って、台所に立つ母親に今日はパーティーだといつてはしゃいでいた。これが平和の姿なのか……人の有るべき姿なのか……そんな光景が羨ましく微笑ましく見えた。なぜなら自分の行っている仕事、世界、そして生き

てきた道のりにあれだけ暖かいものは存在しなかった。だから余計に心を振るわせた。

落ち着いたセイルはそのときあることを思い出した。微かな記憶だが、エアーキーが何かをセイルに呟いていた。助言だったのか、よく覚えてないが、一言だけはつきり覚えている。

？お前も私もゲームに利用されている一つの駒だ。？

こう言われている。ゲームとは一体何を指しているのか、今のセイルにはまったくわからないことであつた。二人の少女はキャッキヤと喜びながら、セイルの手を無理やり引っ張り、村長の家の外へと連れ出した。村中央の台座に上げられ、そこに座らされた。その両隣には二人が座つた。

「ラー、お兄さんの事好き。だからもう苦しんで欲しくない。」

「ムーもお兄さんの事好き。だからもう傷ついて欲しくない。」

二人がやつとセイルに口を開いてくれた。その言葉は、セイルが何をしてきたかを知っているかのような話し方だった。セイルが聞き返そうとすると、そのあとゆっくりと村長がハッハッハと笑いながら上がってきた。

「随分気に入られたみたいですね。」

「そのようだな。」

セイルは優しい眼差しで二人の顔を見た。するとこの村独特の料理が運ばれてきた。周りの森で取れた牛であろうか。其れの丸焼きのようだ。二人の母親のような人がナイフで肉を大きめに切り分け、セイルの目の前の大きな葉の上に置いた。

「この村で一番の食事です。遠慮なく食べていただきたい。」

セイルはサツとお辞儀をして、少しずつ食べ始めた。それは村長さん、ラーとムーにも分け与えられ、四人は美味しく食事を取った。周りの民はそれを惜しうに見ながら、また狩りへ出るため、村の周りの森の中へと入っていった。

第三十一節：フォレスター（後書き）

連投します。。

今回はあまり改行していないので、読みづらい箇所が至るところにあると思いますが、読んでみてください。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1659e/>

ETHICS

2011年8月2日03時23分発行